

1-431



學叢書

第壹編

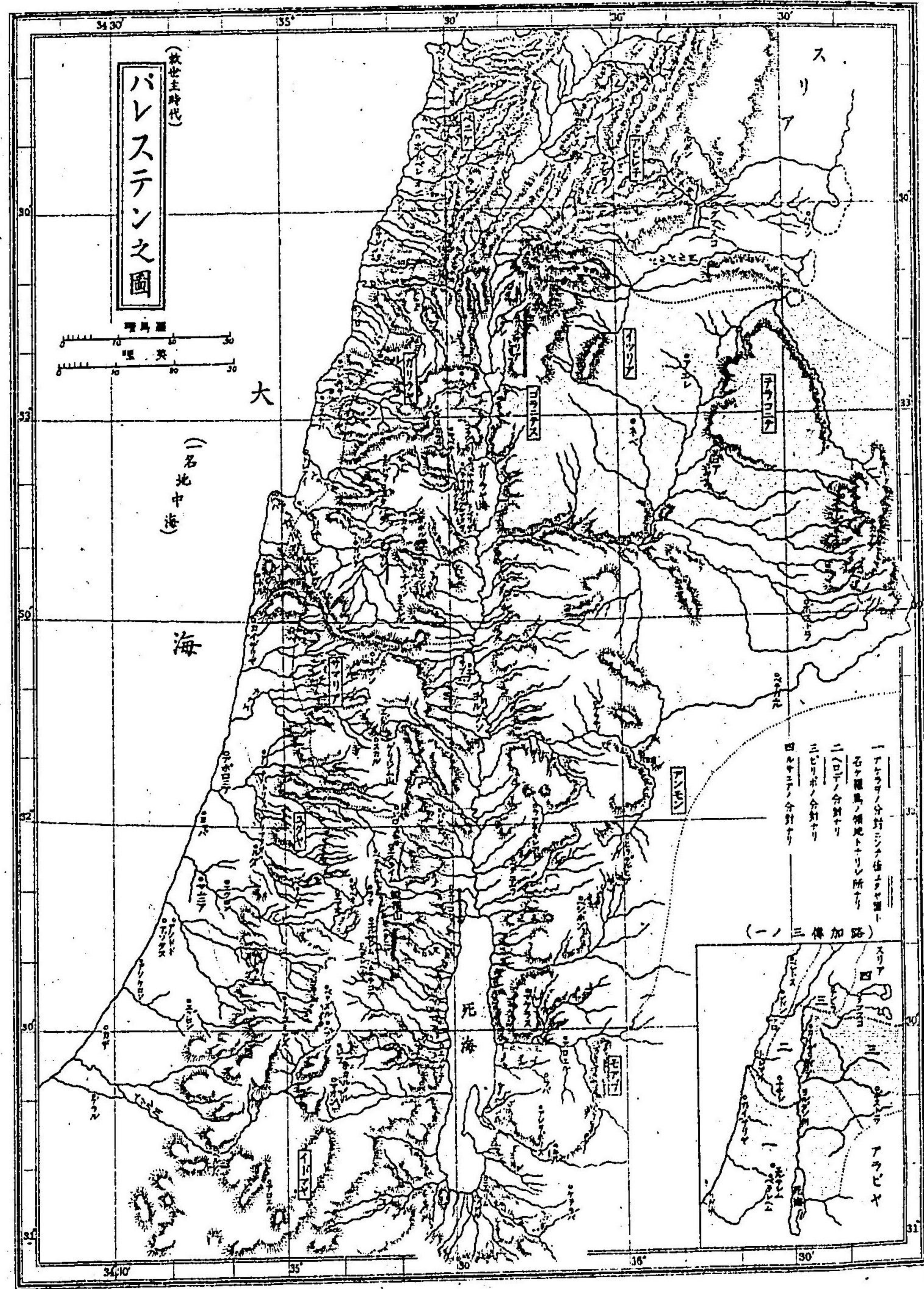


耶穌基督

ニウトン神學校教授 リー ス 著

米國神學士田中達譯

東京 警 醒 社 書 店



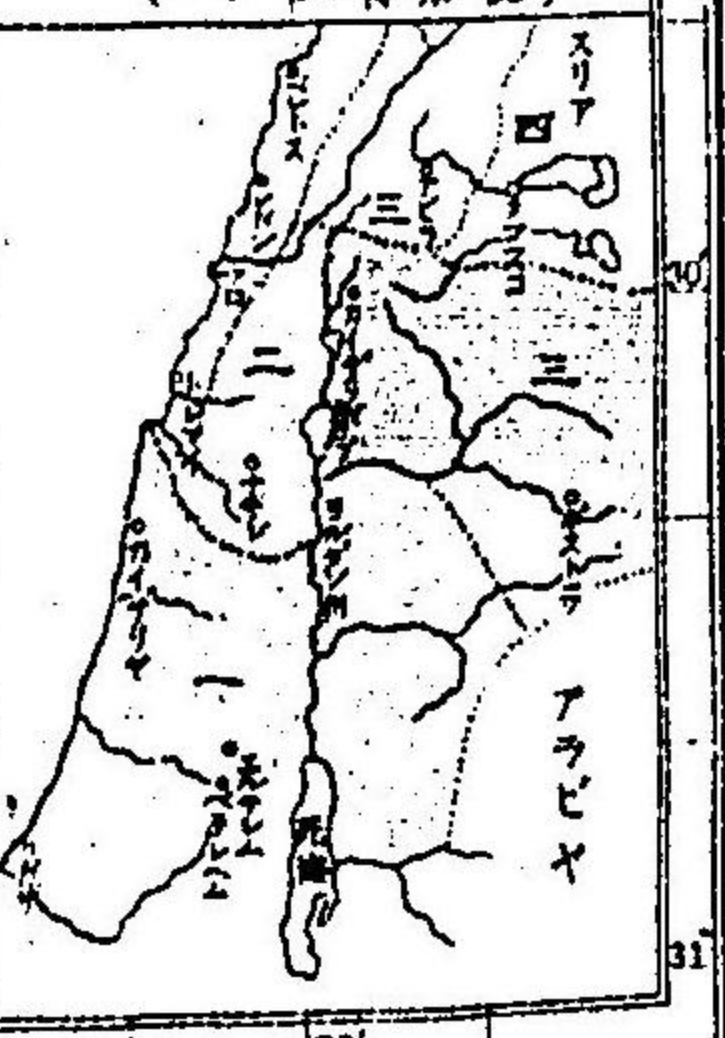
パレスチン之圖
(救世主時代)

英里 0 10 20
公里 0 10 20

大
海
(地中海)

- 一 アナトリア半島のシリア地方に在り
- 二 エジプト半島のシナイ半島に在り
- 三 ペルシア半島のメソポタミア地方に在り
- 四 アラビア半島のアラビア地方に在り

(一ノ三海加路)



本書は、元「ブラウン」大學教授にして今「エール」にあるケンントケントと前「エール」大學教授サンデルサンデルススが主幹せる「聖書研究者歴史叢書」の第七卷を譯せるものなり。原書題して「ナザレのイエスの傳ナザレのイエスの傳」といひ、北米ニウトニウトンン神學校教授ラツシユラツシユ、リースリースの著なり。敢て一家の見識を具へたる著述といふにあらざるも、公平に諸家の説を參酌し、近代の知識を應用し、保守的神學の域を脱して而も極端に馳することなく、終始敬虔の念を以て、條理明晰に且つ記し、且つ論じたるどころ、亦好著たるを失はず。是れ余が多く多くの基督傳中より、特に此の一書を撰びて、譯出したる所以の理由なりとす。今や基督學に關する明了の答辯は、眞面目なる研究者の何人も皆聞かんと欲するところ。此の書若し此の人々の參考に資する所あらば、豈啻に譯者の喜び而已と謂はんや。卷尾に加へたる附録は、或人は見て以て贅疣贅疣となさん。余も亦

一時は斯くの如き感を懷き、翻譯を中止せんかとも思へり。されど英獨の原書に就て、研究するを得ざる人にて、之を讀まば、また大家の説の異同を知り得るだけにて、無益なりと言ふべからず。況んや、英獨の書籍を讀み得る人に取りてをや。之に加ふるに、聖書の解釋學上の大問題たる種々の點に對し、研究の端緒を與へ居るもの尠からず。是れ余が之をも譯述するに至りたる理由なり。

本書中パレンステナ全部を代表する場合には、猶太と書し、その一部を呼ぶ場合にはユダヤと書せり。猶太人ユダヤ人の區別亦之に準ず。之と等しく福音書とその著者とを分つために、書名の場合には漢字を用ゐ、著者の場合には假名を用ふるを規則とせり。讀者乞ふ、幸に余の意のある所を諒せられんことを。終りに一言したきは、原著者リース氏は、余の學びしハートフナ

ルド神學校の出身なりといふ。余近頃或人より之を聞き得て、奇遇の念ひを禁ずる能はず。されど又省みて不肖の後輩たるを思へば、汗顔に堪へざるなり。

主降生一千九百〇六年一月廿二日寒風吹き荒む夜

東京麹町に於て

譯者しるす

原序

本書の目的は、福音書の綿密なる讀者をして、其の摸倣すべからざる技倆もて描き出せる主の面目を、一層明晰に悟了するを得せしむるにあり。本書は、叙事にあらず。徹頭徹尾一編の研究にして福音書を讀む人の坐右に備はり、以て其の記事を同情的に研究する人に湧き起る或る疑問に答へんことを期す。而して其の答たる何れも非議論的にして、たゞひ學者の間に、今尙ほ爭論中に係るものに對しても亦然り。その斯る方式を採りたる所以の理由他なし。専門的の議論は、本書が目的とせる讀者の多數に、左して興味をかるべきこと是れなり。又或る問題に對しては、未決的の態度を執れるところもあり。是れたとひ何れに決したりとも、イエスの一代を了解する上に左して重要な

らざるを信じてなり。又地理學上、考古學上の問題に與へたる注意は、傳記上、大切の意義を有する問題に與へたるそれに比すれば、自ら淺少なり。本書の採りたる見地に關して一言せしめよ。元來基督の教會は、忍耐勉強の結果として、將た又熾烈なる對論の結果としてイエスに關する豊富の教義を有す。而して從來の習慣は、キリストに關する此の解釋を前提として福音書を研究するにあり。此の研究法たる勿論、益なしといふにはあらず。されど、使徒たち及び福音書記者が、イエスの神性を認めたるは、之と交際し奉れる後の結論なるを思はざるべからず。彼等を以て見れば、ナザレの人は、元來は人たりしにて、その人以上なるを示したまふまでは、何れも之を人とし看做したり。然るに彼等の此の知識は、人より神へ漸次、その歩を進めぬ。諸君試みに福音書殊に前

三福音書を取りて之を見よ。其の單純にして且つ客觀的なる、實に驚くべきものあり。其の記者等は、明らかた、イエスを認め、て、天よりの「人」となせりといへども、而も彼等は固定せる教義の壓迫に由りて然りしにはあらず。その心、全く人格的なる主の感化に支配せられて然りしなり。之と等しく、本書も亦、人たるイエスを思ひ浮べしめんを期す。是れ決してキリストの神性の重要にして且つ眞理なるを輕視して然るにあらざるなり。抑も神子化身とは、神、人類を透して、神性を顯すを撰び給へりとの義なり。眞理を公式化せしむる種々の設題を透して之を顯すことの謂にはあらず(來一〇一四を見よ)。キリスト教徒は、此の「顯示者」に弟子とし事ふるに由り、古今等しく其の生活と思想とに清新の感化を受けつゝあり。是れ此の顯示者は、内に顯れし神を認めざるを得ざらむる諸徳をその人性に具へ、而し

て之を發表すること、今猶ほ古への如くなるを得るの致すところなり。附録は、基督傳に關する浩瀚なる文書の參考にして、今後一層弘く、一層専門的に研究を進めんとする人に資したるなり。又本文に、論ずるを得ざりし細目上の問題をも多少茲に論じ置けり。讀者若し之を見ば、余の如何ばかり、他に負ふところ多きかを推知せらるべし。又シカゴ大學教授アーチスト、ヂ、バートンは、寛大なる助力に加ふるに、其の著「イエス傳録」（イェン、セ、ライフ、ダ、ジ、イェス）の中にある材料使用の許可を與へられ、同じくシカゴのシエイラル、マシウス教授も亦非常に有益の批評を加へられ、余の同僚チャールス、ルフス、ブラウン教授は、極めて必要の助力を與へられ、本叢書編者諸君亦本書編著中、有益の忠告と批評とを吝まれざりき。余是等の人に對して、こゝに特別の謝意を表す。余亦此書を筆する間、余

の傍に坐して、不易の靈興、機敏の批評、實際の助力を與へられし一人に負ふところ無限なり。

ニウトン神學校に於て

一千九百年四月

著者識す

目次

第一章 歴史的の事情

第一節 歴史的の事情

第一節—十九節

一一—二十二頁

(第一節) 羅馬人の見たるユダヤ (第二三節) ヘロテ大王と其子 (第四節) マレステナに於ける羅馬の州長 (第五節) 租税 (第六節) 軍隊 (第七節) 司法事務 (第八節) サドカイ人 (第九節) パリサイ人 (第十節) セロテ人 (第十一節) エツゼ子人 (第十二節) 教度者 (第十三節) ヘロテの黨とサマリヤ人 (第十四節) 律法の權下に於ける生活 (第十五節) メシヤ的希望 (第十六節) 同時代の文學 (第十七節) マレステナの國語

第二章 耶穌傳の材料

第二十節—三十五節

十三—四十三頁

(第二十節) パウロの證言 (第二十一節) 世俗的の歴史 (第二十二節) 成文の福音書 (第二十三節) 第一福音書の特質 (第二十四節) 第二福音書 (第二十五節) 第三福音書 (第二十六節) 第三十節) 共觀福音書問題 (第三十一、二、三節) 約翰傳問題 (第三十四節) 二個の典據 (第三十五節) アブラハムとアホクリファ

第三章 四福音書の調和

第三十六節—四十四節 四十四—五十二頁

(第三十六節) 四福音書の價值 (第三十七節) ナシヨンの「ヤチヤサロン」 (第三十八節) 重なる出來事に關しては四福音書相符合す (第三十九節) 重なる諸問題 (第四十節) 馬可傳と約翰傳との關係 (第四十一、二節) 馬太傳と路加傳 (第四十三節) 一對の記事 (第四十四節) 如何なる程度まで

確かなるを得るや

第四章 年代論

第四十五節—五十七節 五十三—六十八頁

(第四十五節—第四十八節) イエスの傳道の年數 (第四十九節) 第一回の逾越の時日 (第五十節) 磔死の時日 (第五十一節—第五十六節) 誕生の時日 (第五十七節) 約説

第五章 イスエの幼時

第五十八節—七十一節 六十九—八十五頁

(第五十八節) 典外聖書の記事 (第五十九節) 福音書以外の新約書の無言 (第六十節—六十二節) 奇蹟的降誕 (第六十三節) イエスの幼時 (第六十四節) 家庭 (第六十五節) 宗教 (第六十六節) 生長 (第六十七節) 宗教的發達 (第六十八節) ナザレより見たる景色 (第六十九節) 初めてエルサレムに上る (第七十—七十一節) ナザレの木匠

第六章

バプテスマのヨハネ 第七十二節—八十四節 八十六—百〇二頁

(第七十二節) 福音書の記事 (第七十三節) シヨシラフスの所傳 (第七十四節) ヨハネの人物 (第七十五節—七十八節) ヨハネとエツセ子人バプテスマの關係 (第七十九節) ヨハネの預言者 (第八十節—八十二節) 其のバプテスマの起源 (第八十三節) ヨハネの偉大 (第八十四節) 彼の制限と自謙

第七章

メシヤ的の召 第八十五節—九十六節 百〇二—百十五頁

(第八十五節) ヨハネとイエス (第八十七節) イエスのバプテスマ (第八十八—九十一節) メシヤ的の召 (第九十二節) 聖靈の賜物 (第九十三節—九十四節) 誘惑 (第九十五節) 此の誘惑の場所 (第九十六節) 結果

第八章 最初の弟子

第九十七節—百〇五節 百十六—百廿四頁

(第九十七節) ヨルダンの外なるベタニヤのヨハネ (第九十八節) 祭司等よりの使節 (第九十九節) ヨハネが最初の証言 (第一百節) 最初の弟子 (第一百一節) 初期のメシヤ的諸告白 (第一百二節) カナに赴く (第一百三節) 奇蹟はイエスの性質を顯す (第一百四節) イエスと其母 (第一百五節) カヘナウツに還る

第貳編 傳道

第一章 傳道概観

第百〇六節—百十二節 百廿五—百三十頁

(第百六節) 前期のユダヤ傳道 (第百七節) ガリラヤに退く。一新紀元 (第百八節) ガリラヤ傳道は一貫のもの (第百九節) 問題別に研究するを可とす (第百十節) 最後のエルサレム行 (第百十一節) 最終週 (第百十二節) 復活と昇天

第二章

前期のユダヤ傳道 第百十三節—百二十四節 百卅一—百四十三頁

前期のユダヤ傳道中に於ける出來事の概目 (第百十三節) エルサレムの傳道開始 (第百十四節) 記録完備せず (第百十五節) 神殿を深む (第百十六節) 共觀福音書との關係 (第百十七節) イエスが其の反對者に對する答 (第百十八節) イエスの深沈 (第百十九節) ニコテマとの會談 (第百二十節) エルサレムに於ける成功の程度 (第百二十一節) バプテスマのヨハネの最後の証言 (第百二十二節) ヨハネ拘引せらる (第百二十三節) カナに於ける第二の奇蹟 (第百二十四節) 約説

第三章

ガリラヤ傳道—其目的と方式 第百二十五節—

百四十九節

百四十四—百七十四頁

ガリラヤ傳道期に於ける出來事の概目 (第百二十五節) 概説 (第百二十六—二十七節) 民衆熱心の増進 (第百二十八節) パリサイ人の反對 (第百二十九—三十節) イエスとメシヤの希望 (第百三十一節) 沈黙を命じたまふ (第百三十二—三十五節) ガリラヤに於けるイエスの二重の目的 (第百三十六—三十七節) 此期に於ける教訓の性質。山上説教 (第百三十八節) 譬喩 (第百三十九節) 十二人團派に就ての教誨 (第百四十節) イエスの權威の調子 (第百四十一節) 其の大なる事業 (第百四十二—四十四節) 鬼憑病 (第百四十五節) イエスの人格的感化力 (第百四十六節) 五千人を養ふ (第百四十七—四十八節) 民情の激變 (第百四十九節) ガリラヤ傳道の結果

第四章 ガリラヤ傳道—新課程 第百五十節—第百六十五節

百七十五—百九十三頁

(第百五十節) 一變せる傳道 (第百五十一節) 傳説の問題 (第百五十二節) パリサイ人の反對 (第百五十三節) ビニシヤに於けるイエス (第百五十四節) 弟子の信仰を堅くす (第百五十五節) カイザリヤビリビに於ける問題 (第百五十六節) 教會の礎石 (第百五十七—九節) 新課程 (第百六十節) 鹽稅 (第百六十一節) 癩癩童兒の治癒 (第百六十二節) 構置節 (第百六十三節) イエスと表婦との話 (第百六十四節) イエスの教訓の新調子 (第百六十五節) ガリラヤ傳道約説

第五章 ベリアを経てエルサレムに到るの旅行 第百六十六節—百七十六節

百九十四—二百一十一頁

ベリアを経てエルサレムに到る旅中の出來事の概目 (第百六十六節) ベリアの傳道 (第百六十七節) 約翰傳の記事 (第百六十八—九節) 路加傳の記事 (第百七十節) 七十人の簡派 (第百七十一節) 殿節 (第百七十二節) ヨルダンの外へ退去し給ふ (第百七十三節) ラザロの復活 (第百七十四節) エフライムとエリコ (第百七十五—六節) 約説

第六章 エルサレムに於ける最後の對論 第百七十七節—

二百一十二—二百三十一頁

イエス一代の最終週に於ける出來事の概目 (第百七十七節) 使徒的傳道に於ける十字架 (第百七十八節) ベタニヤにて膏沃がる (第百七十九節) メシヤ的入京 (第百八十節) 果なき無花果 (第百八十一節) 受難週の月曜日 (第百八十二節—八十六節) 火曜日の對論 (第百八十七節) ユダ (第百八十八節) 屏居の日たる水曜日

第七章 最後の晚餐 第百八十九節—百九十五節 二百卅二—二百卅九頁

(第百八十九節) 準備 (第百九十一—九十二節) 晚餐の時日 (第百九十二節) 離週の教訓 (第百九十三節) 新約 (第百九十四節) 晚餐と逾越 (第百九十五節) 最後の教誨と慰諭。仲保の祈り

第八章 死の蔭 第百九十六節—二百〇八節 二百四十一—二百五十六頁

(第百九十六—七節) ゲツセマニ (第百九十八節) 賣らる (第百九十九節) 審判 (第二百節) ベテロの否認 (第二百一節) イエス捨てらる (第二百二節) イエスの偉大 (第二百三—四節) 磔殺 (第二百五節) 十字架上の首 (第二百六節) イエスの死 (第二百七節) 埋葬 (第二百八節) 安息日の休暇

第九章 復活

第二百九節—第二百二十二節

二百五十九—二百七十八頁

(第二百九節)第一の基督教的事實 (第二十節)弟子等の懷疑 (第二十一—二十六節)復活の主の出現 (第二十七節—二百二十節)復活の信仰の解釋 (第二十一節)昇天 (第二十二節)弟子等の新しき信仰

第參編 傳道者

第一章 人類の友

第二百二十三節—二百二十九節

二百七十九—二百八十七頁

(第二百二十三節)日常の社會的生活に對するイエスの態度とヨハネの態度との比較 (第二十四節)學者との比較 (第二十五—二十六節)イエス、單に人を人として愛す (第二十七節)人の求めを顧みる (第二十八—二十九節)切に人類の同情に感ず

第二章 權威ある教師

第二百三十節—第二百四十一節

二百八十八—三百〇三頁

(第二百三十節)イエスと學者との比較 (第二三十一節)イエス、真心に訴ふ (第二三十二—三十三節)舊約書に對する態度 (第二三十四節)イエス、折に關れてその教を垂る (第二三十五節)持久的方法 (第二三十六節)例解法 (第二三十七節)譬喩 (第二三十八節)圖刺と過實 (第二

百三十九節)實物教訓 (第二百四十節)知力の優越 (第二百四十一節)其の重なる題目。神の國

第三章 真理に就てのイエスの知識 第二百四十二節—二百五十一節 三百〇四—三百十七頁

(第二百四十二—三節)イエスの超自然的知識 (第二百四十四節)己れの死を預言す (第二百四十五節)復活の預言 (第二百四十六節)默示的預言 (第二百四十七—八節)知識上の制限 (第二百四十九—五十節)イエスと鬼憑病 (第二百五十一節)己が天職の確信

第四章 イエスの自意識

第二百五十二節—二百七十五節

三百十八—三百四十六頁

(第二百五十二節)イエスの天職の自信 (第二百五十三節)教をなすの權威 (第二百五十四節)パウロ、イ人の批評に對する自己主張 (第二百五十五節)己れの人格を信ぜしめんことを求む (第二百五十六—七節)イエスの非常なる自己要求 (第二百五十八節)メシヤ的稱號の承認 (第二百五十九—二百六十六節)人の子 (第二百六十七—九節)神の子 (第二百七十一節)神と一休なりとの意識 (第二百七十二節)その依頼心の告白 祈禱の習慣 (第二百七十三節)曾て罪を告白せず (第二百七十四—五節)肉となれる道

附 錄 索引

第壹編 準備

第一章

歷史的の事情

一 羅馬の歴史家タシタス、チロ帝が羅馬を火くの罪を以て基督教徒に擬し、之を
 罰せしことを記するに方り、此の宗派は、テベリオの代にユダヤに於て死刑に處せ
 られし一猶太人の起せしものと一言する而已。また其れ以上に及ばず。抑もユ
 ダヤは土地狭く輕蔑せられし國なれば、此處より起りし宗派の影響を記するに、惡
 むべく厭ふべき事之によりて羅馬に輸入せられしといへば、タシタスはそれにて
 一切を盡せりとなせるなり。而してタシタスの此の輕蔑的斷定は、チロの讒誣を
 受くるまでに不人望なりし此の運動の性質と能力とを解する能はざりしに座す
 とはいへ「就」ことなく喧」ことなく人街」に於て其聲を聞」ことなき」も(太十二〇十九、而
 も其の感化は麴酵の如くに羅馬全國に行はれつゝありしもの真相を反示せり
 と謂ふべし。

二 パレステナは、イエスの生れ給ひつる時には、直接に羅馬の配下にありしには
 あらず。多年ヘロデ大王の治め居たる國なりき。彼は其の長き在位の間、羅馬政

府の感賞に與からんとするに急にして、其の民を虐ぐるを辞せず。成功の力あるを自信して手段の無法なるを顧みず。己れよりも正當の權利ある人の起りて其位を争ふべきを恐るゝの極、左右を虐殺せしほどの冒險家なりき。此のヘロデの死するや、その國は分れて三となりしが、羅馬の壓力の前に倍するに至りたるため、其の子等は、一人として王號を名乗ることを許されず。さはいへ、全く獨立權の無かりしにはあらず。亦不肖ながらにも父の遺法に學ぶところ多かりき。就中、最も卓絶なりしものをピリポといふ。彼れの領地は、エルサレムを距ること最も遠く、ユダヤ的生活と關係すること最も薄き、イツリアとテラコニアの地にて、ガリラヤの海の北と東に位し、カイザリヤ、ピリポと呼ばれたる首府あり。是れヨルダンの諸水源に近き舊都の位地に新たに彼の經營して、自ら己が名を命じたるものなり。此他に彼は亦ヨルダンの河のガリラヤ海に注ぎ入る地點にあるベテサイダの市を再築し、アウガスタスが女の名を取りて、之をユリアスといへり。此のピリポが、耶穌傳と相關係するところは、如上の諸都邑と其間に挟まれる地方の君主たりしことと、ヘロデヤの娘なるサロメが所天たりしといふことの外に出でず。エルサレムとユダヤ人とを距ること遠き地は、在りしことと、其父の特色たりし外

觀に猶太教徒を駐ふことをさへ打ち捨て、公々然、異教徒の都に、異教徒として生活せり。
三 更にヘロデが領地を嗣ぎし他の二人は、アケラオ及びアンテバスと稱する兄弟にて、共にヘロデが多くの妻の中の一人なるマルタスといふものの子なり。アケラオは、父ヘロデより王たるべき指名を受け、ユダヤ、サマリヤ、イドマヤを其王國とすべき筈なりしかど、羅馬皇帝は、總督てふ名の下に、其の領地を治むるを許せしのみ。アンテバスはヘロデより分封君として指名を受け、ガリラヤの外、ペリアをその領地とせり。ペリアは即ちヨルダンの河の東にありて、ガリラヤの海の南にまで達する地をいふ。さて此のアンテバスこそは、イエスのガリラヤに住み給ひつる間、其の國の君として、且つパプテスマのヨハチを處刑しつる、ヘロデなれ。彼は激し易き質の人にて、其の父の高慢と奢侈とを兼ね、又その配下の民は、ユダヤ人なるがため、心はピリポに譲らざるほどの異教徒たるに拘らず、父に倣ふて、外觀に猶太教徒たることを粧へり。また彼は土木を好み、その首府としてガリラヤ湖畔に、テベリアを營造せり。その不謹慎なる壓制と暴慢に正義を蔑如せしことは、彼がパプテスマのヨハチとの關係に於て、又其の情婦ヘロデヤとの關係に於て之を見

るべし。イエスが彼を呼んで「其狐」路十三〇三十二といひしは、蓋し當を得たり。彼は狡猾にして、婉曲に事をなしたればなり。而して其父の根氣あり、能力ありて一種尊敬すべき點ありしに反し、アンテパスは、陰険にして且つ薄弱なりき。

四 ビリボも、アンテパスもイエスの死後まで共に其位に在りき。ビリボは、紀元三十四年に死し、アンテパスはそれよりも數年後、即ち恐らくは、紀元三十九年に貶黜せられたればなり。獨りアケラオは、在位最も短かく、紀元六年を以て貶黜せられたり。是ユダヤ人が彼に對して殘忍暴虐忍ぶべからざるものありとの訴を起し、アンテパスとビリボ又之に同意を表せしに由る。斯くてアケラオの領土は、第二等の帝領に編入せられ、羅馬の士分中より拔擢せし州長之を統轄せり。抑も帝領の土地にありては、州長は、關稅及び租稅の管轄官たるに過ず。されどユダヤと同地權を有し、法律上の最高權を握り、凡て政治上の諸特權に於て、皇帝を代表するものなりき。されどアケラオの貶黜せられたる後より、ポンテオ、ピラトに至るまでの州長のごとは詳かならず。ピラトは、紀元二十六年、アベリオによりて派遣せられ、紀元三十六年その免黜を受けし時まで在職せり。そのユダヤ人の慣行を蔑如し、

極端の殘忍を事としたりしは、ジョシプアス多くの例を擧げて之を示せり。但しイエスを試問せし時の行爲は、之を記録に存する彼の諸他の政務に比するに、濃厚合法、大に異常なる處あり。而も羅馬に於て裁判せられんことを恐れ、遂にイエスを十字架に釘くることとなさしめし一事は、能く彼の特色を顯せり。然り、而して其の滅亡は、メシヤ的暴動事件に關係せしサマリヤ人を嚴罰に處せしに對する不服に原因す。

五 ユダヤに於ける羅馬の租稅には、二種ありき。その一は直稅にして、有給の官吏之を徵集し、其の二は關稅にして、最高の入札者に之を取り扱はしむ。直稅は、地租と人頭稅の二を以て成り、州長は、之を徵集するため、ユダヤ人の各地方廳を使用せり。又關稅は、輸物に課する種々の租目を以て成り、之を徵集すべき權利を買得せし人の代人、之を徵集せり。新約書に之が首長たるもの、及びその部下のものを併稱して稅吏といふ。されど嚴密には、只その首長たる人にのみ適用せらる。さて此の大小の收稅吏は、到る處輕蔑と憎惡とを受けしが、是れその憎き政府に助力するものなるに加へて、あらん限りの聚斂を事とする徒輩多かりしに由る。而して此の惡評のため、進んで收稅吏となるものは、普通に不良の徒に限るに至りぬ。

さすれば、福音書中、往々にして、收税吏と罪人とを併せ擧ぐるは、恐らく一種の偏見にも由るべしと雖も、又事實に根基せずんばあらず。

六 サマリヤとユダヤの兩地にありては、軍隊は、州長の權下にありき。又ガリラヤとペリアの兩地に於ては、分封君之を管掌せり。エルサレムの守兵は、平時にありては、『コーホート』と稱する五人以上六百人迄の一隊を以て成り、大祭の節は別に増兵を受く。而して此の州長管轄の下にある諸兵は、恐らく國內より募集せしものなるべく、多数は、サマリヤ人なりしならん。カペナウンの百夫の長カシム太八〇五、路七〇二―五は、アンテバスの軍隊の一士官なりしも、思ふにアンテバスは、羅馬に則りて軍隊を組織し、またその士官は、羅馬風の教育を受けし者たりしに相違なし。

七 サマリヤとユダヤの司法事務は理論的には、州長の掌中に存したり。されど實際的には、地方會議の如き、又エルサレムの大集議院カネスの如きユダヤ人の法術之を司されり。さてエルサレムの大集議院といふは、七十一人の「長老」を以て成り、其の院長には、祭司の長之れに當り、其の議員は、主として祭司の名家の中、最も卓絶せるものを撰びしものなりき。されど、院内に非常の勢力を振ひしものは、所謂る學者なり。是れ民衆の之を尊敬すること深かりしに由る。此のエルサレム大集議院

の管轄區域は、只ユダヤ州内にのみ限られたりしも、其の審問するところは、各種の犯罪に涉り、且つ其の判決は、最終審なりき。只國事犯を除く。蓋し國事犯は、之を州長に訴ふべきものにて、之に死刑を宣告するは、獨り州長の特權なりしを以てなり。亦此の大集議院は、ガリラヤにも、各地の猶太人間にも、大勢力ありたりしが、こゝは専ら猶太人が、エルサレムを崇敬するに歸因するものなりとす。之を要するに、此の大集議院なるものは、猶太人の利害に關係すと思はるゝほどの萬事を裁判する、猶太人に取りての一種の元老院の如きものなりき。されどガリラヤとペリアに於ては、アンテバス獨り兵權及び財權と共に、司法權をも亦掌握せり。

八 宗教は、祭司の多数に取りては、主として一箇の形式となり了れり。されば祭司は、猶太人中の俗黨を代表するものとや謂ふべき。かの祭司的貴族等は、パビロンの囚虜より歸りて、エルサレムに政務を執行せし以後、こゝに猶太人の貴族なるものを生じ、人民の富の過半は、彼等之を占有せり。而して彼等の熱中せしところは、儀式的、傳說的の習慣を保存するにありて、甚だしくユダヤ的の遺傳物に拘泥し、眞の宗教心に至りては、殆んど皆無の有様なりき。此の俗臭紛々たる祭司の一派を稱してサドカイ人といふ。恐らくソロモンの時の祭司の長なるザドクより出

でし名なるべし。サドカイ人の懐抱せし神學は、概して、反動的消極的のものにて、やゝ熱心の精神と、斬新の思想ある學者派に反對し、其の結果彼等の神學的地位を辨解する有力者をも出せしと雖も、多數は全く他を顧みて、之に頓着することなかりき。

九 之に反して國民思想の代表者たるものは、其の宗教的熱心に於て、將た又其の神學的造詣に於て他と大に其の撰を異にせり。彼等はマツカピースの時代に、萬事を抛ちて、神殿の神聖を辯護し、且つ神の律法に従つて神を禮拜するは、神の民の權利なるを主張したる精神の遺物なり。此の一派の人々を稱してパリサイ人といふ。是れ其名區別せられたるもの『の義』の示すが如く、神の民たるものは、其の周圍にある異教的生活の凡ての汚穢、凡ての徑路より區別せられしものと主張したるを以てなり。此のパリサイ派は、日常の萬事に、律法と傳説とを嚴守するを主張する人々を以て成り、何れも宗教上の専門家にて、猶太教の理想的代表者なりき。其の特性は即ち律法を尊敬することにて、其の宗教は、舊籍の宗教たり。戦々競々律法を守りて功德を積み、之に由りて神の末日審判に、其の感賞に與からんとす。然るに、此の活世界には、律法の中に規定せられざる多くの場合も是れありて、漫然

遠法に流るゝものあるも圖られざるが故に、之を豫防するため、律法に倚信すべき解釋を加ふるの必要あり。此の解釋は口頭的の律法に過ぎざれど、實際は成文的の律法を壓倒し、『先祖等の遺傳』と號して、世々代々語り傳へられぬ。既に此の口頭的の律法あり。さすれば、其の傳説を知りて之を其の徒弟に傳ふるを職とする學者及び教法師の徒なかるべからず。此の學者等は即ちイスラエル人の教師たり、パリサイ人の先輩たり、又社會に最も尊敬せられし階級なりとす。而して此のパリサイ派なるものは、最初には、非常に熱心のものなりしが、イエスの時代には、此の熱心の精神已に衰へて、極端なる形式主義之に代り居たり。是れ成文の律法を以て活ける神に代へしことの必然的結果なりとす。先づ彼等の過度なる敬神は、神を日常實際の關係より遠ざくるに至り、神は一たびその聖意を一切、律法に於て宣明し給ひしものと主張し、小心翼翼として其の名を尊敬し、あらん限りの注意を以て、其の禮拜を練習し、恐々惶々として其の審判を豫想せり。されど神自らは、恰かも東洋の國王と一般、其の聖威に相應しきところに隔離せられ、全く普通の人生とは遮断せられたり。之が自然の結果として、良心は、學者の宗教の傳説に過度の注意を用ひ、こは、正しきことか』と自問するの代りに、『長老は何と謂へりや』と問ふに至

り、神の聖意に對し、神の眞理に對する良心の感覺麻痺して、魂を傳説の爲に奪はれ、また道徳性の自發的アーメンを誘出するの力なく、之がため、品性に代ふるに名譽を以てするの例、往々是れあるに至れり。斯くてパリサイ人は、巧みに財産を神に献納するの原則を應用して、汝の父を敬へとの命令を空文たらしめ、可七〇八―十三、律法を恪守すとの名義の下に、却て律法を蔑如するの途を開けり。彼等の宗教論は、佩經を廣くし、祈禱を長くするを旨とせる信仰に、地盤を與ふるのみ。神の審判と慈悲と愛とは、之を棄て、顧みず。

十、されど熱實眞正なる猶太人の思想の發達は、此のパリサイ人の中にも見へたりき。元來イスラエル人の古代よりの希望は、殆んど純然たる國民的のものにて、箇人尊重の念の膨脹と共に、メシヤの王國の幸榮を分受するため、箇人は復活すべしとの説、舊約書の中の晩成書中に漸く現はるゝに至れり。されど其の明白なる發達と、公然猶太教の一要素として採用せられたることとは全くパリサイ人の力によりてなり。此の箇人の價値の膨脹に伴ひて、天使説、精靈説に非常の發達を來せしが、右の諸説に對して、サドカイ人は、反動的の態度を取れり。更に其政治主義に就ていはんに、パリサイ人は、理論的には神政主義なりしも、實際的には階級主義

にて、現政府若し國民の宗教に干渉せざる限りは、自ら事の現狀に迎合せり。彼等は、神自らその民の王として君臨したまふべき王國を期待したりしも、其の時機は、律法によらざれば到來せざるものとなし、之がため神の民をして、傳説によりて解釋せられし律法に、服従せしむるに専ら其の力を致せり。

十一、此の神政的精神は、ヘロデ大王の晩年に發起せられし、或る一派に最も盛なるものありき。此の派は、ガリラヤのユダてふ無謀の一巨魁を有し、アケラオの罷められし後ち、スリヤの知事が猶太人の戶籍調査を始めし際、謀叛を起せり。カナ人若しくはゼロテと稱するは、即ち此の派のとなり。彼等は神の民の外國に臣事するを太く憤慨し、熱心に劍を執りて神の國を設立すべき時機の到るを待ちしなり。而してこは取りも直さず、羅馬に對して最終の戦争の破裂する時たりしなり。此の派の多數は、學者の學説のユダヤに於けるほどに勢力なかりしガリラヤに居住せり。博士エデルシャイムは、此の派の人々を呼んで國民黨といふ。純然たる宗教的問題に關しては、彼等はパリサイ人に從ひ、たゞ、イスラエルの望みに關して、稍物質的なりしを異なりとする而已。

十二、此の他に尙ほ猶太の宗教社會にパリサイ人の主義を極端に貫かんとせし

一派あり。此の派の代表者を稱してエツセチ人といふ。但しその意義は今日詳ならず。教義に於ては、彼等はパリサイ人と一致したりしかど、或點に於ては、希臘的猶太教の感化を受けしところあるものに似たり。こはフアイローとジョシフアスの所説によりて明かなる而已ならず、亦その説に頗るピタゴラス派の學説と酷似せるものあるを見て知らるべし。彼等はパリサイ風の區分主義を極端まで推し及ぼして禁慾主義を實行し、死海の海岸には、其の一大群ありて、何れも無妻遺世の生活を送れり。但しパレスチナの各都邑、多少此の教徒を見ざるはなく、中には有妻のものもありしと知るべし。さて此の團體は、新入會者を以て、補充し行くものにて、愈々正會員となるまでには、三年間の試みを経ざるべからず。彼等の特色は、極度にまで、儀式的の潔齋を重んずることにて、其の食事は、之を犠牲と看做し、祭司と認められ居る會員之を調理し、而して先づ沐浴せざる間は、何人も食事を取るを許されざりき。彼等の制服は、純白のものにて、之を犠牲餐に與かる時の服制と定め、勞役に服する時は、他の衣服を着用することなせり。彼等は勤勉なる農夫にて、共産的の生活を送り、正直を以て最も聞ゆ。又學者等の如くに太くモーセを尊崇せしが、動物犧牲に反對し、神殿に獻げ物を送るといへども、公然其禮拜に與

かることをせざりき。其のピタゴラス派の人に似たりといふは、日出の時、之に對して祈禱を捧げ、又自然機能を果たすに、「神の榮光を汚さざらんとの注意より」(ジョシフアスの「ウオーアス」第二卷八章九節)非常の謙抑を以てせしといふを以て見るべし。又彼等の生活には、眞實に猶太的なるものも多く、儀式的潔齋を重んずるが如きは即ち其の一なりと雖も、流血的の犠牲を否認するが如き、或は又靈魂は肉体中に幽囚せられしものにて、肉体死すれば、靈魂自由を得て高等生活に移るといふが如きは、何れもピタゴラス派に類似の點なりとす。然るに此のエツセチ人のことが、新約書中に一たびも記載せられざるは、能く人の感ふところなるが、思ふにこは、餘り懸け離れたる生活を送り、獨りイエスの理想に對して而已ならず、又パプテスマのヨハネの理想に對してすら、同情の乏しかりしに由るものならん。

十三 普通民衆は、喘ぎく、パリサイ人の嚮導に従ひ行けり。即ち彼等は、傳説に關する教と復活に關する教を奉じ、多少宗教的の工夫によりて支配せられたるに共に、又出來るだけ學者の規定を守りて生活せり。集議院に於ける學者が、往々にして過半数を占めたるサドカイ人に政策を授くるほど優勢なりし所以のものは、蓋し平民間に此の地盤ありたるの結果なり。イエス會て「學者はモーセの位に坐

す「太二十三〇二」を宣ひしは、全く普通民衆の聲を代表すといふべし。而して學者の重立てるものは、「律法ノモを知らざる此衆この衆の人を」約七〇四十九「賤みし」と雖も、又繁文縟禮を設けて之を規律するを喜べり。思ふに、人民の多くは、職務と収利に忙しく、學者の命せし品行の細則には餘り頓着せざりしなるべく、更にそれよりも多數のものは、單純素朴、神は、此の人生と、懸隔せりてふラビの說に従ふ能はざりしならん。就中、此の後者は、學者を尊重し、大体に於ては、其の指導を日常行爲の規則となせりと雖も、神と交通すること恰かも其の先祖等の如く、其の忠實に倚賴し、其の慈愛を瞻望し奉れり。此の類の人々は、新約書にありては、シメオン及びアンナの如き、ザカリヤ及びエリサベツの如き、ヨセフ及びマリヤの如き、その他ヨハネの悔改めを呼ぶを聞きて之に應せし多數の人により、代表せらる。彼等はイスラエルの純潔無垢なる宗教の殘物にて、取りも直さず、ヨハネの相續者が播きつる種子を受くるための肥土に外ならず。彼等は、黨派にあらざれば、特別の名を有せず。便宜のため、之を呼んで「敬虔者」といはん。

十四 此の他に、福音書中に記載せられたるものに、尙ほ二箇の團體あり。ヘロデの黨この黨と、サマリヤ人は是れなり。ヘロデの黨のことは、新約書以外には見えず。思ふ

に是れ世俗的精神に支配せられ、而してヘロデ家の要求を辯護するは、己れ等のためにも、又人民のためにも最上策なりとせし一派の人々ならん。彼等は恐らくサドカイ人よりもパリサイ人に近かりしならん。是れサドカイ人は最初よりヘロデの要求に反對したればなり。されど其の精神よりいへば、ヘロデの黨は、敬虔なる學者に近きよりも、寧ろ世俗的なる貴族に類せしものたりしならん。サマリヤ人はサマリヤに住し、他を賤むと共に、亦他に賤まれ、ユダヤとガリラヤとの間に位して、常に猶太人の憤激の源となれり。抑も此の憎疾は、エズラの時以來の遺傳にて、當時熱心なる猶太人等、サマリヤの住民と何等の交通をなすをも禁止せしとあり。是れ其の血純一ならず、其の宗教混淆せるものとして賤まれしに由る（王下十七〇二十四—四十一）。而してエズラとネヘミヤの彼等に對する態度、餘りに峻厳なりしたため、彼等は、ゲリジム山に神殿を建て、別に禮拜を設けて、凡ての點に於てエルサレムのそれに拮抗せんことせり。イエスの時代に於けるサマリヤ人の信仰に就ては、多く詳かならず。只ゲリジムは、律法に従ひて、神の其の殿たぐのため撰び給ひし地なりといふことと、メシヤ來りて凡ての爭議を決し給ふべしといふこと（約四〇二十五）を知る而已。

十五 猶太人の宗教的生活は理想上よりは、神殿を中心となせりと雖も、其の實際的發表は、之を會堂に於て見るべかりしなり。此の一事は、以て祭司と學者との勢力の多少を示すに足れり。さればとて、兩者の間に、公然の競争ありしにはあらず。抑も、神殿の神聖と、其の儀式の大切なることを強く主張せし者は、パリサイ人なり。されど國民的の宗教以外、箇人的の宗教大切なること、益々切に感せられてより、國民の大多數が能く實行し得べき禮拜の制度、實際上に其の必要を生じぬ。是れ國民の大多數は、一年一二回以上は到底エルサレムに上るを得ざりし爲めなり。會堂は、神殿もなく、犠牲も献ぐるを得ざりしバビロン囚虜時代の發達と覺しく、到處に、祈禱と學習との機會を與ふるものにて、能く律法の宗教としての猶太教の特性に應へり。各團體の長老は、通常此の會堂の管理に任じたるもの、如く、又禁制を犯せし會員を除名するの權利を有したるもの、如し。尙ほ會堂には、此の長老の外、別に宰なるもの一人あり。凡て禮拜に關する一切のことを司る。又「カザン」即ち役者と稱するもの一人あり。聖書を保護し、懲戒を執行し、小兒に聖書の讀み方を教ふ。又二人以上の施物受領者ありき。安息日の禮拜は、祈禱をなすことと、聖書即ち律法と預言書の兩部を讀むことと、演説若しくは説教の三を以て成り、而

して人民は、此の説教を聞くに由りて、或は律法を日常の生活に適用し、或は希伯來の歴史と預言を潤飾する「長老の遺傳」なるものを知れり。此の説教者には、一定の人ありしにあらず。會堂の宰の認めて、會衆に演説する資格ありとなせし人は、皆之に當るを得たり。

十六 上述の如き會堂を中心としたる宗教的生活は、日常には、律法と傳説とを守ることとなりて顯れたり。之に就て、學者の勢力範圍といふは、重もに安息日のことと、儀式上の潔齋を維持するに必要なる種々の洗身のこと、清き食物と清からぬ食物との區別のこと、斷食の時と仕方のこと、襪と佩經との着用のことに關す。凡そ此等の死禮は、今日より見れば、何れも非常なる繁文縟禮のみ。されど、種々の傳説は、漸次に發生せしものなるが故に、其の慣行が猶太人に取りて不合理ならざりしは、猶ほ今日、禮法社會の諸禮式がその信者に不合理ならざるが如しとの或人の説は、中らずと雖も遠からず。其の弊害は、規定の繁苛なりしに存せず。寧ろ是れより發生せし外形的、皮相的の宗教觀に存するものなりとす。

十七 樂天主義はイスラエルの預言者たるもの、上古より取り來りたる態度なり。凡ての弊惡は消滅して、神のイスラエルをその撰民となし給ひし契約に起因

せし夢想を實現する日を期待せしは、代々の人皆然り。されどラビ的的外形主義が、人心を支配すると正比例して、メシヤを待つ望みは、自ら冷却せり。獨り學者は、預言者の樂天主義を捨てず、堅く其望を抱きしと雖も、憐れむべし、之が實現は、成文不文の兩律法を完全に遵奉すると否とに關すとなせしかば、自ら傳説に拘泥し、また律法に關する議論を闘はすに忙殺せられたり。其他、サドカイ人に至りては、自然の勢として、將來の救てふ約束を度外に置き、専ら現在のことにのみ汲々し、エツセチ人の如きも、將來を前知すとの名聲あるに拘らず、メシヤを待望したるの證據あるを見ず。之を外にしては、學者の指導を受け居たる他の人民等、神の預言者に由りて約束し給へる時の到來を熱心に待望せり。即ち或るものは、神自ら來りて審判し給ふべきを期し、また至高者を代表する受膏者の降生に思ひ及ばざりしと雖も、多數のものは、ダビデの子、其父の位に座すべき時あるを期せり。さはいへ、此のダビデの子の降生に關する望の性質には、自ら非常の相違ありき。例せばゼロテ人は、イスラエル人をして、其の諸敵に超然たらしむべき勝利を望み、又その他のものは、如何にして黄金時代の到來すべきやを知らず。神の約束は必ず成就すべきを期しつゝ、神は之をその聖旨のまに／＼成就し給ふべしと信じたり。然る

にこゝに、約束の賸ひを有形的に代表するを事とせし一派の人々あり。彼等は干戈を以て外敵を撃つ無用を認めたる點に於て、ゼロテ人とは異なり。されど其の信仰は、熾烈にして、外部の事情極めて絶望の觀ありし時にすら、神の力、天より顯れて、その怒り給へる凡ての罪人を滅ぼし、その民を救ひて之を慰め、新天新地に位せる眞のカナンに於て、その分を賦與し給ふべきを期せり。此の類の想像は、但以理書及び約翰黙示録に記載せられ、亦今日の聖書に編入せられざる諸他の黙示書にも採録せられたり。皆以て人心の如何ばかり熱心に預言者の傳へたる約束に傾向し、而して其の成就を翹望したるかを示さざるはなし。所謂「敬虔者」は、此の黙示派とゼロテ派との間に位するものなり。ザカリヤとマリヤの歌の如き、シメオンの感謝の如き、即ち彼等の信仰を表示するものにて、有形の王國の來現を望むは、ゼロテ人に同じと雖も、イスラエルの慰めらるゝを俟つを宜しとせり。彼等は信すらく、神は今も尙ほ天に在し、また其の民を顧み給はざるにあらず。一旦時機の到來することあらば、彼等の王をその中より起し給ふべきなりと。斯くて彼等は、ダビデの子を待ち望み、而して其の治世は、外敵征服の點に於ても著しきと同様、又その民を潔むるの點に於ても、著るしからんとせり。而も此の外敵征服といふ

は、主として精神的事ることなり。是れ其のメシヤなるものは、神の靈の力により、又『其の口の言により』勝を得る者なるを以てなり。凡そ斯くの如き信仰は、ヨハネの傳道の準備となれり。而して又イエスの垂示し給ふべき新理想の準備たらざりしにあらずと雖も、其のメシヤ的希望は、未だ全く精神化せず。之をイエスの宣べ傳へ給へるものに比すれば、恰かも現体に對する映像の如きものたりしなり。

十八 さて此種のメシヤ觀は、キリスト紀元前一世紀、羅馬がユダヤに干渉せし當初に著作せられたる數篇の詩中に顯はれたり。此の詩篇は、ソロモンの詩篇と稱せられ、其の見地はパリスイ的なるも、其の思想は、ラビ的ならず。其の感情は、餘りに深く、其の神に信任するは、餘りに親しく、舊約書の詩篇に對しては、不肖と雖も、又適當の後繼者たるを失はず。之と同時代の文學にして稍その類を異にするものあり。即ち默示書なり。但以理書以外、之が代表者と認むべきものにして、イエスの時代若しくはそれより以前より今日に傳はり來れる者、少くとも二あり。所謂『エノクの書』と、又『モーセの推測』なる書の零片是れなり。此の二書は、思ふに猶太書に見ゆる引用文の本書なるべきが故に、格段の興味あり。加之、福音書の中に記載せられたるイエスの或言、特に其の自撰し給へる人の子てふ名稱は、頗るエノ

クの書に見ゆる句法に似たるどころあり。果して然らば、イエス或は、此の書を讀み給ひしにあらざるか。抑も「敬虔者」の如き詩篇なるものは、同希望、同信仰あるものが、全く之を見終る迄は、心より心へと造作なく傳へ得べき種類の文學なり。默示書に至りては、然らず。一層巧緻に、一層隱微にして、多く之を解し得べきにあらず。然るにイエスは、但以理書の如き、當時會堂の禮拜に用ゐられざりしものにも通じ居たまひしとすれば、典内聖書と認められ居ざりし他の書籍をも、或は讀み、或は聞き給ひしことありとせざるを得ず。よし、亦キリストにして一切斯くの如き書を知り給はざりしものとすれば、默示書と、イエスの或る言句との間に存する類似は、一層深意あることとなる。他なし、此の諸書は、未だ斯くの如き書を讀まざりし人々の思想と感情とを代表するを示せばなり。随つて其の書中の想像は、孤立的の想像にあらず、却て當時の多くの人々の懷抱せし宗教の特性たるを示せばなり。イエス即ち此等の思想に通じ居たまひしにて、此等の諸書を讀み給ひしや否やは、暫らく他日の説明を待たん。

十九 此の諸書は、初代教會時代に成りたる翻譯書として、今日に現存す。されど元と此の諸書の多數は、舊約書の言語たる希伯來語か、若しくは、イエス時代のパレ

ステナの國語たるアラメック語にて、著作されたりしなり。イエスがアラメック語を用ひたる痕跡は、福音書中に保存せられたるもの數件あり。ラビといふ名稱、父と譯せられしアバ、ヤイロの娘に告げしタリタクミ、ベテサイダの雙者に告げしエツバタ、十字架上より叫び給ひしエリ、エリ、ラマ、サバクタクニ(約一〇三八、可十四〇三、十六五〇、四十一、七〇、三十四、十五〇、三十四)等是れなり。思ふにイエスは、其の普通の對談に於て、又其の説教に於て、此のアラメック語を用ひ給ひしならん。希臘語は、當時の政府語にして、又商業語なりしが故に、或る程度までは、猶太人は、二國語國民たりしなり。さればイエスも亦幾分か希臘語の知識ありしに相違なしといへども、之を多少とも、ガリラヤ、ユダヤ、若しくは、ツロとシドンの地に用ひ給ひしとは思はれず。

第二章 耶蘇傳の材料

二十 イエス一代の事件を記せし最舊のものにして、今日に存するは、パウロの書翰中に見ゆるもの是れなり。主の死と復活後にその出現し給ひしに關するパウロの記事は、(哥前十五〇三—八)事件後三十年以内の記録なり。されど、此の證言の時日は、更にそれよりも前ならん。蓋しパウロは、自己改悔の經驗を説き、斯くて、イエス磔死後數年内のことと思はしむるもの存すればなり。尙ほ耶蘇傳の材料として、パウロの書翰中より集め得べきものは、其のアブラハムとダビデの子孫なること(羅一〇三、九〇、五)從順の一生たりしこと(羅五〇十九、十五〇、三、腓二〇五—十二)その貧しかりしこと(哥後八〇九)柔和寛容なりしこと(哥後十〇二)是れなり。新約書中、福音書以外に、此の少數なれども最も明了なる證言を証するもの多々是れあり。

二十一 世俗的の歴史は、此の韜晦せるガラリヤ人に關して知るところ多からず。タシタスの證言は、基督教徒なるものは、その名と其の起源をキリストなるものよ

り取れるにて、此のキリストはテベリオの世に、州長ポンテオ・ピラトの宣告を受け、死刑に處せられぬ『年紀』十五の四十四といふに止まる。又スエトニアスは、猶太人を羅馬より追放するクラウデオの勅令の理由につき、曖昧巫妄の記事をキリストトに關して記載せり。第二世紀に至りては、小ブリニー、ピタニヤに多くの基督教會ありて、常にキリストを神と崇むるを知りしも、イエスの一代に就ては殆んど知るどころなきが如く、人をして悪事をなさず、窃盜、強盜、姦淫を行はず、偽を語らず、信託に背かざる誓を立てしめし者『書翰十の九十六』といふの外に出でず。斯く教外の人のイエスを知らざりしは驚くに足らず。されどジョシファスの沈黙一言なきは怪しむべし。彼のイエスに關しての記事は、只一回、ヤコブ殉教の事を叙する際、『キリストと稱するイエスの兄弟』、『アンチクイテイス』第二十卷九の一と言へることある而已。されど、パプテスマのヨハネに就ては、甚だ貴重の記事あれば、『アンチクイテイス』第十八卷五の二、彼はイエスのことを知らざりしとは謂ふべからず。其のヨハネに關する記事を以て推すに、彼イエスのことを記載せんとすれば、多少その性行と教訓とに賛意を表せざるを得ざりしものゝ如し。されど、こはやがて彼が異邦人をして尊敬せしめんとする自國民を貶するに等し。此に於て

か、彼は臆病にも此の大切な事件につき、其の當時にありてすら沈黙を守り、後世には何物をも書き遺さざりしに似たり。

二十二 斯く初代よりして、耶蘇傳の記録なかりし理由は、使徒たち、イエスの傳道を輕視したるが爲めにはあらず。却て初代の人々は、後日の所謂『活ける聲』、『エーセピアスの』、『教會歴史』の三十九に於て、パピアスを之に優れりとせしが爲めなり。イエスの興へ給ひし印象は、主として人格的なりき。彼は何をも書き遺し給はず。又弟子に之を命じ給はず。寧ろ人格的の力にて人の心を感化し給ひ、隨つて弟子等にも、彼が父を代表せし如く、彼等も彼を代表せんことを求め給へり、約二十〇二十一。されど、初代の目撃者は、漸くにして世を去るべき時來り、又彼等すらも、『我、彼を見たり』と言ひ得たる多くの人にはあらず。されば、今日の福音書は、使徒の聲を聞き得ざる時代のため、使徒の證言を保存せんとする自然的願望の結果なり。而して此等の福音書は、恰かも斯る願望の生み出し得べき底の者なり。蓋し鮮かにイエスを書き出し、大体に於ては、符合したると同時に、細目に於ては、不同にして各記者の箇人的感情を反映したればなり。又その著作の目的は、單に報道のためにあらず、主の主張を確信せしめんがためなればなり。然るに我等各福音

書を読み、各記者の箇人的特性を感ずること至て妙し。是れ福音書の記事の眞實なる一證なり。こは特に初めの三福音書に關して然り。蓋し三福音書は、其の記事の鮮活なるに加ふるに、細目上の驚くべき類似を以てすればなり。テシアンは、第二世紀に於て、四福音書を組合せて一となし、之を續き物となして、教會用に充つるの必要を感せしが、その後ち今日に至るまで、此の舉に倣へる人尠からず。されど斯く組み合せるまでもなく、此の四種の記事よりして實際印象の一致を得るといふは、已に此の驚くべき四福音書の特性を講究するを促がすものといふべし。

二十三 第一福音書が丁寧なる讀者に印象を與ふる事件三あり。(第一)は、イエスの傳道は、進化なりしとの信念なり。記者は初めに先づ、イエス誕生のこと、パンテスマのヨハネ傳道のこと、イエスの受洗、誘惑ガリラヤに退去のことより説き起し(二〇一—四〇十七)次で、分類法を以て、イエスの公けの傳道を叙述せり。即ち第一には、イエスが天國の律法に關する教、第二には、其の新説を證すべき種々の奇蹟、第三には傳道の膨脹と、パリサイ人の敵意の増加、第四には、譬の教、第五にはガリラヤより北部に退去し給へること是れなり。此の傳道は、最初に火の如くなりし普通民衆の熱心を冷すに終りたりと雖も、又イエスの理想たる神の國に、數人を漁獲す

るの功ありたり(四〇十八—十六〇二十)。以後第一福音書記者は、筆を排斥熱の頂點に達したるエルサレムのこと及び、こゝにイエスの嚴重なる諸教訓を集録し、其の外觀的失敗は、實は勝利なることを示せり(十六〇二十一—廿八〇二十)。(第二)は、此の第一福音書記者の熱心は、此の明快有力なる記事によりて尙ほ満足せず。イエスはイスラエルのメシヤなるが故に、其の一生は、預言の照應なるを人に確信せしめんとしたること是れなり。而して其の認めて照應となせしことは、何れも驚くべきものならざるなし。蓋し一二を除けば、イエスの一代の出來事の中の猶太人の感情に反するものゝみなればなり。然るに、第一福音書は、此の事實の外に尙ほ、イエスが猶太人の手に殺されしてふ事實に重きを置き、又復活は、人には捨てられしイエスが神には喜ばれたるの證となせり。此等の諸事實は、之を綜合すれば、イエスのメシヤたるを證する有力の論法たるを見る。其故如何といふに、こは、イエス猶太人に捨てられ給ひしに拘らず、否却て其の捨てられ給ひしにより、神は此の磔死者を辯護すとなすものなればなり。(第三)は、第一福音書記者は、一面イエスがイスラエルに約束せられしメシヤなるを證すると共に、一面また新宗教は猶太人の排外思想を脱却せしことを認むること是れなり。傳道地としてガリラヤ

を選び給ひしこと、四〇十二—十七、百夫の長の信仰を嘉賞し給ひしこと(八〇十一—十二)、悪しき農夫の譬もてイエスラエルを詰責し給ひしこと(三十一—三十三—四十六)特に復活後の最後の遺命(廿八〇—十八—二十)等に関する記事は、猶太人がイエスをメシヤと信じたる而已ならず、又イエスは全世界を救ふメシヤと信せしを示すに似たり。

二十四 第二福音書は、其の大体に於て馬太傳と同一なるイエス傳道の記事を掲ぐるものなりと雖も、其の結構に於ては、馬太傳よりも遙かに單純なり。而して此の單純に加ふるに、叙説の鮮活なるあり。是れ馬可傳が最も善くイエスの實際生活を描き出せるならんとせらるゝ理由なり。馬可傳は、イエス一代の出來事と教訓とを記するに於て、福音書の何れよりも妙し。而して之を馬太と路加との兩傳に比するに、馬可はイエスの言を記せざるにあらざるも、行ひを記するを重しとせるを示す。馬可傳は、全体としては最短なれど、其の記載せる事件に就ては、報道明細、叙説活躍、且つ他の福音書の同記事よりも長し。且つ其の文体に生氣あり(屢次「即ち」といふ語を用ゆるに注意せよ)、又寫實的特徴に充つ。之を要するに、馬可傳の記事は、己れの記憶に新たなる事件を其筆端紙に顯せしものと覺し。此を以て、

イエスの傳道の結果に就て、或は「我儕いまだ斯のごときことを見しことなし」(三〇十二)といひ、或は「此人の行し所ごとく」(善)「七〇三十七」といひ、又往々その叙事の中に、ボアテルゲの如き(三〇三十七)、タリタ、クミの如き(五〇四十二)、直ちに翻譯すべきアラメイック語を挿入せり。又馬可傳は、作爲的の意匠少しも見へず。文章の變化には、重もに「而して」(譯者曰く、此語和譯には多く略せられ、稀に、「偕」若しくは「また」と譯せられたり)といふ語を用ふ。中には、第二回の安息日問題對論の如き(三〇一—六)、又は斷食問題の如き(二〇十八—二十三)同性質の事件と連想して記録したるらしきものもなしとせざれども、概して馬可傳は、活ける記憶に鮮かなるものを集め、イエスの實際の救、實際の療病、實際の受難、實際の復活を描出せるものと感ぜざるを得ず。此の福音書は、パプテスマのヨハネの傳道と、イエスの受洗及び誘惑に就ては、出來るだけ其の記事を簡約にし(二〇一—十三)進んでガリラヤ傳道のことを記し、次で、イエスがペリアを経てエルサレムに上り給ひしことに及び、死と復活とを経て全勝を得たまひしことを以て結ぶ(十〇一—十六〇八)。

二十五 第三福音書は、他の諸福音書よりも一層傳記らしきものにて、先づ序文を以て初まり、著者自ら是より以前に於ける耶蘇傳記者の企てを調査し、遂に出來る

だけ完全に初めより之を記録せんとするに至りし由を説けり。又本書は、マコなる人に宛てしものなるが、こは恐らく基督教徒たる希臘人なるべく、又本書の目的は實際的のもにて、信仰問題に關し、確信を堅からしめんとするにあり、(二〇一—四)。著者が此の記録の完備を期したりしは、パテスマのヨハネとイエスとの誕生以前の記事に溯れるを以て見るべく、而してキリストの傳記に就ては、我等著者の此の期望に負ふ所多し。然らざれば、今日に傳はらずして止みしこと多かるべければなり。ルカは、イエスの傳道をガラヤに初まれりとなし、爾後、エルサレムの悲劇の間際まで、同處に傳道を繼續せりとするに於て初めの二福音書に同じ。(四〇—四九—五〇—五十一)。而して當福音書の特有なる最も多くの事挿入するは、其のエルサレムにまでの旅行に關してなり(九〇—五十一—十九〇—二十七)。其のエルサレムの不人望、磔死、復活等に關する記事は、大体上、馬太傳及び馬可傳に方針を同ふすと雖も、他の諸材料よりして多く特有の知識を得來りしを見るべし(十九〇—二十八—二十四—五十三)。イエスを呼ぶに「主」とふ名を以てすること他の二福音書よりも一層頻繁なるは、此の福音書の特色にて、此の崇高の感と相伴へるものは、著しくイエスの博愛事業に重きを置くことなり。即ちルカは、他の福音書よ

りも、特にイエスを罪人の友として描き出せり。之に加ふるに、イエスが祈禱の人たりしと、屢次誘惑を受け給ひしことを知るは、我等またルカに負ふところ多し。後の使徒的思想にては、作爲的にキリストを榮むること往々ありて、之がため人として神に依頼し給へるの證據は、之を減じこそすれ、増すべき筈なし。此の事實よりするも、路加傳の記事の精確なること思ふべし。又路加傳は、貧寒の壓迫の下にある人の慰藉となること甚だ多く、又不信の富者を責むる點も尠からず。さればとて、貧を貧のために貴むにあらざるは、不義なる操會者の譬喩とザアカイの話之を證す。若し第一福音書は、神の其民に對する約束の照應としてイエスを描出せるものにて、第二福音書は、また我等の眼前に其力を顯し給ひ、漁獲せる所は尠かりしも、駭歎せしめたる所は多かりし人のことを記載せるものとせんか。さすれば此の第三福音書は、罪を知らざる點に於て異なりと雖も、誘惑を受くる點に於て己れと等しき人類に對し、其の神祕的の哀憐を示し給ひし主を代表するものところ謂ふべけれ。

二十六 初めの三福音書は、其の見地と目的互ひに相異なりと雖も、要點に於ては、同一のイエス傳道の記事を掲載するものなり。蓋し三書とも、イエスのメシヤ的

事業の場處と進歩を記するに於て、又その教訓の形式と内容を記するに於て相一致すればなり。然り其の叙説の多くの部分に於ては、語辭上の一致をさへ示せばなり。此の故に此の三福音書を普通に總稱して共觀福音書といふ。されど此の共觀福音書は、類似の著しきものあると共に、又相違の點もあり。例せば、イエスの出來事の或るものを記載する順序、人を惑はしむるほどに相異なり。若しイエスの事跡を編んで之を一書となさんには、我等果して何れに従ふべきや。即ち三福音書は、イエスの言行を報道する文字に於て一致すれども、其の始終を通じて著しき語辭上の一致と共に、又著しき語辭上の相違あり。而して此の用語上の一致は、往々我等をして三福音記者ともに、たとひ一部分にもせよ、在來の原本を使用したりと推斷せざるを得ざらしむ。此の最も明かなる一例は、癡癡の人に曰ければ「といふ括弧内の一句が、同記事の處にありて、等しくイエスの癡癡病者に對する語を遮れるものは、是れなり。(可二〇十、太九〇六、路五〇二十四)。綿密に三福音書を比較するに、馬可傳は、馬太と路加になきものを有すること極めて尠く、又一二の場合を除けば、路加は、馬可と共有のものを馬可の順序のままに記載せり。また馬太傳の末部と(太十四〇一以下大尾まで)馬可傳の同記事の處との關係に就て見る

も、之に同じ。然るに馬太の前半の排列と、馬可のそれとの相違は如何といふに、こゝは馬太が時代的順序以外の理由にて之を排列せしを示す。此故に、或る意味よりいへば、馬可傳は、三福音書みな、準據したる時代の順序を顯すといふべし。之に加ふるに、我等は亦三福音書を比較して、一の面白き事實を發見す。他なし、馬太と路加との共有せるものより、その馬可にも存するものを減除すれば、剩すところ殆んど皆教訓と告辭とある而已といふこと、是れなり。されど各福音書ともに特有の點あるは、いふを待たず。

二十七 如上の諸事實より顯るゝ問題を講究するに方り、我等の記憶すべきは、三福音書中、一も其の著者の何人なるかを示せる語句なしといふこと、是れなり。されば我等の之を知るは、全く傳説によるものにて、而して其の中の一人だに、使徒時代に起源せるはあらず。基督教文學の中、今日の福音書に關係ありと見るべき最古の記事は、第二世紀の頃の小亞細亞の一基督教徒バピアスのものは、是れなり。彼れその先輩の説なりとて記して曰く、「マカは、ペテロの通譯者となりて後ち、キリストの言行中、その記憶せるほどのことを、順序に従へるにあらねど、又精確に之を記載せり。是れマカは親たり主に聞きしにもあらず。又主に従ひしにもあらず。

前にもいひし如く、只後日ペテロに従ひ、而してペテロが其聽者の必要に應じ、別に順序を立て、主の教を説きしを録せしに止まればなり。此故にマカは、其の記憶せるまゝを記録せりといふ點に於て、全く誤謬なし。是れマカは、その聞きしほどのことを少しも省略せず、亦之を誤記せざるに注意したればなり。……マタイは「主の」教を希伯來語「アラマイック語」にて記載せり。而して讀者みな其の能に従ひて之を解釋せり「ユージェビアスの『教會歴史』三の三十九」と。さて此のバビアスがマカのものとする書は即ち要點に於て、今日の第二福音書と同じとは、多年各種の學者、研究の結果に於て、粗ば相一致する所なり。

二十八 又バビアスが使徒マタイの著なりとする書は今日の第一福音書なるを得ずとは、粗ば一般に認められ居る所なり。蓋し第一福音書の用語は、他の希伯來語若しくは、アラマイック語より翻譯せしもの、如き特性を具へず。之と同時に、その記事の完備せるは、バビアスの言より推知せらるゝものと相似ざればなり。されど馬太と路加とが、馬可の記事以外に、豊富なる材料を有するを思へば、此材料とバビアスの馬太傳との類似思ふべし。此故にバビアスの馬太傳は、多量に今日の第一福音書と第三福音書の講話に保存せらるゝとは、方今一般の結論なり。さす

れば、今日の福音書と、バビアスの記載せし二福音書との關係は、粗ば左の如くに思料するを得べし。曰く、我等の幾分にも知り居る最舊の福音書といふは、使徒マタイの輯めしイエスの教訓集なり。此中にマタイは、簡單の叙事と共に、イエスの言の最初より、弟子間に行はれ居たるものを蒐録せり。後ちマカは、ペテロがその説教の際、常に語り傳へたるイエス傳道の事跡を記録せり。然るに使徒マタイの著作は、イエスの言を録して大に豊富なるものありしに拘らず、叙事に於て欠くる所あり。此に於てか、此等二つの福音書を組み合せ、兼ねて口傳若しくは、手控より得たる他の材料を加へ、一書を作らばやと思ひ立ちし初代の一弟子あり。此の弟子の目的は、歴史的ならんよりは、寧ろ實際的なるにありしかば、イエスのメシヤ性につき、今日見るが如き、記者一箇の論斷を下せり。而も此の新福音書の最も貴重なる材料は、マタイの録せしイエスの教訓なれば、記者の名を命せずして、マタイの名を此新福音書に命せしなり。

二十九 第三福音書は、十に八九信すべきの傳説により、パウロの友ルカの手に成りしものと稱せらる。その在來の記録を便宜利用せしことは、著者自らのいふ所なるが、其中の重なるものは、思ふに、馬可と使徒マタイとの書なりしならん。さ

れど此の二書中には記載せられずして、而も大切なるイエス一代の出來事と教訓とにして、我等ルカの勤勉に負へるもの尠からず。而してルカは、此の幾分を文書に於て發見せしなるべく、又他の幾分を口傳より採集したるならん。その記事の排置が頗る馬可と相符合するものあるを以て見るに、彼は、イエスの傳道の場處と時日につき、馬可以外に別に發見せし所あらざりしを知るべし。此故に彼は、その記事の組立を馬可に倣ひ、その蒐集せし豊富の材料を用ひ、以てその當時に存したる最完全の福音書を編成せり。

三十 以上は是れ近代の學者が初めの三福音書を研究して得たる結論の大略なり。是れ能くイエスの面目を記するに於て、又その教訓を報するに於て、概ね相一致せる所以の理由を説明す。又その各自に一種の妙味を有する特色ある所以の理由を説明す。又今日の福音書の背後に、別に之が材料たりしものあるを示し、我等をして其記載せる出來事に一層接近するの感あらしむ。此の原本の年代は、只大略之を推知し得る而已。即ち使徒マタイの集めたる『語集』は、紀元六十年乃至六十五年以後に、著はされたるものにあらず。又馬可傳に至りては、紀元七十年、エルサレム滅亡前より存したるなり。今日の第一福音書は、紀元七十年より百年の間

に成りしものなるべく、路加傳は、八十年頃よりのものならん。之を要するに、何れも皆イエスの死後六十年より七十年以内のものなり。

三十一 第四福音書は、他の三福音書と非常に相違せるイエスの面目を描出せり。即ち三福音書は、主として神の王國に關し、又人の行爲に關する主の教訓と、又その事業とを記載し、主自身の人格に關する眞理は、之を讀者の推定に任せたり。然るにヨハネは、イエスの心を開き、イエス自身を主題とせる諸教訓を列擧して、其の自意識の如何を示せり。此の福音書は、明かに是れ議論なり(二十〇三三、三十一)。其の材料の撰擇は、その自白の如く部分的なり。その目的は、主の天的性質と、又その救ひの力を信する信徒の信仰を堅からしめんとするにあり。而して其の方式は、證據と奇跡と又その自示に訴ふること是れなり。その開端數節は、聊か抽象的神學めきたれど、此書の幹部は、恰かも年代記集の如く、出來事と教訓とを、無造作に羅列せるものなり。中には、十五章と十六章との前に十四章の三十、三十一兩節を置けるが如き、又七章二十三節と其の言及せる五章一―九の出來事との間に、大間隔を置きしが如き所もあれど、右の見解は、之がために影響せらるゝものにあらず。本書の主旨は、イエスの自示なり。記者は、此の主旨に基きて、其の材料を撰擇せし

もの、如く、又本書は、議論なるが故に、記者はイエスの言を報ずると同時に、之に註解を加ふるが如きことをなすを躊躇せず(三〇十六—二十一、三十一—三十六。十二〇三十七—四十三)。又本書は、記事活躍の特性あり。以て其の親聞目睹の結果なるを證す。記者は、イエスの性質につきて、非常の敬意ありしは言ふまでもなきことなれど、此の敬意は、やがて亦早くより其の身心を委ねし友人として之を愛し、且つ多年師弟の關係上、その超然性を確信したるの結果なり。又本書は、非常に客觀的の態度を顯せり。即ちヨハネの描出せるキリストは、其の思辨の生出物にはあらず。却て活ける感化力として其の經驗に窺入し、以て其の意義を認めざるを得ざらしめし主に外ならず。而して此の神子キリストは、ヨハネを以て見れば、又人類たるイエスなり。ヨハネは、此のイエスを開卷劈頭、「道」(ロゴス)と呼びたりと雖も、是れ人類をして、神子たらしむるため、自ら肉となりつる道に外ならず。

三十二 約翰傳が他の三福音書に對する相違は、獨り、イエスの教訓にのみ止まらず。又その傳道と歴史的發達との場處に就ても然り。たとひ批評家の説は、如何様なるにもせよ、此の第四福音書は、時代的順序と見ゆる種々の出來事を次ぎ〜に列擧せしものに外ならず。初めの三福音書の組立は、ペテロの談話を記録せし

馬可傳なるは、前に已に之を記したるが如し。而して馬太、路加の兩傳中、馬可以外より採りし部分もありては、イエス其の傳道の終りにエルサレムに上り給ひしに先だち、別にエルサレムに上り給ひしことありと假定すれば、解し易き點尠からず。例せば、善きサマリヤ人の譬の如き路十〇二十五—三十七、マリヤとマルタを訪ひ給ひし話の如き路十〇三十八—四十二、エルサレムを望みてイエスの悲み給ひし如き路十三〇三十四、三十五、太二十三〇三十七—三十九、是れなり。之に加ふるに、三福音書は、イエスのガリラヤ傳道中に顯れし敬意が多く、エルサレムより來りし間牒に職由すといふに於て相一致し、路五〇十七、可三〇二十二、太十五〇一、可七〇一、又イエスがエルサレムの内外の家庭と相親しきは、其の受難前ユダヤに至り給ひしことあるが爲めなるを豫定す(可十一〇二、三、十四〇十四、十五〇四十三及び同記事のところ。特に太二十七〇五十七、約十九〇三十八比見せよ)。之に由て是を觀れば、馬可傳は、悉皆の事實を記載せるものにあらざるは明了にして、斯くいふも、パピアスの記したる馬可傳の説明と相撞突せず。ペテロは、ガリラヤの人にて其の家族と共にカペナウンに住せしならん。而してイエスが前に時々エルサレムに上り給ひし時には、隨行せざりしこともあるなるべく、隨つて其の知れることを

報するにも、己が經驗以外に涉ることをせざりしならん。若し此の想像にして、馬可傳の記事がガリラヤに委しき理由を説明すとせんか。さすれば、三福音書等しくガリラヤに委しき理由も明かにして、約翰傳と共觀福音書との相違は、イエスの傳道を、二つの異なる見地より記述せし爲めなるを知るべし。

三十三 第四福音書眞否の問題は、馬可傳の記事一方に偏せるを思へば、大に簡約せらるゝを見る。加之、更に亦此の問題を簡約ならしむるものあり。他なし、イエスがエルサレムに於ける傳道は、終始自己主張的ならざるべからざりして、事實是れなり。是れエルサレムはその思想と行爲の最高方面に於ては、根本的にイエスの行爲と教訓とに反したるに由る。イエスのガリラヤにあるや、其三福音書に記されたる所を以て見るに、たとひ、エルサレムの精神及び感情と接觸するも、其の獨立と其の權威の卓絶とを主張するに、その鋒銜を顯さず。第四福音書の特色たる己れの意義と價值とを主張するに似ず。されど第四福音書は、純然議論的にして、多年敬慕の念に満てる一弟子の到達せし崇尊の感を漏らせしものなるを記せせんか、且つ記者は斯る議論をなすが爲めに、己れの目的に最も適合せる事實と教訓とを撰び、随つて、彼は砂の中より鐵粉を吸收する磁石の如くにせしを認めん

か。第四福音書に於けるイエスの教の純然箇人的なるも又怪しむに足らず。又約翰傳の中にあるイエスの言が、該傳の緒言及び約翰書中に存するヨハネの特色を帶ぶるを見るも、驚くを要せず。ヨハネの目的は、元來傳記的にはあらで議論的なり。又ヨハネは己れの念頭に顯はるゝまに、イエスを描き出せり。又其の記憶は、自ら喜んで相伴隨せしめたるイエスに對しての崇敬の念と相交雜せり。己にヨハネの目的は、己れの如き確信を他人にも生せしめんとするにある以上は、主の御言と之れに對する己れの意見との間に截然たる區劃を設けざりしも、無理ならず。我等若し此の一事を心に了得すれば、本書は、第一世紀の末葉、ゼベダイの子ヨハネが、エペソに於て、其の死せんとするに先だち、之を著作せしものとの古代の傳説を承認するを得べく、兼ねて又福音書自身の内容により之を確むるを得べきなり。

三十四 此故に、今日の福音書の中に、イエス傳道の經過に關し、二の典據あり。一は馬可傳にして、他の一は約翰傳なり。若し第四福音書にしてヨハネの著述ならざること證明せられたりとも、其のイエスの傳道に關する記事は、之を或る使徒的材料より傳はりしものと認めざるを得ず。捏造者は、他の福音書の傳説と矛盾の

觀ある記事を發明して、其の著作を擯斥せらるゝが如き愚をなさざるべし。第一福音書と第三福音書とは、他の材料よりしてマカの記事に増補するところ尠からず。此故に我等主としてイエスの教訓を知らんと欲せば、約翰傳のほかには、此の二福音書を研究せざるべからず。而して我等が福音書を讀むの際記憶すべきは、その各自不完備なること、又各書特別の目的と、各人特別のイエスに對しての熱心ありて之を著作したりてふこと是れなり。

三十五 以上の外尙ほイエスの傳記の原記録と認むべき二種のものに就き一言せざるべからず。其の第一種は、パウロがミレトスに於て、エペソの長老等に傳へたる主の言なるものにより代表せらる徒二十〇三十五。その他使徒の時代及びその後の時代の書中に、今日の福音書には存せざるイエスの言なるもの往々あり。之を總稱して「アグラファ」といふことなるが、何れもイエスの言と見るに堪え、且つ十中八九までは、眞實なるべしと認めらる。此中にありて、最も大切なるものは、姦淫の時捕へられして婦人の話なるが、約七〇五十三—八〇十二、こは約翰傳の部分にあらねど、譯者曰く、此の數句は、古代の原本多く之を記載せず。若し之を掲載するものは、互に甚しく相違せり。恐らくイエス一代の出來事ならん。是れ約翰

傳及び他の福音書の畧して載せざる所謂「許多の事」を代表す。されど其數の甚だ多からざるは、今日の福音書が、最初の見證者の死後、實際イエスに就て知られ居たる凡ての事を保存せるを證するに足れり。而して此の「アグラファ」が多く零片的にして福音書の記事を補遺するもの多からず、斯くてイエスの公生涯の多くが記録を欠くは、驚くべきことといふべし。次に第二種のもは、第一種と大に其趣を異にし、稱して典外福音書アグラファといふ。典外福音書は、主としてイエスの誕生と幼時、その死と復活とに關する古傳を以て成り、多くは、稱氣滿々たる談柄にて、彼等が崇めんとするイエスの眞性を誤れるものなり。随つて之を讀むは、只之を否定せんが爲めなる而已。

第三章 四福音書の調和

三十六 主の一代と教訓とに關し、四種の相異なる記事を有するの價値と困難とは、教會のいと早くより自認せし所なり。イレニアスは、第二世紀の末に當り、四福音書の必要は、『地球の四帯の如く、風の四種の如く、ケルビムの四面』の必要なるが如しとせり。『駁邪論』三卷二の八。

三十七 されどイレニアス以前に、斯く齟齬の觀ある四福音書を有するの困難を除くとして、四福音書を組合せ、之に題して『デアテサロン』と言ひし人あり。こは即ちテシアンなるが、彼は紀元百五十二年、異教より改宗せし人にて、此の一統的福音書は、恐らく百七十二年以後の或時、スリヤ教會の使用に充つるため編成したるものならん。此書は、既往二十五年以内に發見せられたるものにて、基督敎初代文學の一重寶なり。而してスリヤ教會に於ては、非常に流行せし書なるが如く、却て眞實の福音書を壓倒すること、凡そ三百年に及べり。されど、此中に異端の傾向ありとの嫌疑にて、教會の當局者、その全力を盡し、以て之を絶版し了れり。抑も該書は、イ

エスの傳道を連續的に記録せしものにて、先づ約翰傳の最初の六節を以て始まり、次で路加傳の始めの諸章に及び、四福音書を組合せたる復活の記事に至り、約翰傳廿一章廿五節を以て結ぶ。その排列は、概して馬太傳の順序に倣ひ、テシアン自身の判断が是認せる場處に、他の福音書の記事を挿入せり。又或る部分、特にイエスの系圖は、編者の意見により、全く之を取り除けり。

三十八 テシアンの時よりして今日に至るまで、イエスが傳道中の出來事と教訓とを調和的に代表せんとせし人は、尠からず。概して同記事のところを對揭し、出來事の排列は、最も異らし、と思はるゝ順序に由れり。抑も福音記者等は、嚴正なる傳記文の資格如何には餘り顧着せず。隨つて彼等が今日に遺したる記録は、之を時代の順序に排列せんとするも容易にあらず。されど、重なる出來事に關しては、四福音書互ひに些の齟齬あるを見ず。例せば、ガリラヤ傳道開始の事、太四〇十二、十七、可一〇十四、十五、路四〇十四、十五、約四〇四十三―四十五、イエスの人望が、リヤに於て稍降り坂となりし際、五千人を養ひ給ひし事、太十四〇十三―二十三、可六〇三十一―四十六、路九〇十一―十七、約六〇一―十五、最後にエルサレムに上りたまふ爲め、ガリラヤを去り給ひし事、太十九〇一、二、可十〇一、路九〇五十一、約七〇一

一七、一週間の受難と最後の勝利(太二十一〇一—二十八〇二十、可十一〇一—十六〇八〔二十〕、路十九〇二十九—二十四〇五十三、約十二〇一—二十一〇二十五等)は、四福音書の等しく報道する所なり。

三十九 如上の諸事實は、イエス傳道の經過に關し、我等に明白にして且つ一致せる印象を與ふるに足れり。されど我等若し四福音書の細目を充たさんとするに至れば、忽ち困難に會するを見る。例せば、約翰傳に、イエスガリラヤに退きたまふ前に、載せたる一の長記事(一〇十九—四〇四十二)は、之を如何にすべきや。他の福音書には、此の退隱をその公けの事業の始めとなしたればなり。次に第二の困難は、約翰傳五章一節にある無名の節筵いひよりして起り來るものなり。此の節筵に就ては、諸學者が己がじゝに或は此の節筵ならんといひ、或は彼の節筵ならんといひ、猶太人の節筵にして、殆んど指名せられざるものなき程なり。第三の難問は、路加傳の特色ともいふべき其の一長記事なり(九〇五十一—十八〇十四)。此の記事にして若し他の福音書に全く存せざりしならば、我等容易に、こは最後にエルサレムに上り給ひしに次で起れることといふを得べし。然るに此の記事には、少くともガリラヤの初期傳道中に起りたる一事件を載せ路十一〇十四—三十六。尙ほ可

三〇十九—三十比見せよ、又馬太傳にありては、初期のものとせられたる多くの教訓が、路加傳には、こゝに掲載せられたり。之に加ふるに、此の記事は、約翰傳の同期の記事にして、報道相同じからざる部分とも調和せざるべからず。

四十 馬可傳にして若し第一福音書と第三福音書とが大體採用せし記事の組立ての基となりしものとせんか。イエス一代に於ける出來事の順序の問題は、取りも直さず、馬可傳の事順上の價值如何との問題となり、又約翰傳の事順を測るべき問題となる。若し夫れ第四福音書にして、使徒の著作に相違なく、且つ信頼すべきものならんには、福音書調和家の事業は、主として馬可傳と、約翰傳とを組み合はするにありとせざるべからず。即ち第四福音書の開端にあるパブテスマのヨハネの證言は、彼がイエスにパブテスマを授け奉りしよりも後ちのことなるべく、イエスがガリラヤに歸り給ひし以前の傳道は、(一〇十九—四〇四十二)他の福音書には無視せられたる或る時期に屬するものなり。初めの三福音書には、イエス其の礎死に先ち、ユダヤに至り給ひしものと見るべき記事あり。されど是れより以前に於けるユダヤ傳道の時日若しくは境遇に就ては、三福音書に、何の暗示もあることなし。蓋し三福音書は、ガリラヤ傳道に重きを置くの故を以て、一方に偏せし記事

を擧ぐる而已。此故に、我等、約翰傳に於て、ユダヤ傳道の記事を發見し、而して他の福音書の暗示、之を確かむるを見ては、馬可傳の適當なる場處に、約翰傳中の記事を挿入し、以てイエスの一代記を全ふするの排列法は、全然眞實なりと言ひて、何の不可あることなし。

四十一 馬可傳の記事若し一方に偏せるものとすれば、調和問題は、之がため簡約となるに相違なきも、未だ以て、凡ての難問を解釋し盡せりと謂ふべからず。馬太、馬可の兩傳には、馬可傳になき事件と物語、一にして足らず。而して是れは馬可傳の何處に挿入すべきや審かならず。例せば、百夫の長の僕を癒せしことの如き(太八〇五—十三、路七〇一—十)、バプテスマのヨハナの最後の使命の如きは(太十一〇二—十九、路七〇十八—三十五)之を何處に挿入すべきや。然るに我等若しルカの所謂「原より諸の事を詳細に考究たれば」(路一〇三)てふ語を解して、イエスの一代の出來事の確かなる順序を知り得たりてふ意味と見ることを得ば、問題は、更に簡約となりしを覺ふ。されど此語は恐らく然にあるまじ。只單に、イエス誕生の公宣より、その昇天に至るまでの傳記を録するため、丁寧に材料を蒐集せりとの主意に止まるならん。果して然らば、彼が馬可傳以外の材料に順序を付せしは、信す

べき傳説に準據せしに相違なかるべしと雖も、凡ての點に於て、彼にのみ信頼すべきにあらざるが如し。例せば、パリサイ人冒瀆の記事をば、(十一〇—十四—三十六)馬可傳の地位(三〇—十九—三十)より之を分離するが如き是れなり。

四十二 加之、馬太と路加とは、箇々各別の事情を記するより、イエスの教訓の歴史的關係を審かにすべからざるものあり。例せば、主の祈りの如き(太六〇九—十五、路十一〇一—四)、憂慮に就ての勸めの如き(太六〇二十五—三十四、路十二〇—二十二—三十一)是れなり。凡そ此の兩福音書共有の教訓は、多分は使徒マタイの作りし主の「語集」より得たるものならんとは、前にも已に記したるところなり。而して斯くの如き語集につき、我等の推測し得ることは、或る教訓には格段の歴史的事情を付記したるべきも、(路十一〇一—参考せよ)其の多くは、全然斯る緒言を欠きたるべしといふこと是れなり。近時に至りて、此の語集も斯くありたらんと想像せらるべき一例、世に出でたり。そはエジプトに於て發見せられ、一千八百九十七年に出版せられたる「イエスの言」なるもの是れなり。此の書には、其の教訓を垂れ給ひし時の事情一切欠如し、只イエスは斯くくのことを言ひ給へりといふを知り得る而已。之を以て考ふるに、所謂マタイの書なるもの、即ちイエスの語を載せたりし

とするも、其の垂訓の時の歴史的事情は、此の使徒に取りて左程に大切にあらねば、随つて欠如せしもの多からん。斯くいへばとて、所謂イエスの言なるものが、後世の贋造となるの理なく、却て路加傳九章五十一以下十八章十四に關する問題大に簡約せらるゝを覺ふ。げにルカの勤勉は(一〇一—四)他の福音記者の記載せざる或る出來事と、多くの教訓を今日に遺し傳へたり。而してルカは、此の新材料の或物を例せば、七〇十一—十七、三十六—五十馬可傳の記事の中途に置けり。されど、其の多分は、之を集めて一種の附録の如きものとなし、之をガリヤ傳道の終りと、最後のユダヤ到着との間に置けり。斯く今日にては、イエスの教訓の時と場處とを知り得ざるもの尠からず。是れ古代にありては、イエスの言行、専ら口碑によりてのみ傳へられしことを思へば、別に怪しむべきことにもあらず。又難問とするにも足らず。福音書の筆録せらるゝに至りし所以の理由は、親聞目睹の弟子已に此世を去らんとせしことなり。而して此の口傳の時代には、垂訓の歴史的事情は殆んど忘却せられたるならんも、主の垂訓そのものの多くは、明了に精確に記憶せられたるには相違なし。

四十三 此の事實は、今日の福音書の記事に存する他の一困難をも説明するに足

れり。即ち我等若し、同一事件の記事は、細密の點までも必ず符合すべきものとせば、百夫の長の僕が癒されし兩記事の齟齬の如きは、極めて困難と見るべきものなり。即ち一方(太八〇五、八)は百夫の長自ら來りてイエスを求め、而して其の僕が癒されんことを乞ひしとなし、他の一方は又(路七〇七)百夫の長自ら我なんちの前に出づるも亦憚りありと謂ひしとせり。されど此の兩記事は、畢竟同一事件の報道に相違なし。此に於てか、一問題起り來る。他なし、他の事件にして大体は同一なるに、細目の同じからざるものあり。是等は、同一事件の別記録と認むべきや如何といふことは是れなり。例せば、神殿の潔めは二回なりしや(約二〇十三—二十二、可一〇十五—十九)奇蹟的の漁魚は二回なりしや(路五〇四—十一、約二十一—五—八)ナザレの擯斥は二回なりしや(可六〇一—六、路四〇十六—三十)。その他麴酵の譬、芥子種の譬(太十三〇三十一—三十三、路十三〇十八—二十一)迷へる羊の譬(太十八〇十二—十四、路十五〇四—七)等も亦二回なりしやといふことは是れなり。斯る類似の記事は、往々一對の記事と稱せられ、其の同異の問題に對しては、特別に各事件を審査せざれば之に答辯するを得ず。此に注意すべき大切の一事は、イエスが同一の教訓を度々使用し給ひたるべしといふことなり。殊にその譬喩なる時に

於て然り。之に反して、我等イエスの行爲の能く相似たるものを二ヶ所に於て發見することあらんか。その場合には、類似若しくは同一の教訓が屢次繰り返さるゝに反し、同一の歴史的事情は、屢次繰り返されざるを認むること肝要なり。

四十四 以上述べ來りし所を以て見るに、イエス一代に於ける諸の出來事の順序は、粗ぼ之を決定することを得べし。されど出來事の順序の不確かなるもの勢きにあらず。教訓に於て殊に然り。而も此の不確かは、餘り大切の件にはあらず。過去幾百年の間、各福音書獨立に、イエスてふ可なりの一畫を人の心中に生じ得たればなり。而して其の各教訓と各行爲とは、その特別の順序の判然せざりしにも拘らず、一の全印象を生ずるに於て差支なかりしが故なり。而も、今日知り得らるゝ所を以てすれば、舊來の如くに、四福音書を調和して研究することは、依然として、利益あり。是れ斯くせば各福音書の部分的記事に描き出されたるイエスの傳道を一層詳かに窺ひ得らるゝを以てなり。

第四章 年代論

四十五 イエスは何年間傳道し給ひたるかとは、四福音書の研究上に起れる最難問題の一なり。第二世紀及び第三世紀の頃にありては、イエス自ら己れに於て照應せりと宣へる以賽亞書(六十一〇一二)の語を此の答とせしこと、珍らしからざりき。即ち『エホバのめぐみの年』てふ語を取りて、イエスの傳道は、一年を超ゆること、多からざりしものとなせり。而して最初の三福音書が、只一回の逾越を擧げ(即ち終りの逾越、只一回のエルサレム上りを記せる)とは、之を一見せる時は、右の斷定に好都合なるもの、如く、又ルカがイエス傳道開始の日を擧げたる用意(三〇一二)に格段の意義を付するものに似たり。現に第二世紀のノスタツク派の人々は、公然路加傳に依頼し、イエスの傳道と死と、兩つながらテベリオ帝の第十五年にありしものとなせり。而して此の解釋は、普く行はれたる古き傳説の基となりたるが、其の一例は、テルチユリアンにあり、『ニケア前の師父』第三卷百六十頁で、同人は、イエスの死を紀元二十九年、エル、ルベリアス、ゲミナスとシ、プフィアス、ゲミナスが執

權者たりし時のこととなせり。

四十六 されどイエスの傳道が一年を超ふること多からざりしとの説は、非常の困難を有するものゝ如し。その第一は、約翰傳に明かに記載せられたる三回の逾越なり。(二〇十三、六〇四、十二〇一)。此の三回中の最後のものは、他の福音書に記載せられたるものと同一なるは、言ふを待たず。又第二回の逾越は、五千人を養ひし時のことにて、馬可傳と馬太傳との記事中に「青草」（おはくさ）とあるに善く符合せり(可六〇三十九、太十四〇十九)。更に約翰傳の第一回の逾越は、馬可傳一章十四節以前に之を置くべきものなり(約三〇二十四参考せよ)。此故に此の第一回の逾越は、約翰傳にありては、其の年代順を失へるものにて、第二世紀のノスチックの人々や、アレキサンドリヤのクレメントや、オリジエンや又後世のカイム及びその他の人々の主張する一年説は、到底成立すべからず。然るに約翰傳には、イエス此の逾越の時に、神の殿（みや）を深めたりとなし、他の福音書には、此の殿（みや）潔めを、その傳道の終りにありしこととするは、如何といふに、恐らくヨハナは、其の議論の關係上、其の物語の初めに之を置くを便とせし爲めなるべし。されど、約翰傳の記事の組立は、斯る痕跡を顯さざるほどに、如何にも單純なり。即ち該福音書に於て、一の出來事より他の出來

事への過渡は、如何にも單純に、著者には、其の當時に行はれたる、耶蘇傳に反對するの意、毫末も是れなかりしが如し。之を要するに、此の福音書の著者如何に關し、如何なる議論のあるにもせよ、其の既に使徒時代よりして行はれ居たりてふ事實は、本書の記載するイエス傳道の年数が、當時使徒の證言として傳はりしものと相矛盾せざりしを證す。此故にイエスの傳道の年数は、少くとも三回の逾越節に涉りたりと斷言して、敢て差支なかるべし。

四十七 イエスの傳道年數問題に關する近代の議論は、大抵みな此點に歸着することなるが、その遂に一般の同意を得るに到ることも、期し難からず。されど、馬可傳の記事の順序は、之と相撞着す。即ち馬可傳には、其の初めの部分に(二〇二十三)イエスの弟子等が、安息日に麥畑を通り、熟せる麥穂を摘みて之を食ひ、それがためパリサイ人との間に議論の起りたることを記せり。而して此の馬可傳は、逾越の時にありし五千人を養ひしてふ事件をそれよりも更に後ちに置けるが(六〇三十一—三十四)、此の逾越といふは、收穫時の初めにあることなり(利二十三〇五—十一)。故に此の順序を以てすれば、ガリラヤ傳道中に、二回の收穫時ありたることとなり、随つてイエスの公生涯中に四回の逾越ありしこととなる。我等果して之を如何様

に辯解すべきかといふに、馬可傳の記事の順序に對しては二の反對説あり。(第二)パピアスが馬可傳に關して其の順序を批評せること。(第三)馬可傳二章一以下三章六までに、イエス其の批評家との間に、五回の衝突ありしことを列舉せり。こは都合上、反對運動を一ヶ處に集め掲げしにて、斯くの如きは、ガリラヤ傳道の初めには、あるまじきものなること。さてパピアスの批評なるものは、其比較の標準の判明する迄、是非を斷すべきにあらず。或はいふ、彼は約翰傳の順序を知り居て、之を彼に優れるものとしたるならん。他のものはいふ、彼はテシアンが「デアテサロ」中に採用せるものに從へるならん。馬可傳が此の兩者の何れにも符合せざるは明かなれど、パピアスが何れの順序を善しとしたるかは、何人も之を知らず。思ふに馬可傳が初期の衝突を列舉したる一事は、是れ時々に取りたるものを一ヶ所に集め掲げしと覺し。されど、此の一群の中心たる癡癡者の治癒と(二〇一—二二)レビの召されたること、は馬可傳の順序、その當を得たるは明瞭なり(ホルツマンの「註解」一の十を見よ)。次に斷食に關しての質問は、(二〇十八—二十二)實は、是れよりも更に後ちに取りたるべき筈のことなり。由て、現今の順序は、傳説上、之をイエスが税吏と交りたるに對する批評に(二〇十六)聯繫せるに由るならん。一手粘

たる人を治療したること(三〇一—六)亦是れに等し。即ち作爲的に麥畑事件と相聯繫せしめたるものなるべし。之に由て是を思ふに、此馬可傳の初めの部分に、二回の安息日事件を列舉したること、傳説上に、初期の諸衝突と聯繫せるが爲めなるべし。果して然らば、麥穂を摘みし事件は、實は五千人を養ひし事件の數週後にありたるならん。否恐らくは、馬可傳がガリラヤ傳道の掉尾とせし遺傳つたへに關する爭論(七〇一—二十三)よりも、尙ほ後ちに取りたることならん。されど、如何なる主義によりて、安息日事件を最初に挙げ、却て其の場處に、遺傳に關する爭論を置きたるかは、詳かならず。果して然らば、麥畑事件も、亦初期の衝突群の中心に屬するものか。若し然らんに、四回の逾越ありたりとする長年説を可とせざるべからず。而して此の問題は、何れに定まりたりとも、非常に大切ならずと雖も、イエスの一代に於ける出來事の次序を定むるに於て必ずしも其影響なしとせず。パピアスの批評に對する説明は、如何様にもせよ、愈々福音書を研究すれば、する程、馬可傳の順序が、大体に於て、事實に近きこと分明す。抑も三年説を取る多くの學者は、是れ單に約翰傳を基となし、約翰傳五章一にある無名の節筵いはいをも亦逾越と見て、斯く推論するものなり。されど、此の節筵に就ての約翰傳の記事は、極めて不明にて、單

に是れのみを以て、イエス傳道の年數を決し得べきにはあらざるなり。

四十八 イエスの傳道若し三年の長きに互りたりとすれば、亦種々なる困難あり。蓋し福音書に記載せる凡てのことを以てするも、尙ほ此の年數の小部分だけを填むるに過ぎざればなり。ヨハネがその書を作るに當りて、實際の傳記中より尙ほ多くの事を略せりと言ひしは(二十〇三十)思ふに各福音記者に當て辨むべき言ならん。亦第四福音書を見て知らるゝ長き無記事の諸點は、他の三福音書また之を存すと謂はざるべからず。若し夫れ福音書の性質は、イエスの傳記なるよりも、寧ろイエスの繪なるを思はゞ、三年間の記録として不備なるも、怪しむに足らず。否、却て斯く儉約せる材料もて、斯く鮮かなる印象を與ふるに驚かざるべからず。而も此の材料の乏しき故を以て、イエスの傳道年數は、三年よりも短かりしといふは、當を得ず。蓋しイエスがその弟子たる熱心なるガリラヤ人の確信と感情とを變化する事業の如きは、時日を要することなるが故なり。而して此の變化を來すためには、二年よりも寧ろ三年を以て適當なりとす。

四十九 此にまた、イエスの傳道年數問題と密接の關係ある一問題あり。他なし、イエスの一代の重なる事件に對し、それ／＼一定の時日を付し得べきや如何と

いふこと是れなり。イエスが傳道開始の初年に關しては、福音書中、二種の獨立したる證言あり。一はイエス初めてエルサレムに上りたまへる際猶太人の言として、「此殿を建るには四十六年を経たり」とあるものにて(約二〇二十)、一は、ルカが綿密に、パプテスマのヨハネ現出の時日を算定し、「テベリオ在位の十五年」とせるとなり(三〇一二)。約翰傳二章二十を以て考ふれば、第一回の逾越は、紀元二十六年か、二十七年の春にありしと斷定せざるべからず。蓋しヘロデが神殿の再建工事に着手せしは、其の在位の第十八年なるは、ジヨシフス(アンタクイチース)第十五卷十一の一)を讀みて知るべく、其の竣工したるは紀元前十九年の春なるを以てなり。然るに、路加傳三章一に所謂るテベリオの十五年なるもの、若しその前王崩御の時より起算すとすれば、右の約翰傳の記事と相符合せず。蓋しアウグストは紀元十四年八月十九日を以て崩御したればなり。由て此時より起算すとすれば、ヨハネが現出は、紀元二十八年にありとすべく、イエス傳道中の第一回の逾越は、紀元二十九年の春以前にあるべきにあらず。是れ約翰傳の記事より堆測し得る時日に後るゝこと、少くとも二年なり。さすれば我等之を如何にすべきやといふに、約翰傳の此の記事は、偶然に、且つ無意味のものにて、若し之を精確なりとすれば、之を其の

歴史的追憶の明了なるにのみ歸すべきものなり。さればとて、路加傳の擧げたる時日には、誤りありと言ふべきにあらず。由て今此の兩者調和の途を考ふるに、アウグストは、紀元十四年以前に崩御せしにあらざるも、テベリオは紀元十二年の一月頃より已にアウグストと共に軍政と州政とを執りたるの證據あり。而して、教授ラムゼイもいひつる如く、『キリストはベテレヘムに生れしや』二百〇二頁、テトスの代にありて著述せし人が、テトスの場合に行はれし算年法をテベリオの代にも適用し得ざるにあらず。果して然らんに、路加傳は、テベリオの共治時代より起るならん。而して此の共治時代は、前述の如く、紀元十二年の一月前後より始まるなりしとすれば、テベリオの十五年は、即ち紀元二十五年か、二十六年なるべし。随つてイエス傳道中の第一回の逾越は、紀元二十六年か、二十七年の春となり、約翰傳に見ゆる暗示と相衝突せざるを得べし。

五十 若しイエスの公けの傳道にして、前述の如く、紀元二十六年か二十七年の春に初まりしものとすれば、其の三年間傳道の終りは、紀元二十九年か、三十年の逾越の際にありたるなるべし。若し之を紀元二十九年とすれば、前に擧げたる初代基督教徒の傳説と相符合す。されど我等この傳説上の時日を承認するに先ちて、購

究すべき事件あり。他なし、イエスは逾越節の初めの金曜日（即ち三月廿九日）に磔殺され給ひしといふことなり。而して此の金曜日は、果して逾越の犠牲の日なりしか（ニサンの十四日）、或は又その次の日なりしか（即ちニサンの十五日）、目下の問題に取りて大切ならず。蓋しユダヤの月は、新月の初めて出づる時を以て初まるが故に、イエスの死し給ひし年には、ニサンの月が、恰かも其十四日若しくは十五日をして金曜日たらしむる日に初まりたるべきを以てなり。さてニサンの十四日は、紀元三十年にありては、木曜日（即ち四月六日）、金曜日（即ち四月七日）なりしもの如し。是れ今日達し得らるゝ最精確の計算なり。然るにイエスの受難を紀元二十九年とするの傳説は、概して其の三月廿五日を以て、ニサンの十四日なりとなす。されど此日は、諾（即ち三月廿五日）し。是れ此日は、其月の満月と符合せざればなり。然るに後世の傳説が三月廿五日をその日となすの理由は、此日が恰かも、年の改まるべき春分日として普通に認められ居るが爲めなり。然るにターナー氏は、『ヘスチングスの聖書辭典』の四百十五、古代の文書中に、斯くの如く説明するを得ざる時日を發見せしを示されたり。即ちエビファニアスは、『ピラトの諸行』と題する書を熟知し居たるものなるが、此書の中には、三月十八日を以て磔死の日となせり。而して此日は、實に満月と符合す

る而已ならず、又金曜日^①に相當するは、實に奇と謂はざるべからず。既に斯くの如き符合あり。傳説は之がために、非常の力を添ふ。況んや三月二十五日説の如くに、其の起源を説明すべき方法なきをや。斯くの如くに附帶的の傳説すらあるを以て、紀元二十九年は、受難の年として殆んど間違なきに似たり。さりとして最後の断定を下すにはあらず、斯る事業は専門の年代家に委せざるべからず。只イエスは紀元二十九年か、三十年の逾越に死したまへりと見て、大過なしといふ而已。

五十一 借イエスの實際の傳道は、紀元二十六年より三十年までにありしと見て、其次に誕生の時日を算定し得るかといふに、福音書中に見ゆる暗示四點あり。第一は、ヘロデ王の死する前に生れ給へること(太二〇一、路一〇五)。第二は、其バプテスマを受け給へる時は年おほよそ三十歳なりしこと(路三〇二十三)。第三は、クレネオ、スリヤを管理^{をさめ}し時、アウグストの命によりユダヤに戸籍調べ行はれしに、イエスは此間に生れ給へること(路二〇一、二)。第四は、イエスの誕生後、東方の博士たち「その星」を見て、之に導かれ來りしこと是なり(太二〇一、二)。今此等の事實を以て考ふるに、イエスの誕生は、紀元前四年よりも後たるを得ず。蓋し、ヘロデは其年の四月一日頃に死したればなり(シヨシファスの「アンタクイチース」十七卷六の四、八

の一、四)。イエスの誕生日を、基督紀元前と稱するの不体裁は、全く小テオニシアスと呼ばれし一修道僧の誤算に出づ。同人は、第六世紀の頃今日の如き「主の年」よりする算年法を創始したるなり。

五十二 されどイエス誕生の時日を、それよりも一層精確に算定し得ざるかといふに、路加傳(二〇一、二)のは、稍確かなる報道たるに似たり。只其アウグストの詔命^{詔命}のこと、クレネオの戸籍調べのことは、福音書中、最も異論あるものの一なり。(第二)アウグストが全「天下」の戸籍調べを命せしことは、歴史に記載なきこと。(第二)羅馬の戸籍は、ヘロデの死する前、パレステナにて、取り調べらるべき筈なきこと。(第三)若し斯くの如き戸籍調べありしとするも、ヨセフとマリヤがナザレよりベツレヘムに旅行する必要なかるべきこと。(第四)クレネオがスリヤの管理者たりし時の戸籍調べなるものは、シヨシファス明かに之をアケラオ^{アケラオ}貶黜後の年即ち紀元六年となせること。(「アンタクイチース」第十八卷一の一。亦徒五〇三十七を見よ)。(第五)若し路加傳の所謂戸籍調べなるものは、「第一回」の戸籍調べなりとすとも、クレネオは、ヘロデの生時に曾てスリヤの管理者たりし形迹なき事の難問あり。凡そ是等の諸難問は、何れも力ありて、保守的の學者すら、路加傳の戸籍調べの件は、

恐らく誤りならんといふものあるに至る。然るに近時、エジプトに於ける諸發見は、同國の行政に關して、新しき報道を與ふるものあり。而して教授ラムゼイはエジプトに行はれし政策スリヤにも行はれたりしと推斷し、路加傳の此の戶籍調べの件は、精確なるものと鉄案を下せり。キリストはベテレヘムに生れしや、九十五—二百四十八頁。其論法は粗ぼ之を左の如くに約言するを得べし。曰く、我等は、羅馬政府が、エジプトに於て、十四年毎に戶籍調べをなしたるの證據を有す。而して已に之をアウグストの時にまで、溯るを得たり。是れ明かに紀元二十年の戶籍調べに屬するものにて、今日までに發見せしものの最舊の文書なり。思ふに、此のエジプトの戶籍調べは、羅馬政府行政の一部分にて、その他の證據は、路加傳の此の語を除けば悉く湮滅したりたるならん。而してジョシファスの擧げたる戶籍調べの時日が、紀元六年、恰かもエジプトにて得たる第十四年度に相當するは、注目すべし。若し紀元六年の戶籍調べの前に、更に戶籍調べありしとすれば、その時日は、紀元前八年なるべく、而して紀元前八年の現状を知る爲め、實際の調査は、紀元前七年にありたるならん。

五十三

アウグストの時、紀元前九年頃よりして同七年頃までスリヤの管理者た

りしセントアス、サタルニナスがユダヤの戶籍調べをなせりて、トルチュリアンの説は、ニマルシオンを駁す。四の十九、確かに福音書以外より探り得しものに相違なく、而してルカがヘロデの生前に戶籍調べありしてふ記事を確かむるに足れり。又ヘロデの生前、パレスチナに於て、羅馬の戶籍調べありたらんとは、紀元三十六年、スリヤの管理者ヰイテリアスの時、キリキア、トラケアに羅馬風の戶籍調べありて、國民之に反抗し、而してヰイテリアスは、その王アケラオを助けて此の動亂を鎮むるため、羅馬兵を派遣したりて、ふ事實により、之を知るを得べし。タシタスの「年代記」六の四十一。ヘロデは、その臣民の戶籍を調べよとの命を得て、之を屈辱の徴證とし、殆んど之に憤激したるならん。而して彼は、サタルニナスが管理者たりし間、アウグストと相親善ならざりしとの事實あり。ジョシファスの「アンチクイテイス」第十六卷九の一—三。此に於てか、教授ラムゼイは以爲へらく、彼は戶籍調査のことに關しては、アウグストの勅命に従ふを避けんとしたるならん。而して多少の猶豫の後、ヘロデは遂に之に服従するに至りしとせば、戶籍調べは、紀元七年より六年までにありたるならん。而して羅馬政府はヘロデに許すに、出来るだけ、猶太風に之を調査すべきを以てしたるべきが故に、猶太人は何れも皆出来るだけ、先祖の郷

里に於て、登記を受くべしと命じたるならん。此を以てヨセフはベテレヘムへと旅行せり。亦マリヤにして若しその子をダビデの末裔として登記せんと欲せしとすれば、ヨセフと共に、ベテレヘムに至りたるは、怪しむに足らず。而して斯くの如き遷延ありしとすれば、戸籍調べは實際、サタルニナスの召還後までは、是れなかりしなるべく、随つてトルチュリアンの説は、單に彼がサタルニナスの時、スリヤに於て、戸籍調べありしを知るを示すに止まるならん。

五十四 サタルニナスの相續者をヅアラスといふ。此人ヘロデの死後までも、管理者の職に止まりぬ。然らば、如何にしてルカは、クレネオが管理者たりし時戸籍調べありしといひしや。曰く、クレネオは、紀元六年スリヤ駐在の羅馬公使たるに先ち、已にスリヤに駐在したるは、世の久しく知れる所なり。而してクレネオは、紀元前六年頃東洋にあり、前に會てスリヤと相合して一州となりしキリキアの境界の動乱を鎮めたる證據あるに似たり。此頃スリヤの管理者はヅアラスなりしも、クレネオは、當時羅馬の兵力を代表するものと見做さるゝことなしと謂ふべからず。而してヘロデ若し此の有名なる將軍のスリヤに在りしため、勅意に服従するに至りしとせば、路加傳の語、誤りにあらず。随つてイエス誕生の時の戸籍調べは、

ヘロデの生前、猶太風によりて行はれたるものなり。而してこはクレネオがスリヤ、キリキアの羅馬兵を司令し居たる時にて、彼が羅馬の權力もて、之を強むたるに由る。果して然らば、イエスの誕生は、多分紀元前六年にてヘロデの生前なるが故に前に擧げたる四點の暗示と相符合す。而してイエス若し紀元前六年に生れ給へりとするれば、紀元二十六年そのバプテスマを受け給ひし時は、三十二歳なりしなり。

五十五 馬太傳に見ゆる博士たちをユダヤに導きし「星」のことはイエス誕生の時日を算定する確證とはならず。されど、少くとも、紀元前七年の春と秋とに、木星と土星とが稀有の會合をなせしことを示す功なしとせず。こはケブレルが一千六百〇三年同一の會合を視察したる結果、始めて唱へ出せし所なり。占星學を信すること甚しき人々は、斯る天体の現象を見て、太く感激せしは言ふを待たず。されど、こは博士たちの見たる星を説明するを得るや否やは詳かならず。若し説明するものとすれば、更に誕生の時日を確むるに足れり。即ち紀元前六年を距る遠からずといふこと、是れなり。

五十六 我等は是れより更に進みて、誕生の時季即月と日とを算定し得べきかと

いふに、こゝに一事の記憶し置くべきことあり。他なし、今日の基督降誕祭は、四世紀以前には行はれざりしものにて、其の十二月二十五日を降誕日と定むるに至りしは、是れより以前廣く異教國に行はれ居たる冬至祭を聖むる爲めなりしは、證據殆んど分明なりといふことなり。若し何等か時季を暗示するほどの證據存すとせば、それは路加傳の「羊を牧もの有けるが野に居て夜間その群を守たりしに」(二〇八)といふ語ある而已。此語を以て見れば、その時季は、夏ならざるべからず。冬には、羊は之を欄に入れ置くべく、野に放養し置くべきにあらざるなり。

五十七 此故にイエスは紀元前六年の夏に生れ給ひたるもの、如く、又紀元二十六年にパプテスマを受け給へり。而して其傳道中の第一回の逾越は、二十六年か二十七年の春にありて、二十九年か三十年の春に磔殺せられ給ひたるに似たり。

第五章 イエスの幼時

太一〇一―二〇二十三。路一〇五―二〇五十二。三〇二十三―三十八。

五十八 使徒たちと同じ世紀の中に、基督教徒の想像極端に走せてイエスの真相を誤まり、徒らに之を偉大にせんとして、其の幼時に様々なる奇蹟を付加したることあり。斯くして生出せしイエスの行爲の無愛想なる、殆んど皆眉を蹙めしむるもののみなるは、驚くべきことなり。夫れイエスは長じて後「聖潔して不善ことなく、纖垢なくして罪人に遠かり」(來七〇二十六)給へるものなり。然るに其の若き時は、憤怒の餘りに、死を以て其の友を罰し、而して此の罪を訴ふるものを盲目たらしむるが如きことあるべきか(トスマ福音書四、五)。又其の教師を嘲けり、傲然として其の制御に抗するが如きことあるべきか(僞馬太書三十、三十一)。又其の通常人の状態に優れたるを顯すとて、其の水瓶の破れし時、水を上衣に包みて運びしといふが如き(同書三十三)或は又安息日に戯れに土を以て鳥を作り、其の悪戯をなすを叱せらるゝに及びて之を飛揚せしめしといふが如き(同書二十七)是れ何れもイエ

スに似付かはしきことなるか。如上のこと及び之に類する幾多の古譚は、全くイエスの眞の榮光を解せざるを示す。而も初代の人々が、其の崇敬の想像を逞ふして、或はイエスの幼時を記述し、或は其の降誕と降誕以前の事情を書けるものには、斯くの如きもの枚擧に遑あらず。而して響感すべきものにあらざれば、區々たる小事にて、害あるも、益あるを見ず。

五十九 凡そ是等のことは、何れも皆、使徒たちの思想以外、感情以外のものたりしは、言ふを待たず。是れ馬太傳と路加傳の初めの二章以外には、新約書中、一ヶ所として、野に於けるパプテスマのヨハネの傳道以前のことを記せざるを見て、明かなり。夫れ福音書とは、人の見聞せしことの證言を集めたる書にて、(約一〇十四)又書翰とは、其の信仰と希望とに對する關係に、實際的の解釋を下したる書なり。使徒たちは、如何様にしてイエスの此世に來り、如何様にしてイエスが其の幼時を遇ごし給ひしかを研究するまでもなく、主の神性と、其の無罪とを認むるに、何の困難だも感せざりしなり。即ち使徒たちの基督觀の基となりしものは、イエスの人格なり。決して如何様にイエスが此世に來り給ひしかにては、あらざりしなり。且つ夫れ馬太傳と路加傳の初めの二章は、之をその後起りたる無稽の古譚と同視す

べきにあらず。カイムは、典内福音書と典外福音書に於けるイエス幼時の譚を同視せんとしたれども、實は此の兩者の間に、途ゆべからざる鴻溝あり。即ち一方には、敬虔にして且つ美しき餘情を存するも、一方には、不作法、無愛想にして且餘裕なき高慢を見る而已。

六十 されど福音書の記事にも、福音書其れ自らの困難あり。他なし、二の記事は只その要點に於てのみ一致し、其の他は然らずといふこと是れなり。即ちヘロデの時代に、ベテレヘムにて、奇蹟的の降誕をなし、マリヤは其母にて、ヨセフは其の養父たり。後ちナザレに於て居住したまへりといふに於ては、馬太傳と路加傳と相符合すれども、其の細目に至れば、全然相同じからず。之を一見すれば、矛盾の觀を呈することもあり。之に加ふるに、馬太傳は、イエスの誕生に、榮光の後光を發射せしむれども、路加傳は、卑賤不自由の事情を描くのみ。是等の相違は、他の新約の諸書が奇蹟的の降誕に就て沈黙なることと共に、眞に一箇の難問なり。又弟子たち及び兄弟たちにして、其の事實なるを知り居たりとすれば、之に就て一言だもなきは、訝かしきこととする人もなきにあらず。されど、茲に看過すべからざる一事あり、他なし。若し福音書に記載せらるゝ如きイエス誕生の事情を日常之れを語ら

ば、單に其の家庭の名譽を攻撃せらるゝに止まるべしといふことなり。之に加ふるに、マリヤは、是れ等の奇蹟を承知しながら、尙ほイエスを誤解せし如く、路二〇一九、五十一。又可三〇二十一、三十一—三十五比見せよ、たとひ是等の奇蹟を公けにしたりとも、尙ほ他人の信仰を増すの益多からざりしならんといふことなり。マリヤは、イエスの傳道事業の経過を見て、之に驚きたる事實より察するに、餘程後ちまでも、之を公けにせず。獨り、是等の言を心に記して思想し、たるに相違なし。

六十一 新約書の各部分中、此の幼時の記事ほど、廣く且つ大膽に攻撃を受くるものは、他に是れあらず。而して若し幼時の奇事は、全く無根の偽報なりとすれば、使徒教會が何の必要ありて、斯る怪報を發明するに至りしかを研究せざるべからず。夫れヨハネとパウロの兩使徒は、主の神性を主張したれども、是れ其の奇蹟的降臨の爲めなりとの意を漏らさざりしを以て見るに、奇蹟談は即ち神性説の餘波とも見えす。又初代の信徒は、其の猶太人たるを、異邦人たるを問はず、主の神性を信する信仰を有形的ならしめんとて奇蹟談を發明するが如きことあり。異教には、神々の子等に關する神話もあれど、其の怪談奇説は、基督教的感情の靈感せしところ。又猶太人は、イスラエルの大人物の誕生に、イサクの如き、サムソンの如き、サ

ムエルの如き、神の働きの加はりしを認めたりと雖も、後世猶太教の傾向は、神子化身といふが如き感情には反對せり。或はいふ、奇蹟的降臨の話は、是れ基督教意識がイエス無罪説より得來りし結論なりと。されどパウロもヨハネも、等しくイエス無罪説を懷抱するに拘らず、未だ曾て其の奇蹟的降臨は、其の無罪者たるに必要なりと言ひしことなし。或はいふ、是れ初代の基督教徒が、マリヤの處女性を榮めんとする熱心の結果なりと。こは確かに、多くの典外書の古蹟の傾向に相違なきも、而も此の感情は、猶太人の感情と、新約書の教訓に背反するものにて、マリヤは、イエスの後、他に子女を擧げしてふ福音書の證據に矛盾す。

六十二 之に加ふるに、マリヤ(路一〇四十六—五十五)と、ザカリヤ(路一〇六十八—七十九)の歌は、當時已に奇蹟的降臨の觀念ありしを示し、十字架説が基督教のメシヤ説を一變せしめしは、是れより後ちなるを知るべし。而して此の一變せる觀念は、書翰と使徒行傳とに夥多是れあれど、右の兩歌が若し後日に發明せられしものとすれば、何故格段なる基督教的觀念の痕迹なきかは、殆んど解し得べからざることなり。即ち猶太人の基督教徒は、之をして現状のものよりも、一層基督教的たらしめんことを望みしなるべく、異邦の基督教徒は、現状の如くに、如何にも強く、如何

にも自然に猶太的たらしめ得べきにあらず。又基督教徒にあらざる猶太人に至りては、斷じて之を發明し得べきにあらず。之に加ふるに、奇蹟的降誕の信仰は、いと古くより行はれしめて、イグチシアスの證言あり。此故に、之を古譚として、其の起源を探るよりも、寧ろ之を奇蹟として其の提供する證據を承認する方途に容易なりと感ぜざるを得ず。奇蹟的降誕てふ觀念は、近代の思想には甚しく違背せるものにて、他の證據よりイエスの超然性を認めずんば、殆んど之を信用すべからざるほどなり。神子化身は、奇蹟的懷妊を要すとは、言ふべきにあらず。而も、奇蹟的懷妊は、神子化身の最も適當なる方式たるは、之を認めざるを得ず。

六十三 イエスは、其の弟子等によりて、神性を認められしと雖、その幼時にありては、他の小兒と一般、他の方に依頼して獨立の力なく、童時と青年時とを經過して壯年時に至るまでは、極めて自然の生長を遂げ、靈の事に遲鈍なる隣人等は、其の高大なる自任を信用する能はざる程なりしとは、福音書の記事の示すところ。而して此點、我等に取りて頗る大切なりと謂はざるべからず。イエスは、凡ての點に於て、其の兄弟の如くなりしといふ(來二〇十七)。而して路加傳にある二の句は、(三〇四十五、五十二)イエスの生長、その前驅者のそれと異なる所なく(路一〇八十)、或は又古代

の預言者とも相同じかりしに似たり(母前二〇二十六)。されば此の句によりて、我等の判定し得ることは他なし、イエスは、幼時より壯時まで、如法の發達を遂げしといふことなり。而して之れより後ちの經歷は、福音書に示さるゝところを以て見るに、其の如法の發達が、毫も罪を交へざりして、聖書の教と(來四〇十五)能く相符合せり。

六十四 典外福音書の記事、何れも厭ふべしとすれば、我等はイエスが幼時のあらしの事情を知るをもて満足せざるべからず。其の家庭と其の諸關係が、上品なりしとするは、イエスにつき相應しきことなり。されど其のナザレに於ける家庭の境遇は、微賤なりき(太十三〇五十五、路二〇二十四。利十二〇八比見せよ)。思ふに其家は、今日パレスチナにて見るものと大差なかりしなるべく、只一室か、多くとも二室か、三室に止まり、其の職業用の諸道具は、家庭用の僅かなる道具と相交り居たるならん。さればとて、我等は之を赤貧者の家庭と思ふべからず。ヨセフの境遇は、其の隣人等の境遇と不同なかりたるべきを以てなり。且つ或點よりいへば、此の家庭は、富めるものなりき。即ち或る傲慢なるラビ等は、卑屈の意見を懷き居たれども、猶太の家庭にありては、妻たり、母たるものは、高き地位を有したればなり。

況んや、福音書が、ヨセフの仁侠に就て語る所を見るに、愛は、此の家庭を支配し、以て聖童の生長に適せしめたるべきをや。

六十五 宗教は猶太人の社會の各方面に其の勢力ありき。而して此の宗教なるもの之を或人より見れば、儀式の宗教たり。詳言すれば、祈禱と断食の宗教、什分一献納と誇示的施財の宗教、秘儀と佩經との宗教なりき。されどヨセフとマリヤは、質樸なる種類に屬し、學者を教師として敬ふことは、他と異ならずと雖も、眞實に祖先の神を愛し、幼兒の如くに神の恩恵に依頼することを捨て、乾燥なる儀式を取る彼等の智慮を解せざりき。さればイエスは、最も美なる家庭生活を味ひし而已ならず、又最も善き宗教を知り居たりと謂ふべし。夫れ父の最も神聖なる義務としいへば、其の子に教ふるに、其の民の宗教を以てすることなり(申六〇四—九)。さすれば、子はそれより母の傍にて、神を知り、神を愛し、神に祈り、聖書を解するに至る。而して小供の好奇心は、イスラエルの既往の歴史、神の將來に對する約束を聞くと共に、無限の満足を感せしならん。是れ其の話は、刺激強くして趣味に滿ち、其の希望は豊富にして光明に充ちたればなり。さればとて、宗教的教育は、家庭に限られたりしにはあらず。エルサレムの神殿は、國民一般に取りてと同様、此のナザレの一

家に取りても、其の宗教的生活の理想的中心なりき(路二〇四—一)。而も實際上には禮拜と教訓と、主として其の會堂に於て養はれ(路四〇十六)、而して神は、其の聖書により、茲に現在したまへり。されば幼童たるイエスも、毎週こゝに至り給ひ、先づ希伯來語の聖書朗讀、次で之をアラメイック語に譯するを聞き、終りに之によりて日常の行爲に對する教を受け給へり。されど會堂は、寧ろ此の幼童イエスの智の方面に直接の影響を與へしのみならん。蓋しイエスの時代には、凡て樞要の都邑に學校の設けありて、會堂之を管理したればなり。イエスは恐らく其の六歳の頃より此の學校に送られ給ひしなるべく、そこに聖書を教へられ(提後三〇十五)、兼ねて希伯來語を讀み(路四〇十六—十九)又多分は書くとも學び給ひしならん。此の學校に於ける經驗如何は、「智慧も齡も彌増り神と人とに益愛せられたり」(路二〇五十二)といふの外、我等何事をも知らず。されど是れやがて典外福音書に於ける脈ふべき古譚を顛覆するに充分なり。

六十六 イエスが童時より壯時に進むに伴ひて、肉体上の生長ありつるは、人の能く知るところなり。而して此の生長と共に、智的の發展ありしことも、又之を認め易し。然るに是れほど普通には認められずして、福音書の記事の一要點たるもの

あり。他なし、イエスが他の小供と同様の境遇、同様の刺激の下にありて、其の道徳的生活が、次第に發展せしことなり(來四〇十五)。先づ壯時のイエスは、木匠たけみとして知られたるが(太十三〇五十五)、イエスは此の職業を習ふにより、大いに自己の力を用ふるの術を知りたるならん。而してそれよりも大なる訓練は、其の兄弟と姉妹とに交はるより來りたるならん。蓋し彼等はイエスのなすところを解せず。その生活のいと深き真相を洞觀する能はざりし故なり。されば、イエスは、幼童らしき幼童なりしと見るにもせよ、その如何にして又何故に、己れが他と異なるかを知るに先だち、いと早くより、他が己れと異なるを多少明らかめ給ひたりと謂はざるを得ず。而して此の結果として生ずるは、孤立の感なるが、是れやがてイエスのために自主的精神の練習所となれり。是れ孤立は、後ちの古蹟がイエスの幼時を汚したるが如き傲慢不遜を養ふの基たればなり。イエスが四人の兄弟の名は馬可傳に見ゆ(六〇三)。即ちヤコブとヨセとユダとシモン是れなり。又同福音書は、更にイエスに姉妹ありて、後ちナザレに住せしことを記せり。此の兄弟姉妹は、等しく、同一の家庭の感化を受けしものにて、然も此の感化に背きたりしとは思はれず。山上の垂訓と雅各書との間に存する思想及び感情の類似を見よ。決して師の弟子

に對する感化とのみ之を解し去るべきにあらず。是れヤコブが弟子となりたるは、主が復活後のことなればなり。そは何れにせよ、イエスが家庭の交友は、非常に刺激的なりしとか、若しくは非宗教的なりしとか想像するは、理由なきことなり。只イエス全く彼等と相同じからざりし而已(約七〇五)。而して此の相違は、道徳上の訓練となり、無罪より進みて積極的の善に至らしむる一手段とはなれり。家庭已に斯く訓練の學校なりしとすれば、其の隣友は如何。曰く、靈的の教育一層不熱心に、一層不充分なる彼等なれば、其の自主を義と發達のため、一層の好機會を與へしは、言ふを待たず。後年イエスが、ヨハネの如き山野の傳道者とならず、却て自らも社會的なると共に、又他よりも社交を求められ給ひしは、孤獨にして其の徳を養ひ給ひしにあらず、却て普通の社會と交際し、之に伴ふ鍛鍊誘惑に克ち給ひし結果なるを知るに足れり(來二〇十七、十八)。

六十七 さはいへ、イエスは亦秘密の生活を送り給ひしこともありとせざるを得ず(太六〇一—十八)。後年、熱心なる祈禱の人となり、祈禱を以て、其の公生涯を初め(路三〇二十二)、祈禱を以て其の公生涯を終り給ひし(路二十三〇四十六)イエスは、その童子たる時、單に家庭と會堂の祈禱をのみ知り居たりとはいひ難く、靜かなる所

にありて、獨り神に祈り給ひしことありと謂はざるべからず。イエスに宗教上、變則的の發達ありしと言ふは當らず。蓋しイエスは、古今萬國に於ける完全なる精神的健全の最好例なればなり。而も我等は、イエスがいと少き時より神を知り、多く神と共に住し給ひしと信せざるを得ず。

六十八 次にイエスの此内部的生活に加へて、其の譬喩や他の教訓に顯れたる外部の自然界に通曉し給ひしとを考察するは、益なしとせず。イエス若し其の家庭と村内の俗塵を避けんと望み給ひしとすれば、ルナンの記せる如く、左記の光景その眼障を遮りしならん。曰く、「村内より見ゆる所は狭小なり。されど最高の家よりも尙ほ高くして、小止みもなき微風に吹き拂はるゝ高原の上に立てば、其の眺望、えも言はれず。西の方にはカルメルの峰、^{カルメル}の如くに連なり、而して其の突如として断えたるは、海に入ればならん。次にはメギドンの戴ける二重の嶺、列祖時代の靈跡點々たるシケム地方の山々、シユナムとエンドルの或は愛すべく或は恐るべき懐古を伴へる書^{シケム}の如きギルボアの丘陵、古人が乳房に比したる美にして圓きタボル山等一眸の中に落つ。更にシユナム山とタボル山との間に見ゆるものは、ヨルダンの谷と、ベリアの高原にて、連綿恰かも一條の線の如し。次に眼を北に轉

すれば、サフエドの山々、海に向つて走り、^{サフエド}聖ジャレ、ダルクを隠せども、カイファの海は尙ほ之を見るを得べし。イエスの眼界蓋し斯くの如し。而して此の美なる境遇、此の神の國の搖籃は、即ち多年の間の彼が世界たりしなり。げに彼は其の生涯の間、幼時に見慣れたる境域以外に出でしこと殆んどなし。遙かに眸を北の方に注げば、ヘルモンの側面にあるカイザリヤ、ピリビをさへ見るを得べし。是れ彼の到りたる異教界の最北端にあらずや。又南の方には、趣乏しきサマリアの丘陵見え、人をしてその先きにある熱風吹き荒むユダヤの地の荒涼を思はしむ。イエスは斯くの如き光景の中に住み給ひて、その幼時の間、肉体の生長、心の開發、道徳の訓練を受けたまひ、兼ねて又心靈上の進歩を遂げ、着々として神と己れを愈々明らかに給へり。

六十九 此の心靈上の進歩は、いと早くより顯れたること、イエスの幼時の話を見て之を知るを得べし。抑も童子生長して十二歳となれば、法律上、壯者と同様の義務を負はしむるは、是れ猶太に於ける風俗なり。而してイエスがエルサレムに上り給ひしは、思ふに斯る義務を負ふに至るための準備たりしならん。イエスは、幼よりエルサレムの神聖と、神殿の榮光とを飽くまで教へ込まれたれば、遙々ガリラ

ヤより旅し來て、橄欖山の肩に立ち、初めてシオンを望み給へる時の感想は、之を推するに難からず。又その神殿に詣で、禮典を見るに及びては、坐るに畏敬の念に充され、批評の心を抑へて見るものを理想化し、聖書に示されし意義を思ふに忙はしかりしならん。又神殿の庭にありては、其の少時、家庭と學校とにありて見聞し給ひし律法と約束とにつき、その民の中の博識者と熱心に相語らひ給ひしならん。亦ヨセフとマリヤの兩人が、久しくイエスを求めし後、遂に之を神殿の中に發見せし時、その驚きのほどは、之を察するに餘りあり。蓋しイエスは、之を己れが發見せらるべき至當の場處と自認し給ひたればなり。此時マリヤに對して、我は我父の事を務べきを知らざる乎』路二〇四十九と訝かしみ給へる間の中には、後日の神に對する一種特絶の意識の豫告あるを見る。さればとて此間は、其の眞摯なる間にあらざりしと思ふなかれ。亦年齢にも似合はざる早熟の隨責にもあらず。神の子てふ自意識は、此時漸やく、その心に開け始めたるにて、未だ充分に、また明確なりしにはあらず。こは、イエスが直ちに父母の命に應じ、後ち數年、ナザレにありて、之に服従し給へるにて知らるべし。されば、イエスの言行を解釋するに際し、苟も演劇的の臭味あるものあらば、悉く之を排斥し去るを安全とす。イエスは常に自ら

欺き給はざりしこと、又そのヨセフとマリヤとに服従し給ひしは、子たる依頼の念より發せしにて、何等教訓の目的より從順を示せしにあらざること、を我等信せざるべからざるなり。

七十 所謂「我と我父の事を務べきを知らざる乎」の間の外には、ヨハ子の悔の改めを絶叫するの聲、全國に響きわたるまで、別にイエスの内部的生命を窺ふべき便宜なし。斯くて木匠の子は、自らも木匠となりしが、ヨセフは、イエスの傳道開始以前に死せるもの、如し。此の死は、イエスをして、心靈上の退隱をなさんとするも、得ざらしめしならん。蓋し家庭に對しての責任と、職業上の多忙とは、其の日々の時間の多分を占めたるべきを以てなり。こは、我等が最健全の感情より嬉しく思ふところ。又初代の基督教徒の感情にも反せざりしもの、如し(來四〇十五)。即ちパプテスマのヨハ子は、野にて教育を受けたれど、イエスは然らず。人と普通の交際をなす間に生長し、彼等の家庭に歡迎せられ(約二〇二)、その日常の舉動を知り、貴賤貧富、すべての人々の友となり給へり。偕イエスは、そのエルサレムに上り給ひし後ち、尙は數年の間を學校にて送り給ひしかと思はる。その故、如何といふに、此の青年は、學校教育のためか、會堂の説教を聞きしたためか、抑も亦日常の経験のた

めか、長老たちの傳説を知るに至り、而して彼等の之を守るは、神の要求し給ふ義の嘲罵に相當するを悟りたればなり。されどイエスは、此時尙ほ、律法と預言者の中にある義に就て、別に新意識もなかりしものゝ如く、其の心には、神に對して、充分調和の感ありしものと思はる。又イエスは、深くイスラエルの救ひの望を思ひ廻らし、古代の預言者と、近代の歌人（ソロモンの詩篇十七の二十三）と共に、神がその約束に従ひ、その民のために、ダビデの子たる王を興し給ふべきを期待し給ひしならん。

七十一 此他イエスは亦、ナザレの山々を徘徊し給ふ間に、その前に緡かれたる一種特別の書物を読み給ひしならん。蓋し草や百合花の美は、天國來現を宣説し給ふに至りて初めて發見し給ひしものと思はれざればなり。又山中に一夜を祈禱に費したまふの習慣は、其のバプテスマを受けし後、新たに成りしものにもあらざるべきを以てなり。又イエスは、『なんぢは我が愛子』（可一〇十一）てふ召を受けし後、初めて人を愛し且つ其幸福を思ふに至りしとも思はれず。他日明かに人の心を讀破し（約二〇二十五）給ひしイエスは、ナザレにありて其若き時より隣里郷黨と交り給ふ間に、能く此の術を自得し、兼ねて又人の罪とその要求とを知るに至りしに相違なし。而して天國なるもの、畢竟己れ自ら王となりて、忠信の人を率ゆるに

外ならずとの確信は、やがて是れ神のイスラエルに果たし給ふべき約束なりと思ひ給ひしことも、往々是れあるべし。果して然らば、イエスは無事にその職業を勵み、靜かに神と交はり、公けに人を愛し、歴史と預言を研究して、神の實際人類を支配したまふべきを望みつゝ、其の日を送り、その業を營なみ、而して『智慧も餘も彌増り』神と人との益愛せられ（路二〇五十二）たまひしなり。

第六章 バプテスマのヨハ子

太三〇一―十七四〇―二十四〇―一十二。可一〇一―十四六〇―十四―二十九。路一〇五―二十五、五十七―八十三、三〇一―二十二、九〇―七一、九。約一〇十九―三十七、三〇―二十二―三十。

七十二 イエス十一歳の時に於ける神殿事件の後、福音書中初めてイエスの現はれ給へるは、ヨルダンの岸に於て、新預言者よりバプテスマを受けんとし給へる時、是れなり。而して此のバプテスマのヨハ子は、偉大の人物に相違なかりしも、尙ほ我等の心中には、單にイエスの助勢者として映するは、是れイエスの偉大なることの無言の一證なり。されど此の野の預言者の偉大なりしは、當時その隠極に争ふて之を尋ね行きし人々の輿論なりき。然るに、今日の人の多くヨハ子に注意せざる所以のものは何ぞや。他なし。全く彼に關する報道の乏しきが爲めなり。然り、その詳細は之を知るべからずと雖も、彼の面目は極めて明かに之を窺がふを得べし。即ち彼は峻嚴なる沙漠の子にて、優柔なる人事を厭ひ、その民に對しては、神の怒りの來るべきを警告し、之に先ちて悔み改めを慫慂せり。又彼は、税吏や娼婦

の注意して、其民の長老等の輕んじたる實行的の義を宣説する傳道者なりき。又彼は、大膽不敵の硬漢なりしかど、競こことなく喧こことなく人街に於て其聲を聞こことなき者の前に立ちては、從順の意を表したり。而して人々、此のヨハ子こそは、約束のメシヤならんと思ひしに、案に相違して、彼はイエスこそ其の人なれといひ、イエスの次第に成功するを喜ぶの意を漏せり。斯くて、ヨハ子とイエスは、兩々相對峙して、一時其の働きに從事したりしが、此に至りてヨハ子に關する記事、斷絶し、爾後我等の知り得ることは、只王の前に出で、憚るところもなく、其の不徳と罪惡とを嚴責したること、鉄窓に呻吟して前日の確信次第に動搖の兆を呈するに至りしと、空しく其の時日を過ぐす間に使節をイエスに送り、その寛容にして且つ情愛ある返答を得たること、淫靡なる宴會、王の誓約、少女の要求、殉教者の死、弟子等の悲痛のこと、競争者ながらも、亦能く此の預言者の偉大なるを解せしイエスに其の訃報を傳へしこと等を知り得るのみ。而して以上は、是れ我等の福音書に由りて知り得るところなり。

七十三 ヨハ子は其の大相續者と異にして、ジョン・フラスいと丁寧之を記述せり。曰く、『此時猶太人の中の或者は以爲へらく、ヘロデの軍の滅亡は神のなさしめ

給ふところ、而してこは、彼がバプテスマのヨハ子に對して爲しつることの正當の罰なりと。蓋しヨハ子は善人にて、人々各其の徳を盡くし、又神を敬ふべく、隨つてバプテスマを受くべきを猶太人に命じたるに、ヘロデは之を死に處したればなり。斯くヨハ子がバプテスマを受けんことを命せし理由は他なし。若し之を罪を贖ふために用ゆるにあらで豫じめ義によりてよく其の靈魂を潔め置き、而して之を身軀の潔めに用ゐるなば、神の心に適ふものたるが爲めなり。さて、人々ヨハ子の言を聞き、大に感動せるを以て、其許に集まる人多かりしが、ヘロデは此のヨハ子の勢力、暴動を煽起するに至らんことを恐れ、是れヨハ子が勸むるほどのことは、何事も爲すべき形勢なりしを以て、之を死に處して、其禍の根を絶ち、悔を他日に貽さるを善しと思へり。此故にヨハ子はヘロデが猜疑の結果として前にも記せしマケラスの獄中に投せられ、此處にて遂に死に處せられぬ。されば猶太人は此の軍の滅亡アレタスのために、を以て神のヘロデに送り給へる罰なりとし、神が彼を怒り給ふの兆と思へり、『アンチクイチス』十八卷五の二と。此の一節は普通に、信憑すべきものとして認めらる。而して其の表面上に於ては、福音書の記事と相同じからず、又その禁獄處刑の理由も相異なりと雖も、その人物と感化の記述に至り

ては正鶴を誤らず。アンチキチスが之を獄に投せしにも、別に更に簡人的の動機ありしを想像せしむるに足るの餘地なしとせず。若し夫れヘロデヤの嫉妬がヨハ子入獄の眞實の理由なりしとせば、廣く世間に對しては、必ず他の罪狀を擧げしなるべく、而して其の場合には、ジョシフスの擧げしもの最も眞に近しと思はるなり。

七十四 さて此のヨハ子を研究するに當り、第一に起り來る疑問は、その人物なり。彼れ果して何處より來りしや。彼に關することは、一として奇ならざるものなし。彼は砂漠に住する制慾家たるもの、如く、世間の交際を絶ちて、曠野より得らるゝ些少の食物に満足せり。而も彼は、其の民の要求を洞觀し、又彼等の罪、特にパリサイ人、税吏、兵士等に縈へる罪を知れり。夫れヨハ子にして常に遁世者たりしならんには、斯くの如き思想あり得べきにあらず。由て思ふに、彼は自己の安心を得んがためにとて、砂漠に生活したるものにはあらず。又その服裝を以て見るに、彼れ自らエリヤの再來と呼ばれて、之を否認したりと雖、大に此の國民の、不信を責めたる古預言者の風あり(王上十七〇一、王下一〇八)。而して其の使命とするところは、二つの言を以て成る。曰く『悔の改めよ』。曰く『天國は近けり』是れなり。彼が天國

觀は、未だ充分に發達せしものとは言ふべからずと雖、亦一定せるところあり。他なし、是れ神の領國にして、神の審判を以て開始せらるべし。而して此の神の審判は、悔の改むるものには、益あるべく、神を敬はざる者には滅亡なる是也。於是ヨハナは、悔改めを呼べるなり。彼の傳道は、恩惠の傳道なりき。されど彼よりも大なるもの來りて、その前驅者の初めし事業を完結すべき時近きぬ。此の大なるものは、菓を結ばざる樹を截り倒し、禾場こばたけに於て糠ぬかと實とを篩ふるひ分け、悔改むる者には神の力もてバプテスマを施し、惡人には、審判の火を以て罰せんとす。此故に、彼の傳道は審判の傳道にて、ヨハナの如き恩惠の傳道にはあざりしなり。

七十五 果して然らば、此の怪しき預言者は、何處より來りしや。彼が其の少時の日月を過せし、而して初めて悔改と審判の使命を宣べたる野の近傍は、是れ彼のエツセ子人と稱せらるゝ一種の猶太人等の本據のある所なりき。此故にヨハナはたとひエツセ子宗の人とならざりしにもせよ、此の宗派の人と交際したるならんとは、從來人の想像したりし所なり。げにヨハナは、彼等よりして、種々のことを學び得たるに相違なし。又その通世的生活と燃ゆるが如き道念に對する彼等の同情を見ては、ヨハナも亦深く彼等を愛したるならん。されどヨハナは元來創新的の

人なれば、單に幾分の暗示を彼等より得たりといふに止まり、之が仕上げは、一箇の獨力を以てしたるに相違なし。彼が悔改めの教の簡單なるを見よ。又その説教が儀式に拘泥せざるを見よ。是れ此の通世者流と異なる點なり。ヨハナ或は此のエツセ子人と相知りしなるべく、又その訓練により多少の得る所ありしならんも、決して彼等の門弟にてはあざりしなり。

七十六 ヨハナの時代に於ける宗教上、思想上の指導者といへば、無論パリサイ人なりき。而して彼等を支配せし觀念、随つて又國民を支配したる觀念は、神の律法の神聖といふことなり。彼等も民の罪あることを知るが故に、其の悔改めを促がすこと絶えざりき。是れメシヤ降臨の遅延は、イスラエルに悔改めの欠けたるに歸因すといふことが、ラビの常套語たりしにても知らるべし。而して此の觀念は、ヨハナの觀念に近かりしにもせよ、彼等の宗教の外面的にして其の内部の空虚を看破せしは、彼がパリサイ人に對する言(太三〇八)を見て明かなり。小さき誠と大なる誠とに關する學者の口實や、安息日のことや、手を洗ふことなどに關しては、ヨハナに何の同情もなし。此故にヨハナ或は、この「モーセの位に座する者等」より何事をか學び得たるべしと雖も、彼決してパリサイ人にてはあざりしなり。

七十七ヨハネの使命は、天國の近けるを説くにありき。而して彼のマスラフバを受けんとせし人の多くは、思ふに熱心の國民黨たりしなるべし、切に此の天國の實現を期したりじならん。ヨハネ或はゼロテ人を率ゐて謀叛を起さんかとは、ヘロデの恐れたる所にして、之を死刑に處する公然の理由とせしは、シヨシフアスの記せるが如し。而して、ヨハネと此の國民黨とは、其の利害を同うせしと雖も、其の懸隔も亦大なりき。そのゼロテ人と根本的に相違したることは、税吏に對し、又兵卒に對する答に、其職務を攻撃する言の一點も存せざるを見て知るべし（路三〇三、三四）。
 七十八されど、茲にまた安息日法と傳説と、什分の一税とに拘泥するにもあらず、劍を握るを切望せしにもあざる一派の人々ありき。是れ但以理書や、黙示録にあるが如き、幻と夢とを見し輩にして、其の幻に於ては、神その突然たる審判により、其民に救ひを齎らし給ふべきを見たり。さて此の種類の人の思想と、ヨハネの思想とは、非常に相類したる點あり。例せば審判の切迫、警戒の言、來らんとする祝福の如きは、咸なヨハネも説きたる所なればなり。されど此の兩者の使命が、決して同一の思想圈内に働かしにあらざるは、ヨハネの言を以て、かのヨハネが野に在

る間に、パレスチナにて著作せられしと思はる、「モーセの推測」の如き書と比較しても明瞭なり。即ちヨハネが天國の宣説には、何等か實行的の點あり。何等か肺腑を刺すの點あり。又何等か日常の生活に當て符まる點あり。されど是等は此の夢現者輩の夢現に欠けたりし點なり。ヨハネは、此の夢現者輩の或者の如くに、罪に汚れし民に對し、紙積的の愛を有したるにあらず。根本に溯りて其病源のある所を尋ね、「悔改めに符ふ菓」を結ぶ代りに、儀式を以てせんとするが如きことを許さず。彼は、其の唇頭に、詰責と警戒とを盛りて沙漠より出で來り、憎むべき羅馬人に對しては、一語の攻撃をもなさず。アブラハムの特權を口にするものに、雨の如き打撃を與へたり。又彼は、その使命に就て寸毫も辨疏せず。聴衆を引き寄せんとて、或は夢現を利用し、或は古人の名を借るとをせず。舊式の預言者の法則を守りて、「彼等は之を聴くも之を拒むも」結二〇五尙ほ眞理を宣揚せり。「言毎に銳利骨を刺し、結局的諸問題に關して命令的の熱情あり。一切の虚偽に對しては、其の個人に於けるものと國民に於けるものとを問はず、寸毫も假借する所なし。何等法律上の意見あるにあらず。何等新しき善行あるにもあらず。又古代を信するの信仰あるにもあらず。只預言者的に人の良心を把握し、大聲疾呼、悔改と聖化を

促がして止まず『カイクムの「ナザレのイエスの歴史」第二卷二百二十八頁。されば其の類例をヨハ子の同時代の人に求むとも、我等之を發見すると能はず。只彼がその御前に跪きて「我は爾よりバプテスマを受べき者なり」といひし一人ある而已。』
七十九 されどヨハ子には、其の事業上の先行者なきにあらず。イザヤの所謂「なんぢら己をあらひ、己をさよくし」(賽一〇十六)てふ言の中には、ヨハ子に現はれつる精神ありて存す。又預言者の大思想たるエホバの日(即ち約耳二〇一—十四にある怒りの日、救ひの日)てふ觀念も、其の同時代の人々の好んで附加したる荒唐無稽の分子を脱して、ヨハ子の中に復活せり。その他悔改と新信仰への招きは、以賽亞と、以西結と、何西阿と約耳に多く、只正義を行へとの命令は、ミカ(米六〇八)の唇邊よりも、囚虜期中の大預言者よりも(賽五十八〇)鳴り出でし所。是によりて、ヨハ子の出入せし學校の何處にして、又如何ばかり能く其學課を勉めたるかを知るべし。而して斯くの如き單純は、ヨハ子の時代には、如何ばかり新規のことなりしか、又斯く預言者に私淑するには、如何ばかり創見を要したるか。是れ今日にては、殆んど想像し得ざるほどなり。マツカピースの戦争に、イスラエルの歴史の幕上りし時より以往、「野に呼べる聲」の現はれし時に至るまで、イスラエルには一人の權威を以

て神の聖旨を語る預言者あらざりき。されば、ヨハ子の現はれし時、國民の之に期待せしところは、即ち其の單純なる使命なりき。ヨハ子は其時代の産物にはあらず。即ち是れ古預言者の復活なり。而もエリヤの日に、神は、イスラエルの中に、バールに膝を屈せざる者七千人を保存し給ひしが、之と等しく此の後の世に於ても、活ける信仰ある人の無かりしにあらず。而して斯る敬虔者こそは、ヨハ子の如き眞宗教復古の任命を神に依託せられたる人物産出の土壤たりしなれ。
八十 ヨハ子若し斯く古預言者の復活なりしとすれば、之に次で、第二の問題起る。即ち彼れのバプテスマは何處より來り、而してそは、何を意味するかといふと是れなり。福音書は之を記して「罪の赦を得せんが爲の悔改のバプテスマ」(可一〇四)といへり。然るにヨハ子自ら、其の大相續者が聖靈と火をもてバプテスマを授けん(太三〇十一)と言ひしを以て見るに、其のバプテスマは、罪の赦しの表號にて、其手段ならざるを自認し居たるが如し。されどヨハ子のバプテスマとても、悔改めの表號たりしには止まらず。亦是れ其の相續者が設立せんとせし王國に對する忠義の告白なり。さすれば此のバプテスマに二重の意義あり。(甲)罪惡の舊生活を告白して之を抛棄すること。(乙)來らんとする王國に一身を献ぐることは是れなり。

果して然らば、此の禮典は何處より來りしや。曰く、エツセ子人より來りたるには
 ならず。其の理由は此のエツセ子人等の必要とせし沐浴は、ヨハ子のバプテスマ
 とは異にして、幾度も行ふべき儀式なりしが故なり。之に加ふるに、ヨハ子の
 禮典には、エツセ子人の沐浴よりも遙かに深き宗教上の意義ありて存したり。即
 ちエツセ子人の沐浴は、モーセの理想的の弟子として、儀式上の潔めを得るための
 洗身禮に過ぎず。バプテスマを施すに先ちて、預じめ其の肺腑を潔め、又その生活
 の根本的變化を求むるが如きは、是れエツセ子宗には絶えて無かりし所なり。若
 しヨハ子のバプテスマを以て、來らんとする王國に、献身の儀式と見ば、是れ寧ろエ
 ツセ子人の洗身禮よりも、其の入會誓約式に似たりといふべし。或はエツセ子人
 の沐浴の習慣を見て、ヨハ子之を換骨奪胎したるかも知るべからず。蓋しヨハ子
 は、其時代の習慣に全く感化せられざりしとは謂ふべからざればなり。されど此
 點に於ても、また其の思想に於けると同様、彼は、エツセ子宗の産物にてはあざり
 しなり。

八十一 且つヨハ子のバプテスマは、亦パリサイ人の影響を受けたるにもあらず。
 げに學者は『さま』の洗滌あらう〔來九〇十〕を行へり。されどヨハ子のバプテスマが悔

改めのバプテスマたり、生活一變のバプテスマたりとは同じからず。而してヨ
 ハ子がパリサイ人に模倣せしにあらざるは、パリサイ人彼に對して、然さは爾しかは何ぞ
 バプテスマを施すや〔約一〇二十五〕と問へるを見ても明かなり。彼等はヨハ子の
 バプテスマに一種無比の點を發見したるなり。

八十二 或はヨハ子のバプテスマは、猶太教の入會式に倣へるものと主張する人
 も尠きにあらず。成程異教徒にして猶太教に入らんとする者ある時は、後世の儀
 式は、之に倣するに、割禮と犠牲との外、又沐浴をも以てせしことは、明かなる事實な
 り。而して猶太人は、異教徒の生活を汚れたる生活と思ひたるが故に、沐浴を不必
 要とせしこととは、あざりしに似たり。若しヨハ子のバプテスマの起源にし
 て茲にありとせんか。かの猶太人がアブラハムの功を憑むを責めし言に、〔太三〇
 九〕一種特別の意義を添ふと雖も、こはカイクもいひつる如く、ナザレのイエスの歴
 史〔第二卷二百四十三頁及び其註〕ヨハ子は此點に於ても、他の思想に於けると同様、
 其の同時代の人に學びしよりは、寧ろ其の先輩に學びたるものなるが如し。モー
 セは、シナイ山に於て舊契約を受けんとするに先だち、民の所ところに往ゆてこれを聖まめ之
 にその衣服ころもを澀ちかすはべきを〔出十九〇十〕命せられたりといふ。今やヨハ子は、預言者

たちの約束せる如くに、新契約の設定を説き播む。此時に方りて、民また聖めの沐浴もて之がために準備するは、蓋し至當のことに似たり。此に於てか、ヨハチは、其の宗教的生活の淵源より、其の思想を取ると共に、又その儀式をも取り、以てイスラエルの既往の古雅純朴なる宗教思想を復活せしめたり。

八十三 此の古預言者風の復活は、誇學的のことにあらず、又好古家的のことにあらず。ヨハチはイスラエルの諸大豪傑の弟子にてはありしも、模倣家にてはあざりしなり。又その使命は、イザヤその他を研究して教育せられたるの結果なりしも、是れより學び得たるにはあらず。彼の説きしところは、自家の靈眼もて洞看したる眞理なり。而して其の力の要素は、「エホバ言たまはく」てふ古き叫びを儀文に於てせずして、精神に於て復活せしめたるにあり。此時ヨハチにして出でざらん乎、猶太は傳説と儀文の研究とに拘束せられ殆んど絶望に瀕したるならん。之に就ても、神の直接の使命を人の良心に傳へしヨハチの偉大なるを知るべきなり。而してヨハチの偉大は、開拓者としての偉大なり。單純の説教を以て人の肺腑に語りしことは、税吏と罪ある人の友たりしイエスまた然り。古預言者を基礎として此上に其教を建てしは、イエスまた然り。獨りヨハチは民をして新生命を

受くべき準備をなさしめ、「主の道を備へ其徑すちを直する」(可一〇三)ためにとて特撰せられたりし人なり。その他ヨハチが眞理を認むることの鮮明なりしも、其の偉大なりしことの一たるを失はず。又彼がパリサイ人の傳説の繁苛なるに反對して神の要求至つて單純なるを認めしこと、いひ、其の應接すべき人物の無罪のイエスたるを偽善的のパリサイ人たるを問はず、能く之を看破せし識見といひ、共に驚くべき神の賜物を受けて、且つ能く之を利用せし人たるを示す。而して彼の偉大は、此等の力を有しながら、尙自ら謙遜したること、に於て最も能く顯はれたり。夫れ大人物は多少自ら己れの大人物たるを知る。此故にヨハチが自から聲を以て任じたるも、是れ敢て自己を知らざりしがためにもあらず。又謙遜を粧ひて然りしにもあらず。やがて己れに嗣で來らんとする大なる者に比較して己れの無能を表白せしは、是れ其の眞摯の情に出づ。新郎の友は、新郎の聲を聞かば、之によりて喜び多し。新郎のために、己れの地位を失ひて、有るか無きかの境遇に陥ゐるを顧みざるなり。(約三〇二十)。

八十四 されどヨハチには、非常の欠點も亦是れありき。彼は神の義を熟知せり。彼は罪惡を捨つるものを神の赦し給ふべきを知り、而して之を宣説せり。彼は神

の命令の廣博なると共に、又單純なるを知れり。其の識見實に凡ならざりしと雖、(約一〇二十九—三十六)是れより以上、亦神の止み難き愛が人を救はんことを求むるを知らざりき。而して彼の之を知らざりしは怪しむに足らず。古預言者の中にすら、彼より多く之を知り居たるものありて、彼の最も敬愛せしイザヤも、彼よりは多く之を知り居たりとはいへ、こはヨハネ時代の思想にてはあらざりし故也。而してヨハネが其時代の思潮に先んじたるは、驚くべきものありたるも、彼は尙ほ新時代の人にはあらず、依然シナイ山よりするが如くに、其聲を轟かせし人なり。最小の小兒も、心より其の「我等の父」を學びなば、是れヨハネよりも高き智慧に達し、ヨハネよりも高き特權を有するものなるぞかし(太十一〇十一)。且つヨハネの謙遜は、眞に驚歎すべしと雖も、尙ほ其の大相續者の弟子たる資格に充分ならず。げに此時より多くの年月を経て後、尙ほヨハネの弟子にして教會に入らざりしものありつるなり(徒十九〇一—七)。思ふに彼は餘り勇敢にして、容易に人の弟子となり得ざりしなり。彼は他の企て及ぶべからざる謙遜を以て、其の地位を譲りたりと雖も、長く野の預言者たることを變へざりき。彼は自ら舊時代に屬すといふを以て自任したるもの如く、イエスの足下に跪きて、其の預期と希望とを之に獻げ、

たとひ言を以てせずとも其の心の中より、主よ、我儕は誰に往んや永生の言を有る者は爾なり(約六〇六十八)と告白するは、彼の能くせざりし所なり。

第七章 メシヤ的の召

太三〇十三—四〇十一。可一〇九—十三。路三〇二十一—二十四〇—一十三。
約一〇三十一—三十四。

八十五 ヨハチを中心として其の周圍には、社會の各階級皆代表せられ居たりき。革新を好まず、人民の激昂を恐るゝパリサイ人とサドカイ人、新傳道者に好意を表し、若しくは其の良心に感ずる所ある税吏と兵卒、罪を悔むて來れる人外者、熱心なる敬虔者等即ち是れなり。斯くて彼の新使命に關する風説は全國を飛び廻はり、ヨルダンに集まり來るもの雲の如し。ナザレのイエスまた之を聞きたまひ、ヨハチ即ち久しく沈黙したる預言者の聲に外ならざるを認め、神の眞理に對する忠信の情動いて止まず。民みなバプテスマを受けたる後路三〇二十一、彼も亦野の預言者を訪問したまへり。

八十六 路加傳の記載せる(一〇三十六)イエスとヨハチとの兩家族の關係は、此の兩者をして相親昵せしむるには至らざりき。而してヨハチは、其の親戚たるイエスの天職を知らざりしに相違なく(約一〇三十二)又彼のメシヤ觀も、イエスの如き

人物に於て、照應すべしとは期せざりしが如し(太三〇十一—十二)。されど双方相邂逅するに至りて、一事の分明せしものあり、他なしヨハチはイエスが己れよりも聖き者たるを認めしこと是れなり(太三〇十四)。彼は一見、預言者的の靈眼を以てイエスの人物を讀破し、而して未だ其のメシヤたるを悟るに至らざりしとはいへ、後に至らんとする天啓を受くるの準備となれり。

八十七 ヨハチがバプテスマを授くるを拒絶せしに對するイエスの答は、(太三〇十五)是れ神の聖旨をなし給はんとする宿志の發表なり。此故に、少しも罪の告白をなし給はざりしことは、大に注意すべし。凡そ心の聖き人は、己れの不完全を自覺すること盛なるは、古今共に然り。而して罪の告白と、其の悔改とは、ヨハチの使命と、其のバプテスマに於ける第一の要求なり。然るにイエスは、自ら少しも悔改めの必要を感じ給はず。又一語をも告白することなくして、バプテスマを求め給へり。此のイエスの沈黙は、其の生前薰陶を受けし弟子等の感としての『彼罪を犯さず』(彼前二〇二十二)。尙ほ約八〇四十六と哥後五〇二十一参考せよて、語と共に、宗教的感觸を刺激することなしとせず。而もイエスは自得の風を示さず、服従以て『凡ての義しきを盡さん』(太三〇十五)とて來り給へり。是れ即ちイエス

をヨルダンに至らしめしヨハチのバプテスマの積極的方面なり。是より先きヨハチは、天國の來るべきを説きつゝありき。而して他日イエスの教に於て、此の天國てふ問題の占むる地位を以て察するに、イエスも亦多年之を思ひ廻らし給ひしを見るべし。イエスは預言者を讀みて其の約束の、主として精神的なるを悟り給ひしならん。さればとて、其の未だヨハチの許に行かざる前、其の同時代の人々の懷抱せし意見に批評を加へしとも思はれず。前にもいひつる如く、イエスは自家の舊真理を解する方式の新規なるを自覺するよりは、寧ろ自家の説と舊真理との契合を發見すること速かなりしならん(太五〇十七)。此故にイエスは天國のために、身を聖めよてヨハチの召を聞くや、之を義務の聲と認め、主の道を備ふるために、力の限りを盡さんとしてバプテスマを求めたまへり。

八十八 イエスが斯く身を聖め給へることは、是れ己が從順の所爲なり。其時他に群衆あることなく(路三〇二十一)而して彼の心は、全く祈禱に充ち居たりき。此時彼はその内部的生命を神に托し奉り、且又使徒を撰ぶ前に知慧を求め(路六〇十二)死に臨む前に力を求めし時(路九〇二十八、二十九)と同様、之に由りて天と交通せり。さればイエスの天國に對する忠信の發表は、「人に見せん」爲めにする義の行ひ

にはあらず。隠密たるに在して見たまふ父に對する熱愛の行ひなり(太六〇一六)。かのヘルモン山の祈禱に次では、變貌の事のありたる如く、今此の最初の聖別に於ても、天よりの應驗は顯はれたり。而して此の應顯の一部分は、ヨハチも亦解し得たり。蓋し彼も亦イエスの爲さんとする事に對して、神の與へ給ひつる聖靈の表號を目撃したればなり。此に至りて、ヨハチはイエスの我に優りし相續者たるを發見し、己れは只彼のために準備をなしつゝあるに過ぎざるを知れり(可一〇十)。約一〇三十二—三十四。イエスまた此時、聖靈の賜物のほか、「なんぢは我愛子、わが悦ぶ所の者なり」(可一〇十一)てふ天よりの言を受けたり。されど此の天よりの言は、只イエスにのみ來りしものにて、又其の忠信を誓ひつる天國建設の命令なりしことは、馬可傳と路加傳との言之を證し、バプテスマのヨハチの沈黙(約一〇三十二—三十四)また之を證す。『我愛子』てふ語は、此の時代の人々に取りては、明かにメシヤといふの義を有し(可十四〇六十二)比見せよ。隨つて此の天の聲は、イエスに取りて、メシヤ的の召に外ならず。換言すれば、彼が宗教的生活の根本的事實たりし神と父子の關係ありしを示すに止まらず、一種、公式的の意義を有したりしなり。

八十九 我は神の子なりてふ感は、イエスに取りて、少しも人らしからぬことにて

有りしにはあらず。此故に其の傳道中には、人をして己れと同様神の子なるを自覺せしめんとし給へり。而も其の少時に於て、我は、他と異なりとの感念にも達し居たりと謂はざるべからず。其のバプテスマの時の告白をして不自然ならしめしもの、又ヨハ子をして、『我は爾よりバプテスマを受べき者』といはしめしものこそは、『此はわが愛子なり』てふ神の聲に首肯せしめたるものなれ。即ちイエスは、此の聲に含める召しと、新職務と天職とを承認し給ひしが、從來の準備は、全く此時のためのものであるをも認め給ひしと察せらる。

九十 ヨハ子をして、我に優れる者現はれたるを感せしめしイエスの聖靈の賜物は、決して一時の隨意的表號たりしにはあらず。斯くしてメシヤの膏沃がるべきものたるは、古の預言者も之を認め、賽十一〇二、四十二〇一、六十一〇二後の普通人も亦之を期せり(ソロモンの詩篇十七〇四十二)。加之、イエスまた其の生涯の實行に於て、常に此の聖靈の導びきに由りたまへり。かのバプテスマの後に生じて、其の新事業の難關となりたる誘惑は、是れ聖靈指導の最初の結果たりしなり。その後、に於ける聖靈の力は、福音書中著しきものあらざれども、昔の神の僕等が之に導かれ、之に助けられしと同様、イエスも亦其の指導を受け給へるや疑ひなし。但

しイエスは、完全に天の賜物を有したるの相違ありたるなり(約三〇三十四)。イエスが神に依頼し給ふを常に告白せしことは、聖靈の賜物てふ説の確實を證し、又其の能力權威の完全を常に自覺し給ひしことは、『度られざる』聖靈を有し給ひしを證するなり。

九十一 イエスバプテスマを受けて後、聖靈に驅られて「遇ひ給ひし誘惑」といふは、蓋しメシヤたれとの召の不意に彼に來りしものなるを證す。蓋し彼が奮闘苦心の結尾となりつる其の三箇の誘惑は、ヨルダンに於て聞えたる聲の反響なると共に、又其の意義に對するいと微妙の疑心なるが故なり。其の多少メシヤ的事業を命せられし意義を疑ひしは、是れ心的靈的の必要に出づ。而して福音書中、若し全く誘惑のことを記せざらんには、我等或は別に之を假定したるならんとは、世人の往々言ふ所の如し。イエスは即ちイエスなるが故に、此の召を受けて、神に關し、義務に關する其の理想と思想との一變を命せられたりとは思ひ得ざりしならん。而も己れの天國觀と、普通人民の預期とに、大差違あることを自覺し給へりとは謂はざるべからず。此の差違は、普通人民の思想定まれば定まるほど、又その希望熱すれば熱するほど、愈その事業をして困難ならしめぬ。さて此の召たる、メシヤはイ

エスの如き人たるべしと言ふを意味す。又神の國とは、第一には、人の心に於ける神の國にして、第二には、世界に於ける神の國たるべしと言ふを意味す。又メシヤの事業は、政治的なるよりも寧ろ宗教的たるべく、法律的なるよりも寧ろ恩寵的たるべしと言ふを意味す。而して此等イエスの爲すべき事業の要點は、殆んど皆其の國民の預期に反せざるはなし。然るをイエスは、斯くの如き反對の矢面に立ち、如何にして、成功し得べきや。彼が四十日の間の默想は、有りの儘に其事業の困難を示せしが、而も、此の召は神より來りしものとの彼の確信を動かすに足らず、又神の命じたまひしとを成し遂げ得る力ありてふ成算を疑はしむることなかりき。

九十二 福音書は、此の頃に於ける經驗を呼んで誘惑といふに躊躇せず。又初代の基督教徒も、主は實際誘惑を受け給へりと考ふるに於て、何の困難をも有せざりき(來二〇十八、四〇十五)。眞實なるべきの誘惑は假定的のものたる能はず。即ち被惑者たる靈魂に取りて實際面白しと見えたりとせざるべからず。若し具体的に人心を把握せざるが如き誘惑は、是れ眞の誘惑にはあらず。又之れに抵抗することも、勝利とは言ふべからず。或はいはん、イエスは無罪にして、其の唇頭一語の告白をも漏らさず。亦その心中、一點悔罪の念なくして、パプナスマを受けしにあ

らずやと。されどイエスは罪を犯すこと能はず、随つて「其の兄弟の如く」ならざりしとせば、兎も角、若し然らざる以上は、イエスの無罪は、眞の誘惑を経験したまふ妨害となることあらず。而して福音書は、屢次彼れの誘惑のことを記載する而已ならず(路四〇十三、可八〇三十一—三十三、路廿二〇廿八。來五〇七—九比見せよ)、亦明白に此等最初の誘惑の眞實なることを説示せり。就中、馬太と路加とに見ゆる記事は、是れ四十日間の奮闘絶頂に達したりし時の經驗なり。此時イエスは一心乱れず。全く眠食を廢したるほどなりしが、一旦その想を轉じて、地のことを考ふるに及び、飢の身に迫るを覺えたり。抑もモーセ、野に於てマナをその民に與へたる如く、メシヤも亦その民を養ふを得べしとは、是れ後代一般に信せられし所にして、恐らくイエスの時代にも亦然りしならん(約六〇三十一—三十二。エデルンシャイム)の『基督傳』第一卷百七十六頁。然るにイエス此時、恰かもその事業をなす爲に、聖靈の賜を受けしことなれば、其の力を用ゐて、己れの急要に應せんとの念を起せしとするも、決して、架空の想像にはあらず。且つ此の誘惑は、心を動かすの點なしとせず。蓋しイエスの肉体的急要は之を迫り、又イエス自身は制慾家にてもあざりしが故なり。然らば此の誘惑の惡しき點は、何處かといふに、他なし。是れ新

たに賜はれる力を利用して己れの用に供せしめ、以て神が萬民を顧みたまふ如くに、彼をも顧みたまふといふことを疑ふかの如くせしむる點にあり。而して此の誘惑は、單に神を信任せざらしめんとするにのみ止まらず、更に「爾若し神の子ならば」といふ點に關しても、疑を起さしめんとするものなり。此時イエス若し奇蹟を行ひ給はば、自ら己れの任命と、權能とを認むるを得たるならん。されどイエスは、自ら召を受けしことを疑ふを欲せず。立ちに神に對する不信を排斥し、多年の間事へ奉りし神の信仰にとは立ち退れり(申八〇三)。其の勝利たる實に著しと謂ふべし。是れ久しき間、忘我の境にありしものは、其の反動として一時、下等の慾情の要求に應ずるものなるに、イエスの精神は、何の猶豫もなく能く之に克ち得たればなり。

九十三 さて此の堅固なる信任は、更に他の誘惑の導因となれり。イエスが今後神に膏沃がれし者としてなさんとする事業には、四方八面、多くの困難ありて存す。イエスは其の民を知り、又その偏見を知り、又その心の頑冥なるを知りたまふ。又己れが彼等の理想とするメシヤと甚だ遠きことをも知りたまふ。又羅馬政府の執念く我を窺ふことをも知りたまふ。而してイエス以前、メシヤの任に當らんと

せし人なきにあらず。ガリラヤのユダの如き是れなり。されど彼等は失敗せり。今イエスは、己れが神の召を受けしを信すること深し。さればとて、彼は凡ての危険に頓着なく、一切の自重を打ち忘れ、偏に神の保護に信任して、不注意にも、その身を神殿の廊よりケドロン^{ケドロン}の岩間に抛つが如き輕率妄動に出づべきか。否、斯る誘惑に陥るものは、只狂熱者流のみ。イエス以外には、現に斯くの如きことをなせし人多し。チウダの如き(徒五〇三十六)、エジプト人の如き(徒廿一〇三十八)、バルコクバの如き(テオ、カシアス)六十九の十二—十四、ユーセピアスの「教會歴史」四の六は是れなり。されどイエスは、人神の保護を信すべしと雖、過信して之を試むる如きは敢てすべきとならずといひ、(太四〇七)此の誘惑を排斥して、其の心の全く健全なるを示し給へり。イエスが此後の性行は、此の答辯の明白なる註解なり。即ちイエスは、其の天職を曲げ、若しくは其の事業を挫折するが如き地位に陥るを避け(約六〇十五を見よ)給へり。而して其の遂に、國民の怨みによりて、己れのために備へられし死を受け給ひし所以のものは、その時機已に到着し、「我みづから之を捐るなり」(約十〇十八)と言ひ得たるが爲めなりとす。イエスが斯く己れの熱情に克ち、又凡ての事情に主たりしことは、是れその妄我者流、狂熱者流と異なる點なり。而

も過信は、却てなし易き方法と見えしなるべく、而して此の過信は、信任の外観を呈せしかも知るべからず。斯くイエスは、試みられ給ひたれど、罪を犯すことなかりき。

九十四 イエスは疑はざらんとして、過信に誘惑せられ給ひしが、之と等しく、自重せんご決心して、第三の誘惑即ち全然神に信任することに関して試みられ給へり。抑もイエスの救はんごし給ひつる世は、情慾に支配せられたる世なり。而して其の人民はメシヤを待ち望みたりしも、そは彼等の好める種類のメシヤなりき。今イエスにして世の罪惡と利己との主權を認め給はんか、即ち情慾と偏見との反對を免かれ給ひしなるべし。またイエス若しその時代に避くべからざる惡を認め、之に應じてその事業を行ひ給は、或は人を導びきて、容易に高尚且つ精神的なる天國觀に達せしめ得たるならん。イエス此の粗野なる心と、物質的なる望みごを知り給ふが故に、公然之に反對せず、却て之に迎合せんかとの眞實なる誘惑に遇ひ給へり。イエス決して「世の王國」の反對を輕視し給ふものにあらず。されどイエスは神がその對抗者を視遁し給はざるを知り、(太四〇十)而して神に對し、又己れの靈魂に對し、忠信を盡したまへり。斯くてイエスは前二誘惑に對すると同様、神の

僕等のイスラエルに對して語りたる眞理を使用し、以て此の誘惑にも勝を得たまへり。さればイエスは、其の兄弟等の如くに、凡ての點に於て誘はれ、何人も抵抗し得るが如くに抵抗し、而して理想的にいへば、何人も勝利を贏ち得る如くに、勝利を贏ち得給ひぬ。

九十五 福音記者等は果して何處よりイエスの此の誘惑の話を得來れるかを研究するは、強ち無益の好奇心にあらず。若し此の顛末が、全く有形界の出來事にて、イエスは、肉体的に、或はエルサレム、或は山嶺に運ばれたるものとするも、他日此の話を語り得る見證者の手近に居らざりしは、言ふを待たず。亦當時天下の萬國を一目に眺望したりといふは、(路四〇五)是れ必ず精神的のことならざるべからず。その理由は、如何ほご高き山なりとも(太四〇八)有形的に天下を一目せしめ得るものは、是れなきを以てなり。之に由て是を思ふに、此の顛末は蓋しイエスの熾烈なる心内の經驗を形容語にて記載せられしものならざるべからず。然かいへばごて、此の話の眞價を害ふことは、毫も是れあらず。蓋し誘惑は、活働力戰の心内の經驗とならずんば、眞の誘惑にあらずばなり。且つイエスは、その教の中に、屢譬喩を用ゐて、精神的眞理を顯し給へるが故に、福音書も亦、心内の力戰の眞實を顯す無

二の方法として繪畫的言語を使用せりと推定せざるべからず。何れにしても、此の一條の話は、イエスより出で、世に傳へられしとせざるべからず。如何様にイエスは之れを他に語り給ひしか、我等之を知らず。或は思ふ、カイザリヤ、ピリビの告白後、その諸弟子と閑談し給へる間に、此の經驗を語り出で、一にはその忠信なるガリラヤ人をして、一層能く己れの事業と其の方法とを了解するを得しめ、又一には、愚鈍にして其の預期の外るべきを知らざるものに、前以て準備したまへるものならん。

九十六 イエス此の誘惑を卒り給ひし時には、その心に明かに神より奮沃がれしものなるを確信し、それより後は一生の間、少しも逡巡を現はし給はざりき。イエスの設立せんとし給ひし王國は、是れそのナザレに靜かなる生涯を送り給ひし間に、且つ知り、且つ愛するに至りたる義の王國なりき。イエスは、勇敢なれども亦細心に、其の事業を始め、天父の主權を認むる人をその道の内に漁し入れんとし給へり。而して此の確信と目的とを外にしては、別に其の事業のための定案もなく、又如何様に其の死を遂ぐべきかといふ預期もあらざりしが如し。只第三の誘惑は、イエス必ずしも外見的の失敗(十字架上の死)を預期せざりしにあらざるを示す。

之を要するに、此の奮闘は、長く且つ重大に、是れ此の三誘惑は四十日間の最後のものにて、且つ四十日間の全体を代表するものなればなり。又その勝利は、偉大に且つ結局的なりき。斯くてイエスは、その面上、勝利の光と、交戦の記號とを印しつゝ、ガリラヤには、歸りたまひぬ。

第八章 最初の弟子

約一〇九—二〇二

九十七 イエス曠野に退き給へる後、バプテスマのヨハチは、依然として傳道とバプテスマを授くることを繼續し、ヨルダンの谷を北上して、その東岸なるガリラヤ海の下の淺瀬ヘタニヤといふ地にまで至れり(約一〇二十八)。思ふにガリラヤにてはユダヤよりも多くの聴衆を得しことならん。而して其の中には、絶えず湖水の四邊より來りて説教を聞きしものもありつるならん。例せばペテサイダのアンデレとシモン、ゼベダイの子なるヨハチ、又恐らくはその兄弟ヤコブ、又恐らくはペテサイダのピリポとカナのナタナエルの如き是れなり(約一〇四十、四十一、四十三、四十五)。又廿一〇二参考。

九十八 エルサレムの祭司等は、ヨハチの事業、那邊にまで達すべきかを疑ひ怖れ、遂に之に質問の使を派遣せり。而して彼等は此の使節として、人民の中に最も勢望あるバリサイ風の祭司とレビ人とを撰べり。此頃ヨハチと其の使命とが民心に與へ居たる印象如何は彼に對する質問に「爾はメシヤなるか」「エリヤなるか」

『預言者なるか』とあるを見るも(申十八〇十五を見よ)、又「然ば爾は何ぞバプテスマを施すや」とあるに徴しても明かなり。ヨハチの之に對する答辯は、その前より宜へ居たる我より大なる者、聖靈をもてバプテスマを授けんとすの言(可一〇七八)の反響のみ。只此の時には、此の大なる者、已に汝等の中にあり(約一〇廿六、廿七)といふを加へしを異とする而已。

九十九 此の對談は、イエスバプテスマを受け給ひし數週後にありしことに相違なし。その理由は、翌日ヨハチは、誘惑の場より歸り給ひしイエスを見て(約一〇二十九)、之を弟子等に指し示したればなり。思ふに、イエスの面上若しくは態度には、誘惑の場より歸り給ひしものとして、何物か其の初對面の時よりは、深くヨハチに印象を與へしものありつるならん。是れ彼は、此の當時の人のメシヤに就て殆んど思ひ及ばざりし預言に所謂「屠場はきりばにひかる、羊羔ヒヨドリの如し」てふ語を(賽五十三〇七)想起したればなり。即ちヨハチは、イエスを仰ぎ見ると共に、此の神秘的の預言その心中に輝き出で、「世の罪を任ふ神の羔を觀よ」とは叫べり。此の翌日、ヨハチはその二人の弟子と共に、イエスの過ぐるを見て、再び同じ思想を起せり(約一〇三十五、三十六)。それより後、イエス、ヨハチの居りし地を辭し、而して通常生活に歸るに

當りては、ヨハチは、再び凡庸のメシヤ的思想に復し、一時最高の真理に達したる識見も、あはれこゝに隠没し了りぬ。されどヨハチが非常の境遇によりて起したる一時的の識見の永續せざりしを怪しむなかれ。ペテロがカイザリヤ、ピリビに於てせしキリストに關する告白は、後日主の讞責を受けしこと(可八〇三十二、三十三)と、又その否認(可十四〇六十六―七十二)とに無關係なるに等し。

百 ヨハチの口より此等の證言を聞ける弟子等は、之をメシヤ的證言と了解せり(約一〇三十一―三十四)。されど十字架が彼等の希望を破碎せんとせし時(約二十〇九、二十四、二十五)その驚怖狼狽したるを以て見れば、勿論、深き意義を解して然りしにあらざるは明かなり。さて此等の弟子の中の二人は、直ちにイエスに従ひ、就中その一人なるペテサイダのアンデレは、此の新たなる教師に感ずること深く、その兄弟シモンを求めて、我等メシヤに遇へりと言ひしほどなりき。又他の一人は、ゼベダイの子なるヨハチなりしが、是れ亦恐らくその兄弟ヤコブに遇ひ、之を最初よりして、弟子の數に入らしめしならん。而して、此頃イエスは將さにガリラヤに向ひて去らんとせし時なりしが、其翌日いよゝゝ此の地を去るの時、此の小さき群にペテサイダのピリポを加へたり。ピリポはアンデレの感したる如くに感じカ

ナのナタナエルをイエスに携さへ來れり。さてイエスには高尚の心ある人を吸収する一種不可抗の力あり。又その新來者を知れること驚くべきものあり。此の力と此の知識とは、アンデレとピリポに現はれし如き効果をナタナエルに於ても現はし、而して彼は此の新しき教師を認めて「神の子、イスラエルの王」(約一〇四十九)となせり。

百一 以上列擧したる、第四福音書中の初期の諸告白は、之をカイザリヤ、ピリビにてイエスがペテロの告白を篤く是認し給ひしに對比して(太十六〇十三―二十)、聊か困難なしとせず。此の告白にありては、イエスは弟子等の思想と信仰とに明白の進歩ありしを認め給ひたればなり。而もバプテスマのヨハチをさへ、メシヤならずやと疑ひしほどの宗教的感想は(路三〇十五)、此のヨハチよりも大なる相續者を神に膏沃がれし者と認むること、蓋し當然かと思はる。其故はメシヤに關する人の思想の多様複雑なる、多少預想に反せしところありとも、尙ほ之を認受すべきを以てなり。況んや、イエスの如き微妙の人格的能力を有するものをや。即ち神の代表者として、熱心に或種の人の歡迎を受けたるべき筈なり。之を要するに、イエスが初期の傳道の形勢は、自身さへ首肯の意ましまさば、何れの時にも、メシヤと

して言播めらるべかりしなり。さはいへ、斯くの如き告白は、單に熱情の結果なるべし。弟子さへ未だイエスを知らず。況んや普通の國民をや。彼等何れもメシヤに關しては、高き希望と、稍一定したる觀念とを有し、而も是等は一として大失望の運命を有するものならざるはなかりき。彼等がイエスを知ることの少きは、イエスの自ら知りたまふ所(約一〇五十二)又その自重は、此の時代の狂熱者に對する態度に明かなり。イエスは夢現にはあらず。其の前途には、爲すべきの大事業と、教ふべきの大課程を控へたまひ、而して氣長に少しづつ之を教へ給はんとしたりしなり。さればイエスは、ナタナエル流の不充分なる信仰をも詰責し給はず。漸を以て、舊きメシヤ觀、神國觀に、代ふるに、新しき眞理を以てせんとし、管にイエスがメシヤたる爲めに之を愛するにあらず、イエス自身のため、又眞理のため、之を愛せしめんとし給へり。

百二 イエスのカナに赴き給ひしことが、第四福音書に記載せられたる理由は他なし。是れ其の新しき弟子等がイエスに不思議の力あることを發見し、而してこは彼が神に膏沃がれたるの證據に相違なしと断定せしは、實にカナに於てせしことなればなり。思ふに、此の奇蹟の時には、弟子等専ら其の能力と其の奇蹟とを考

へ、又イエスが天物を利用して婚筵の急要に應せしことをヨハネの禁欲的習慣に比較し、其の非常なる相違に驚きしことならん。而して斯くメシヤ的希望に充てる彼等の心は、他のことを憶念する餘地を剩さざりしならん。彼等は奇蹟を見たるに満足せり。是れイエスの時代の人より見れば、奇蹟はメシヤたるものの要件たりしが故なり(約六〇三十、七〇三十一、可八〇十一)。而して彼等が他のことを憶念せしは、是れ後日のことなりとす(約二〇二十二)。

百三 奇蹟は近代の人に取りては、大なる蹟きの石なるも、イエスの時代の人に取りては、却て援兵なりき。こはイエスの傳記を研究するものの無視するを得ざる事實にして、又輕視するを得ざる事實なり。されど奇蹟の問題は、證據上の問題にて、哲學上の可能、不可能の問題にあらずといふは、決して不當のことにあらず。而して今日の人が可能の程度を容易に斷言することなきに至りしは、甚だ智と言ふべし。若し夫れ奇蹟の問題は、證據上の問題なりとせば、イエスの一代に於ける奇蹟の證據は、その一代の終始を見て始めて之を解し得べし。されど、イエスの奇蹟は、イエスの人物の如何を窺ひ、且つイエスと普通人間の必要との關係を知るがために、之を研究し得ざるにあらず。カナに於ける此の最初の奇蹟の如き即ち是れ

なり。イエスはメシヤたるべしとの召を受けて未だ久しからず。而して此の召に對しては、曠野の奮闘に於て、忠信なる答を與へたまひ、爾後、父に倣ひて父の業をなすために發程し給へり。斯くてヨルダンに於ては、イエス尙ほ奮闘の痕跡を止め、之がため、パンテスマのヨハチをして以賽亞五十三章なる受難の救主を想起せしめしほざるが、今やガリラヤに於て、その日常の生活に復歸し、婚筵の賓客として、社交的の傳道を始め給ひぬ(太十一〇十九。又可二〇十五—十七、路十五〇一、二比見せよ)。是れヨハチの制慾主義に對しても、又パリサイ人の儀式主義、誇學主義に對しても、正反對の點なりとす。

百四 イエスの此の社交が甚だ注意すべきものたるは、其のカナに還り給ひし後、またパンテスマを受けし以前の家族的關係に復し給はざりし故なり。是れマリアが酒の乏しきをイエスに報せし時、之に答へ給ひし言に徴して明了なり(約二〇三—五)。イエスが此時マリアを呼ぶに用ひし稱號は、不敬にもあらず、又不深切にもあらざるは(約十九〇二十六)然ることながら、此の答辯は、やがて亦在來の意義に於て、イエスがマリアの子ならずとの警戒なり。イエスは新たに天職を賜はり、將來の一舉一動、みな之によりて決すべきものにて、マリアは又此の天職に對し、何

の關係をも有せず。聖書の中、マリアが其子と其子の事業とを解せざりし證據多く(可三〇二十一、三十一—三十五、路二〇四十八比見せよ)、その之を解せしは餘程後日のことなるが(約十九〇二十五、徒一〇十四)今も亦その一なり。さてイエスは、此の新たなる、又重大なる天職の確信を有しながら、其の最初の公務的行爲が、深切に社交上の急要を救ふにありしといふは、いと注意すべきことなり。イエスは、其の新たなる弟子に、己れの神權を示し給ふとて、賓客一同に喜びを與ふるの方法を取り給へるなり。此時弟子等は、恐らく充分に之を解する能はざりしならんも、單純に、自然に、イエスが熱心神に事ふるの意を顯し給ひしを諒せざるを得ず。

百五 イエスは、斯くて其の信仰を強くせし弟子等を率ひ、又その思想の奥を解せざるながらも尙ほ、全く己と分離せざりし母を伴ひ、又此時も將來もイエスと其の事業を解せざりし兄弟等を携さへ、カペナウンへと降り給ひぬ(約二〇十二)。是れカペナウンが今後、イエスの最大事業と説教との中心たるべきを證するなり。斯くてイエスは暫らく此地に止まりて、靜かに其の新しき友人等と交際し給ひしが、逾越の近づくに及びては、エルサレムに上り、此の國民の宗教的中心地に於て、公然メシヤ的の事業を開始せんとし給へり。

第貳編
傳道

第一章 傳道概観

百六 イエス其のバプテスマを受け給ひし時、命せられし業を始むるに當り、如何様に之をなし給へりや。今順序よく之を記述せんとして、先づ一の問題に遭遇す。即ち馬可傳の記事は、(一〇十四)馬太傳(四〇十二)及び路加傳(四〇十四)の記事と共に、ヨハネ禁獄の時をその時機なりとし、ガリラヤを以てその傳道開始の場處となせり。然るに第四福音書は、ヨハネの禁獄前、イエスと其の弟子とは、ユダヤにありて、傳道せりとなし(約三〇二十四)又此の傳道に先だち、エルサレムに於て、メシヤ的傳道の開始ありつるものとなす。約翰傳の初めの諸章は時日と場處とを擧ぐること詳細に(一〇十九—四〇四十三)又その記事も甚だ鮮活なるが故に、大に信用すべき價值あり。今此の記事を以て見るに、イエスの傳道は、他の三福音書に記されたるよりも前に已に開始せられしにて、此の傳道開始は、ヨハネの禁獄前、逾越節の時に方りて、エルサレムに於てありたるなり。之を稱して前期のユダヤ傳道といふ。

百七 馬可は何故、ヨハネの傳道終結を以てイエスの傳道開始の時となしたるか。

是れペテロが斯く彼に語り傳へたるの致す所なりとすれば、弟子等は、ガリラヤ傳道の始めを以て、イエスの建設的、成功的傳道の開始と認めたるがためなり。ペテロは、よしイエスに同伴して逾越に上らざりしとしても、ユダヤ傳道のことを知らざる筈なし。此故に、ガリラヤへの退去と共に、イエス一代の新舞臺は始められりを見るべし。

百八 ガリラヤ傳道の話は、主として前三福音書に記さるゝところなり。されど約翰傳も亦此の傳道期に、二の出來事を貢獻し、即ちカナの第二の奇蹟〔四〇四十六—五十四〕と、ユダヤに至り給ひしと〔五〇—四十七〕、又多くの人を養ひ給ひしことを一層詳らに記述せり〔六〇—七十一〕。其のサマリヤを経てユダヤに至り給ひしことは約四〇—四十五馬可傳の始めにある〔一〇十四、太四〇—十二、路四〇—四〕ガリラヤ移轉と同一事なるべし。馬可傳のガリラヤ傳道の記事は、〔二〇十四—九〇五十一〕貫進歩の記事にて、人をして此の一期を斷續なき一体のものと思はざるを得ざらしむ。

百九 馬太四〇—十二—十八—三十五と路加四〇—十四—九〇—五十との兩傳が、此の馬可の記録を襲用せるを見れば、其斷續なき一体のものたること、一層確定せられたりと言ふべし。されど彼等が増補する材料の排置を以て見るに、此の一期は之を時代順に研究するよりも、寧ろ問題的に研究する方可なるに似たり。かのパピアスの稱して使徒マタイの著なりといふ古書は、多くの場合に於て、イエスの説教の時日と場所とを記録せざるものと見ゆるが故に、第一福音記者と第三福音記者とは、何れも此の古書より其の材料を得ながら、其の意見のまに／＼之を各別のところへ分布せり。是れかの心配を戒むる勸告が、馬太傳にありては、山上説教の中に記載せられたるに、〔六〇—十九—三十四〕路加傳にありては、ガリラヤ傳道の終りに記載せられたるを見て、〔十二〇—二十二—三十四〕他を知るべし。若し夫れ此の種類の講話の一般的關係は、其の内容の性質より見て判定を下し得ざるにあらず。されど福音記者は、何れも明言する所なきを以て、之に付與するに、一層明確なる歴史的境遇を以てせんとするも、それは絶望の舉といふべし。此故に、問題的研究は、此の諸講話を此の一期に屬するものとして研究するを得るも、時代順の研究は、不確かなる想像に終らざるを得ず。是れ概して、ガリラヤ傳道期に於て然ることなりとす。さてイエスがカイザリヤ、ピリビの告白後より教へ始め給ひたる新教課は、其の公傳道の一轉機とはなれり。即ちイエスの事業は、此の危機以前にありては、

畢竟ペテロの告白を呼び出すべき問題の準備なりき。又是れより以後には、其の事業は即ち此時より預言し始め給ひし終焉のための準備なりき。而して此のガリラヤ傳道なるものは、約翰傳に見ゆる二個の出來事と、一の講話とを除けば、是れ専ら三福音書の記事なるは、前に已に一言し置きたるが如し。かの構蘆節カノカサハナに上り給ひしことは、約七〇一—八〇五十九、恰かもガリラヤ傳道期とその次期との境界に立つ。こはイエスが度々のエルサレム傳道の一例にて、又第四福音書著者が、他の三福音書に漏れたることに、重きを置きたるの一證なり。其の理由は、特にエルサレムを愛せしためなるか、又は、特にイエスのユダヤ傳道を詳知せるためなるか、兩者その一に居らん。

百十 馬可傳の記事は、ガリラヤの建設的傳道結了後は、十〇一。又太十九〇一と路九〇五十一参考、専らエルサレムと十字架のことに及べり。その旅行は直接にあらず、ヨルダンの外アンテバスの領地たるペリアを迂廻し、行く／＼説教と療病とを實行し給へり、可十〇一—五十二、太十九〇一—二十〇三十四。路加傳は、此點に達して、其書に特有なる一長文を挿入したるが、九〇五十一—十八〇十四、イエスのエルサレムに近づくに隨ひ、再び馬可傳と其の記事順を同ふす、十八〇十五—十

九〇二十八。可十〇十三—五十二参考せよ。然るに斯くルカが増補せるものは、カイザリヤ、ピリピの方法一變前に置くを至當とすべきものもあれば、又イエスの最終數ヶ月に屬すと見るべきものも尠からず。就中最終のエルサレム行は、非常に詳かに記載せらるゝが故に、イエスの傳記研究上、これだけは獨立に講究するを可とす。此點に於て、約翰傳は又一つの大切なる増補をなし、九〇一—十一〇五十七、此のエルサレム行も實は一回にあらず。其間に多少取り急ぎて屢次上京したまひ、以てエルサレムを救はんとの素志を實行し給へるを示せり。

百十一 最後にエルサレムに到着し給ひし時以後は、四福音書皆筆を揃へて、最終數日間のことと、磔殺のこととを説けり、可十一〇一—十五〇四十七、太二十一〇一—二十七〇六十六、路十九〇二十九—二十三〇五十六、約十一〇五十五—十九〇四十二。其の最終週のことに關しては、四福音記者何れも、他の時期に關してよりは、一層完全に、一層多様な報道を得るの便宜ありしものゝ如し。此の一事は、當時の出來事を順序よく排列するに多少の困難を來すと雖も、亦我等の知識に加ふるどころ尠とせず。此故に、此の時期は之を三部に分ちて研究せば、大に容易なるが如し。第一、エルサレムの最後の對論、第二、最後の晚餐、第三、賣られ、試みられ、遂に

十字架に釘けられ給ひしことは是れなり。
 百十二 或る意味よりいへば、復活と昇天とは、是れ最後のエルサレム行の結尾にして、最終週のこと共に研究せらるべき筈なり。されど、更にそれよりも大なる意義よりいへば、こはイエスが全傳道史の頂點にして随つて又イエス傳研究上の最終點なり。福音書の記事は此の點に於て使徒行傳の第一章及びパウロが復活のキリストに關する短報前十五〇三―八により補遺せらる。而して種々の記事、互ひに獨立して人を惑はしむるものなきにあらざれど、大体に於ては、能く相符合し、イエスの敵等が認めて其の進路を絶ち得たりとなせし悲劇は、却て目覺ましき勝利と變せしを示さざるはあらざるなり。

前期のユダヤ傳道に於ける出來事の概目

公傳道中の第一回の逾越。神殿の潔め(約二〇十三―廿三)。
 エルサレムに於ける初期の結果。ニコデモに對する講話(約二〇二十三―三〇十五)。
 教を脱ぎ、パプテスマを授くるため、ユダヤの僻地に退く(約三〇二十二―三十四、一、二)。
 パプテスマのヨハネの禁獄(太四〇十二、可一〇十四)。
 サマリヤを経てユダヤを退去す(約四〇一―四十二)。
 ガリラヤに於ける不意の歡迎(約四〇四十三―四十五)。
 ?カナに於ける第二の奇蹟。即ち大臣の子を癒す(約四〇四十六―五十四)(附録第四十一節參考)。
 ?を付するは、是れ或は其の順序ならざるかも知るべからざるが故なり。以下倣之。
 「ナザレに退隱し、弟子たち復たびその舊職に従事す。是れ太四〇十三路四〇三十一と太四〇十八―二十二及び其の同記事の點より推論する所なり。」

第二章 前期のユダヤ傳道

百十三 イエスは、其の一般的傳道をエルサレムに於て開始し給へりとは、是れ我等第四福音書によりて知り得るところなり。他の三福音書は、之に就て何事をも記せざれども、之がため、約翰傳の證言を疑ふべきにあらず。蓋し三福音書とても、

イエスが最後のエルサレム行に先立ち、屢次之を救はんとし給ひしとを推知せしむる記事少からざればなり(路十三〇三十四、太二十三〇三十七参考せよ)。之に加ふるに、第四福音書の尙ほ大に信すべき一理由あり。他なし、イエスの如き天職を遂行せんとすれば、必ず先づ其の民の重なるものを捨にすべき筈なりしと思はるゝことなり。否是れ殆んど其必至の勢なりしこと是れなり。夫れエルサレムの神殿は、早晚凡ての猶太人を引寄すべき禮拜の中心たり。イエスすらその幼時には、祭節の時、常にこゝに詣でたまへり(路二〇四十一)。又天下の神を禮拜するものは、悉くその面をエルサレムの方に向けて祈禱をなせり(但六〇十)。之に加ふるに、エルサレムには、學者の長もあれば、又祭司の長もありて住めり。之をエルサレムに比しなば、凡ての他の場處は、皆邊鄙のみ、其の影響また大なりと謂ふべからず。されば未だ初めより首府を救ふの望みを絶ちしにあらざるメシヤはそこに弟子を得んとするの擧を、久しく打捨て置く筈あらざるなり。

百十四 イエスは初春、即ち逾越の節にエルサレムに到着し、斯くてその年の十二月まで、ユダヤに滞在し給へり(約四〇三十五)。此の數ヶ月に關する約翰傳の記事は、極めて零碎的のものたるに相違なく、且つ其の自白を以て見ても(二十〇三十、三

十一二方に偏せし記事なるもの、如く、専らイエスのメシヤたるを願はし給ひし出來事と教訓とに重きを置きたるなり。我等若し一層詳かなる記録を得たりとせば、必ずや此のユダヤの前期傳道と後のガリラヤ傳道との類似は、今日の約翰傳と他の福音書を比較して知るよりも大なるものを發見せん。而もイエスは、廣く胸襟を開きて、此のエルサレム傳道を開始し給へるにて、こは後のガリラヤ傳道には、見るを得ざることなりとす。

百十五 イエスの神殿を深め給ひしことをメシヤ的宣言運動なるかの如くに思惟するは當を得ず。神殿内の商業は、精神的の宗教に對し、放肆極まる無禮とはいへ、是れ又全く無理由の施設にはあらず。即ち禮拜者は孰れも皆、レビの律法の認めて潔きもの、神意に適ふものとする犠牲の動物を祭司に、献げざるべからず。又神殿の賽銭箱に投すべき賽銭は、神聖なる『聖所』以外の錢貨たるべからざること是れなり。祭司の長等即ち、遠方より來る禮拜者にして、若し神殿の境内に、凡て禮拜上の必要のものを發見せば、嘸便利とすべきを認めたり。祭司政府若しくは其の代表者たるもの等も、亦斯る施設の成りたらんには、之に由りて必ず好收入あるべきを認めしに似たり。此の結果、市場的の精神、此の禮拜のために聖別せ

られし場處に侵入し、呼客折價の聲を以て之を潰すに至れり。特に、異邦の人にしてイスラエルの神を禮拜せんとする者に公開せられたる一區域は、紛乱混闘、強奪を以て満たされたり(可十一〇十七参考せよ)。斯く神殿の神器を蔑ろにしたる所爲は、多くの敬虔なるイスラエル人の敬神的感情を害したりと謂はざるべからず。苟もイザヤたり、又ミカたらんものは、斯る有様を見ては、必ず責め、必ず潔めたるならん。而してこれ正しくイエスの爲し給へるところなり。其の所爲は、只預言者たるの權威を以てしたる所爲のみ。此の事件を獨立に考ふれば、其の他には、何の意義もなし。國民の良心は此の商人追放の舉に後援を與へ奉りぬ。奇蹟力を以てせし如くに思ひ做すは、要なきことなり。彼等の混亂して立ち去りし所以は、一はイエスの道徳的熱情の然らしむる所にして、又一は、商人自ら神の家にて營業をなすは宜しからずとの意識ありしに由る。かのイエスの所爲を責めし者すら、市場を神殿内に置くこと可なりとは謂はず。只祭司の許可したる事件を混亂せしめたる擔保を示せとイエスに迫りしのみ。

百十六 他の福音書にありては、此の神殿潔めみやげのことは、イエスが傳道の終末點に記録せり。即ち之れを猶太人がイエスを忌みて、その極之を死に處するに至りし前に置きり。さて此の諸福音書には、最終週以前にイエス、エルサレムに傳道し給ひしことを記せざるを以て、此の神殿潔めを、その記録する唯一のエルサレム滞在の中のこととせしむること、其理いと見易し。されば約翰傳が之をこゝに置けること、又イエスは、禮拜の觀念を汚す所爲を否認し給ふべき筈なりしこと、を併せ考ふるに、此の神殿潔めは、蓋し精神的宗教傳道の幕開きと見るべく、その民を救はんとするの舉を終るに際しての結末的嚴責とは、思はれず。普通にイエスは傳道の始めと、又其の終りとに、兩回之を潔め給ひしなりとの説も行はるれど、商人等二回までも同様の責罰を受けしとは如何にも信じ難きことなり。されど又此の神殿潔めを最終週の話に加へしを不都合とは謂ふべからず。是れ此の事件は實際イエスに對するエルサレムの反對の導火となりたればなり。此の反對は、最初には、單に輕蔑的のものたりしに相違なし。されどイエス能く民の熱情を煽揚し、現状打破の恐れあるを見るに至りては、次第にその勢焰を増せり。

百十七 イエスが此の高手的舉動をなせし權威如何と質さるゝに對し、其の與へ給ひし答を見るに、此の一舉却て此の質問を導き出さんとの主意に出でしものゝ如し。即ち彼等を導きて、高尚なる禮拜の觀念、高尚なる禮拜の實行に至らしめん

とし給へるなり(約四〇二十一—二十四参考せよ)。さて彼等がイエスの所爲の擔保を求むるや、イエス直ちに、彼等が己れに従はんとする意なきこと、又其の唯一の擔保を了解するの力なきことを看破し給へり。イエスの神殿を潔め給ひたる理由は他なし、是れ人の靈を以て拜すべき場處たる神殿を毀ちつゝありし爲めなり。後日イエスはサマリヤの婦人に對し、神の禮拜は、場處に拘らざることを教へ給ひしが、今も亦ユダヤ人等の間に對し、汝等宜しく其の爲さんとする所をなし、神の家たる神殿を毀て、我れ直ちに、至高者に近づくべき真正の手段を人の靈魂のために再設せんと宣へり。此の答をなすに當り、イエスは往々その説教中になし給ひつる如く、形容の衣を其言に着せて曰く、「この殿を毀て我三日にて之を建んと。組織的ならざる彼の聽者に取りては、此の答は、徹頭徹尾隱語たりしならん。弟子すら、此の意味を解すること能はず。其の之を解したるは、イエスの復活彼等に教ふるに、神の人に接したまふ一新生面は、イエスによりて開け始めしを以てせし後にあり。

百十八 猶太の祭司等には、イエスの傳へ得べき唯一の使命を受くる準備なかりき。此に於てかイエスは、斷然深沈の態度を取ることとなれり。さりとしてイエス

は此時エルサレムに於て、多少の成功なかりしにはあらず。例せばイエスの療病は多くの信者を生じ、而して此の人々はイエスに關することとしいへば、悉く之を信せんとしたるが如きは是れなり。されどイエスは、此の祭司等の態度に徹し、少くともイエスの天國觀を多少領解し、而して善かれ悪かれ之に忠勤ならんとするほどのものを悉く弟子とせざるべからずとなし給へり。是れ此の祭司等の取りたる立場には、不吉の意義顯れ居たる爲なり。他なし、イエスには只容赦なき衝突と見へたることは是れなり。イエス既に彼等をして信せしめ得ざりき。而して彼等は、神の家を汚瀆するを合法なりと辯護せんとする輩なり。いかで神の使節たるものに對し、極端の反抗をなさざるべき。此の一事先づ劈頭に於て、イエスを困却せしめ奉れり。此に於てかイエスは一時國民の熱情を差し抑へ給ひぬ。是れ未だ、失敗に堪へ得る程に鍛鍊せし信仰ならざるを知り給へばなり。

百十九 されど斯くイエスに引付けられし者の中に只一人、イエスをして其の深沈を捨て、其の降生の目的たる眞理を明かに語り出でしめしものあり。此の人は、猶太の集議院の一議員にて、エルサレムに於ては、いと尊まれたるラビなりき。是れ即ちニコデモなり。ニコデモは、その同僚等が手を振ひて、イエスの主張を否定

するに反し、一夜此の新教師を訪問し、イエスが天國に關して眞理とする所のものを聞かんと乞へり。イエス初めに先づ此のイスラエルの教師に對し、古預言者の教に所謂るイスラエルは天國の來るに先だち、新しき心を有せざるべからず(耶三十一〇三十一—三十四、結卅六〇廿五—廿七)とあるを擧げて其の注意を促がし、次で、神の今、人に顯し給はんとする眞理は、人皆その所要の新生命を得らるゝこと、猶ほ疫病に惱みしイスラエル人等がモーセの擧げし銅蛇を見ると共に醫されし如く容易からんといふ一事に外ならずと告げ給へり。此會談は、記者ヨハナが、イエスを解釋して世を贖ふために送られし神の獨子といふの一端緒となれり(約三〇十六—二十一)。

百二十 約翰傳を以て見るに、イエスは此のニコデモとの會談後、幾許もなくして、エルサレムを辭去し給ひしに似たり。イエスの此の傳道は不成功と謂ふべからず。此後ニコデモは、其の忠信なる辯護者たりしが如くなればなり(約七〇五十一—五十二、十九〇三十九参考せよ)。加之、イエスがベタニヤの友人等と意氣の投合を見るに至りたるも、また此の滯京中のことと察せらる。是れ福音書が初めて此のベタニヤの家庭のことを記する時には、はや既に幾分かイエスと此の家族の關係

親密なりしを予想する如くなればなり(路十〇三十八—四十二)。かのアリマテヤのヨセフと交りを結び給ひしは、此の時か、將た後ちのことか、又その最終週に好意をイエスに示せし諸友人と相知りしは、此時か、將た後ちのことか等の問題を考証するは、寧ろ無益なるべし(可十一〇二—六、十四〇二十一—十六)。

百二十一 イエスはエルサレムの退去後も暫らくユダヤに止まり、バプテスマのヨハナの傳道の如き單純なる準備的傳道を繼續したまひぬ。斯くして其年の夏と初秋とは、過ぎ去りたるものゝ如く、預言者としては、バプテスマのヨハナよりも其の名聲一層盛んに揚りぬ。已にしてイエスの弟子等イエスを助けて、バプテスマを行ひしとの聞えあり。此の一事ヨハナの弟子中の或者等の嫉妬を招き、亦大膽不敵なる神殿の市場の騷擾者が新運動としてエルサレムの注意を惹きぬ。ヨハナの弟子等は、イエスの斯くの如き對抗運動を以て其師に訴へしに、彼自謙して『彼は必ず盛んになり我は必ず衰ふべし』といへり。之に反してパリサイ人等は、イエスをして此上ユダヤに傳道するは、目下のところ不可なりと感せしめ、由てイエスはガリラヤに退隠し給へり。是れ『預言者は本土にて尊ばるゝ事』なきに由る(約四〇一—三、四十四)。さてイエスは、其民を救はんと最初の一事に敗れしこと

なれば、此のエルサレム地方よりの旅行は非常に失意の旅行たりしに相違なし。而して急行の必要上、道を賤しむべきサマリヤに借ることとなりぬ。斯くて或日の正午、ヤコブの井の傍にて休憩中、偶然一個の婦人と會談し給ひしに、圖らずも、エダヤに於てよりは、一層智^ちこくその教を受け入れらるべき傳道の端緒を得たり。即ちイエスは、此の婦人に對し、其のエコデモに説きたるよりも、一層打ち明けて己れの誰たるを示し、且つ前に神殿を潔めて教へんとしたる精神的禮拜のことを之に説き給へり。夫れサマリヤは、猶太とすべて其の利害を異にすれば、イエスは此の『異』邦に、深沈の必要を認め給はざりしならん。而してこゝに滞在すること數日、イエスは心に格段の快感を覚え、エダヤに於て排斥を受けし失意の念もために一掃せられたるべし。

百二十二 イエスは何故急ぎエダヤを去り給ひしや。其の一理由は、思ふにパプテスマのヨハチに對する反抗運動のことを聞知し給ひしが爲めなるべし。イエスのガリラヤに出發し給ひし前か、又その直ぐ後ちかは知るべからざれど、ヘロデは、ヨハチが不相應の人望を有するを以て、公安に害ありと稱へ、即ち之を拘引せり(ジョシファスの「アンチキチチス」十八卷五の二)。恰かも善し、パリサイ人等も亦

此の野の預言者に對して、敵意を抱くあり。ヘロデは之にも其の聲援を得たるべしと察せらる(約四〇一—三を見よ)。第四福音書は、大抵此の頃に於てヨハチの禁獄の起りたるべきを推測せしむるに止まるも、三〇二十四、及び五〇三十五参考)他の福音書は何れも皆此の拘引事件ありたるため、イエスガリラヤに退去するに至りしとなせり。

百二十三 イエスはガリラヤに到着後、ナザレに歸省し給ひしが如く、又弟子等は、その常業に復し、以てイエスが之を新傳道に召募し給ひし時にまで至れり(百二十五節を見よ)。約翰傳を以て見るに、イエスが大臣の子を醫^いし給ひしは、此時にあり。此の大臣は、その病める子をカペナウンに止め置き、而して己れは、イエスをカナンに訪問し奉れり。イエス最初は、彼の近づき来るを拒絶するの氣色^{けいし}なること、猶はかのエルサレムに於て、奇蹟を求むるものに臨みたまひし如くなりしに、已にして父の切實なる、又信仰ある叫びを聞くに及び、直ちに醫療の言を發し給へり。此の出來事たる、馬太と路加の兩傳に記されし百夫の長の僕が癒されしことに能く相似たれば、こは同事の異録ならんとさへ唱ふる人尠からず。今、馬太と路加とに傳へらるゝ話が、此の大臣の話と異なる點より見て、約翰傳は、別事を傳へしものな

るを證明すること、必ずしも不可能にあらず。又兩事件の間の類似とても、その別事なるを證明するの害となるほどにはあらず。イエス、助けを求められて、之に接し給ひしこと、二つの場合に於て、互ひに相同じからず。又約翰傳所載の場合にありては、イエスそのガリラヤに新傳道を開始し給ひし以前の態度を失はず。即ちガリラヤに到着し給ひてよりは、其のエルサレムに於て起しつる狂熱の結果たる奇蹟的の信仰を避くるの意ありしに、眞實の要求、我が助けを求むるを見ては、又その意を翻し給ひぬ。

百二十四 之を要するにユダヤに於ける最初の傳道の結果は、其の表面、絶望また失敗といふべし。首府に於てイエスは、幾許だも信者を得給はざりしなり。否却て其の國民の重も立てる者の嫉妬と反對とを煽揚せり。成程その驚くべき事業の結果、國民の熱信揚らざりしにあらざりしも、是れとて、イエスが獎勵し給ふべき種類のものならざりき。斯くてユダヤの事情は如何ともし難きに至り、辱まれざる「預言者として、ユダヤに隠退し給ふに決したり。イエスは、最も好都合たるべきエルサレムに神の國を傳へんとて、上京し給へり。而も其の結果は、反對と、冷評と、皮相的の信仰なりき。事ここに至りては、他の場處に、他の方針に従ひて、新傳道を

開始せざるべからず。斯くてイエスは、其の故郷に退隱し給ひしと共に、弟子等も亦各自に己れの家にとは歸れり。

ガリラヤ傳道期に於ける出來事の概目

(第三章、第四章)

ヨハ子歌に投ぜられイエスがガリラヤに退く(太四〇十二-十七、可一〇十四、十五、路四〇十四、十五)。
 ナザレよりカペナウンに遷る(太四〇十三-十六、路四〇三十一上、半)。
 シモンとアンデレ、ヤコブとヨハ子召さる(太四〇十八-二十二、可一〇十六-二十、路五〇一-十二)。
 カペナウンに於ける最初の事業(太八〇十四-十七、可一〇二十一-三十四、路四〇三十一-四十二)。
 ガリラヤの第一次巡迴(太四〇二十三、八〇二-四、可一〇三十五-四十五、路四〇四十二-四十四、五〇
 十二-十六)。
 カペナウンに於ける癲癩病者治療(太九〇二-八、可二〇一-十二、路五〇十七-二十)。
 マタイ召さる(太九〇九-十三、可二〇十三-十七、路五〇廿七-三十二)。
 ? 断食に関する質問(太九〇十四-十七、可二〇十八-二十二、路五〇三十三-三十九)。(第四十七節及
 び附録第五十四節を見よ)。
 ? 無名の節籠に方リエルサレムに於ける安息日療病約五〇一-四十七)。(附録第五十三節參考)。
 ? ガリラヤの夢知に於ける安息日對論(太十二〇一-八、可二〇二十三-二十八、路六〇一-五)。(第四
 十七節及び附録第五十四節參考)。
 ? 第二次安息日對論。枯手者の治療(太十二〇九-十四、可三〇一-六、路六〇六-十一)。(第四十七節
 及び附録第五十四節參考)。
 イエスに従ふ者諸方より至る(太四〇二十三-二十五、十二〇十五-二十一、可三〇七-十二、路六〇十

七-十九)。

十二人を擧ぶ(太十〇二-四、可三〇十三-十九上、路六〇十二-十九)。

山上説教(太五〇一-八、一、路六〇二十一-七〇二)。(附録第五十五節參考)。

百夫の長の僕童さる(太八〇五-十三、路七〇一-十、約四〇四十六-五十四)。

ナインの喪婦の子を活かす(路七〇十一-十七)。

獄中のヨハ子よりの使命(太十一〇二-十九、路七〇十八-三十五)。

イエス悪行を爲せる婦に膏沃がる(路七〇三十六-五十七)。

イエスが第二次ガリラヤ巡迴の同行者(路八〇一-三)。

カペナウンに於ける鬼憑病者快愈とパリサイ人の冒瀆(太十二〇二十一-四十五、可三〇十九下、中、
 三十、路十一〇十四-三十六)。

イエスの眞の親族(太十二〇四十六-五十、可三〇三十一-三十五、路八〇十九-二十一)。

海邊の譬喩(太十三〇一-五十三、可四〇一-三十四、路八〇四-十八)。(附録第五十六節參考)。

颶風沈静す(太八〇十八、二十三-二十七)。(可四〇三十五-四十二、路八〇二十二-二十五)。

ガダラの鬼憑病者の快愈(太八〇二十八-三十四、可五〇一-二十、路八〇二十六-三十九)。

ナイロの女活かされ長病の婦人愈さる(太九〇一十八-二十六、可五〇二十一-四十三、路八〇四十一
 五十六)。

盲者と啞者の快愈(太九〇二十七-三十四)。

ナザレにて鞭斥せらる(太十三〇五十四-五十八、可六〇一-六上、路四〇十六-三十)。(附録第五十
 二節參考)。

第三次ガリラヤ巡迴(太九〇三十五、可六〇六下、半)。

十二人の傳道太九〇三十六一十一〇二可六〇七一十三路九〇二一六。(附録第五十七節參考)。
マブテスマのヨハ子死す(太十四〇一一十二可六〇十四一二十九路九〇七一九)。
イエス海を渡りて退居し又五千人を養ふ(太十四〇十三一二十三可六〇三十一四十六路九〇十一十
七約六〇一一十五)。

イエスカペナウンに歸らんとして水の上を歩む(太十四〇二十四一三十六可六〇四十七一五十六約
六〇十六一二十二)。

カペナウンの會堂にて生命のパンに關する説教約六〇二十二一七十一。(附録第五十九節參考)。

遺傳に關する對論。手を洗ふ事その他(太十五〇一一二十可七〇一一二十三)。

ツロミシドンの地に退く。サイロビニシヤの婦の女(太十五〇二十一二十八可七〇二十四一三十一)。

アカボリスを経て歸る(太十五〇二十九一三十一可七〇三十一一三十七)。

四千人を養ふ(太十五〇三十二一三十八可八〇一一九)。(附録第五十八節參考)。

ガリラヤに於けるマリサイ人の反對とマリサイ人の歸信に關する警告(太十五〇三十九一十六〇十
二可八〇一一二十一)。

ベテサイダ近傍に於ける醫者の快愈(可八〇二十二一二十六)。

カイザリヤビリビ近傍に於て、ベテロ、イエスをキリストと告白す(太十六〇十三一二十可八〇二十七
一三十路九〇十八一二十二)。

キリスト必ず死すべしとの新教訓(太十六〇二十一二十八可八〇三十一一九〇一、路九〇二十二一
二十七)。

變貌(太十七〇一一十三可九〇二一十三路九〇二十八一三十六)。

顯現童兒の快愈(太十七〇十四一二十可九〇二十四一二十九路九〇三十七一四十三上中)。

死と復活との切迫につき第二の預言(太十七〇二十二二十三可九〇三十一三十三路九〇四十三下中
一四十五)。

カペナウンに歸る。神殿の納金(太十七〇二十四一二十七可九〇三十三上中)。

豫言と教訓に關する説教(太十八〇一一三十五可九〇三十三一五十五路九〇四十六一五十一)。

標蘆節にイエス、エルサレムに上る約七〇一一五十二八〇十二一五十九。(附録第六十節參考)。

好姪の時執へられし婦人(約七〇五十三一八〇十二)。(附録第六十三節參考)。

左の諸件は、恐らくガリラヤ傳道期中、カイザリヤ、ビリビの告白以前のことに係る
ならん。(第百六十八節參考)。

弟子等祈禱を教へらる(太六〇九一十五七〇七一十一路十一〇一一十三)。

安息日に病婦の快愈(路十三〇十一十七)。

二の醫囑。芥子種と麩酵(太十三〇三十一一三十三路十三〇十八一二十二)。(附録第五十六節參考)。

富める悪人の譬(路十二〇十三一二十二)。

安息日の療病とマリサイ人の食卓に於ける説教(路十四〇一一二十四)。

五の譬(路十五〇一一十六〇三十二)。

連続なき若干の説教(路十七〇一一四)。

第三章 ガリラヤ傳道—其目的と方式

百二十五 三福音書の主題たるイエスのガリラヤ傳道は、其のナザレよりカペナ

ウ^ンに移りて、四人の漁夫を常隨の弟子に召し給ひしことに始まる。此等の四人即ちシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネとが、召しに應じて直ちに服従したるは、亦以て彼等が此時始めてイエスを知るに至りたるにあらざる面白き一證なり。即ち彼等は約翰傳にあるが如く前に會てイエスに従ひしことあり。而してイエスがユダヤに傳道し給ひし後、一時隠退し給ふに方りて、彼等もまた故郷に歸り、舊職に復し居たるなり。さてイエスのガリラヤ傳道の發達を叙して、活躍の感あらしむるものは、第一福音書なり。此の第一福音書は、該傳道の開始に二點あるを示し、其の第一は、イエスが天國を説き始め給へることにて、(太四〇十七)、又その第二は、己が受難と死とを預言し始め給へることとなす(十六〇二十一)。イエスが熱心なる民衆に對しての傳道は、蓋し此の第一點より第二點までの間にありて之を第一期となし、其の遂に第二點に達するや、聽衆を制限すると共に亦その使命を稍、非普通的になし給ひぬ。是れ即ち第二期なり。就中此の第一期中には、二の出來事ありて、紀元を畫す。第一は神の國を傳へ、イエスの醫療傳道を増すために十二人を簡派し給へることにて、(太九〇三十六、十〇一)、第二は、民衆の熱心その頂點に達せし時、五千人を養ひ給へるとなり、(約六〇十四、十五)。此の事件は、互に甚しく相隔絶せるも

のにはあらず。又ガリラヤ傳道發達の同程度に於ける兩方面を代表す。第一の事件は、馬太傳之に重きを置き、第二の事件は、約翰傳之に重きを置き、共に、馬可傳のガリラヤ傳道の記事のみにては、明らか難き話を能く了解するを得せしむ。余が本章の始めに掲げたる一表を見よ。こはガリラヤ傳道期に於ける出來事の順序を概示したるものにて、その順序は、馬可傳を基礎となし、之を補ふに、他の福音書を以てせるものなり。又路加傳の増補せるところは、其の事順を守らざりしと思はるゝ點を除けば、悉くその順序の儘に差し置き、隨つてナザレの擯斥は、馬可傳に見ゆる如くに之を後に置けり。又路加傳に特有なる一長文の材料は、その多分を此のガリラヤ傳道期間のこととなせり。是れ路加傳を見ても知らるゝ如く、其の精確なる時日も、場處も、共に之を知るに由なきを以てなり。次に馬太傳は、ガリラヤ傳道の概略を示して最も明了なるものながら、その細目に至れば、排列最も粗略を極め、事順を決する上には、何の資料ともならず。此故に該福音書中よりの材料は、馬可傳若しくは路加傳の同記事のところか、或は之に關連せるところに、手係りを發見するに隨ひ、その順序を定めたり。その次に約翰傳の貢獻するものゝ中にありて、かの民衆を養ひ給へる一條は、他の福音書中に見ゆる同一の話と照し合せて、明

かに其の順序を定め得たり。無名の節筵に、エルサレムに上り給へることは、その順序たゞ試験的にして尙ほ他日の考證を待つ。

百二十六 福音書の記事を全体として通覽するに、民衆の熱心の増進に伴ひ、官府の敵意また加はりしことは、人の注目を惹く一事なり。イエスがカペナウンの會堂に於ける最初の療病は、非常に民衆の耳目を聳動し、之がため、他の都邑に移らざるを得ざりしほどなりき。その後イエスはまたカペナウンに歸り給ひしが、群衆十重二十重にイエスを圍み、かの癱瘋病者の友人等は屋根を破りて僅かに之に近づき奉るを得しほどなり。斯くて多くの人々の諸方より來りて己れに隨ふに及び、其の弟子十二人を撰び給ひ、之を己と僭に置また教を宣傳る爲に遣すに供し、民衆列座の中、之に對して最も嚴重に、又最も愉快なる山上説教を説きたまへり。此の形勢はバプテスマのヨハチがヘロデに殺されたる後までも尙ほ繼續せり。是れイエス、ヨハチの殺されしを聞き給ひて、その弟子を率ゐ、ガリラヤの海を渡り、退居し給はんとしたる際、尙ほ病を療されんとする者、天國の教を聞かんとする者、堵の如くに集まり來りて、其の隱退を妨げしを見て知らるゝところなり。

百二十七 民衆斯る熱心を表したると共に、此の新教師の何人なるかてふ問題も

亦起り來れり。イエス最初はその權威ある教と、病を癒す力をもて此の人々に感動を與へしが、ナインに、養婦の子を活かし給ひし後は、イエスの人格に關する國民の感情大に定まり、大なる預言者われらの中に興ると絶叫するに至りぬ。次でカペナウンに鬼憑病者を癒すに方りては、疑問一步を進め、此はダビデの裔には非ざる乎とさへ怪しむものあり。イエスはメシヤならんとの觀念は、イエスの人望の進歩と共に、爾後益認承せらるゝに至りたるが如く、五千人を養ひ給ひし時に至りては、其の熱心勃發して、斯る適任者を王たらしめずんば止まざらんとする傾向さへ顯はれぬ。されどイエスは何等かの理由ありて、之を避け給ひしものゝ如し、約六〇十五。

百二十八 猶太の宗教家等は、此の民衆熱心の増進と共に、否幾分かは、之がための故に、いと早くより反對の態度を取り、且つ又之を繼續せり。福音書の中、イエスの批評家を以て、エルサレムのパリサイ人なりとせる場合尠からず。而してガリラヤのパリサイ人は、是れほどには、敵意なかりしものとせられたり。即ちイエスの初めてカペナウンに現はるゝや、安息日に會堂にて病を療し給ひしかど、是れさへ反對を受けずして止めり。それより他の場處を巡廻して歸り來りたまふや、其の

聽衆中に批評家現はれたり。(路加傳には之を直接にエルサレムと關係あるものとせり)。而して此の類の批評家は、其後續々出て來りて、或はイエスが癡癡病者の罪を赦せしことに反對し、(可二〇六、七)或は税吏の如き人外者と交際せしことを批評し、(可二〇十六)或はその弟子を救ふるに方りて、安息日に關する傳説に無頓着なるを詰り、(可二〇二十四)その療病の力は、惡魔と同盟せるが爲めなりと認めて、國民熱度の昂進を制せんとせり、(可三〇二十二)。斯くて彼等は、一の攻撃に失敗すれば、又他の攻撃を以て之に代へたりしが、五千人を養ひ給ひし後に至りては、イエスまた全然彼等の敬重する一切のことに無頓着なるを示し、其の弟子等が手を盥はずとの批評に答へて、權威的に傳説の全体を排斥し、兼ねて又レビの饌文に深き食物と深からぬ食物とあるをも否認し給へり、(可七〇一—廿三)。

百二十九 此に驚くべきことといふは、民衆のイエスに對する熱心大いなりしといふことに存せず。却てイエスに對する判断の躊躇決せざりし點にあり。イエスの公傳道に先だつこと一代前、ガリラヤのユダに與ふるに、多くの附隨者を以てせしものは、是れ此のガリラヤにあらすや。又イエスの傳道の一の後、ガリラヤのヨハナが羅馬に叛きし時、之れに與ふるに大聲援を以てせしものも、亦このガリ

ラヤにあらすや。さすればガリラヤの民にして若し單に、猶太國自由のための運動を率ゆべき首領出でたるを知らば、彼等必ず先を争ふて起ちたるならん。されどイエスに就ては、之をメシヤと考ふるを得ざる一種の事情存したり。他なし、イエスは、外よりする苦しみに對してよりは、内に潜める罪に對して、遂かに多くの同情を表し給ひしと是れなり。イエスが神の王國を待ち望みたまふは、猶ほゼロテ人の如し。されどイエスの待ち望み給ふは、外部の境遇に於ける王國にあらで、軍心の中の王國たりしなり。然り、而してイエスを誤解したるは、獨り、此種の人にのみ止まらず、羅馬に對する反抗運動を期せざること猶ほイエスの如く、神早晚直接にその手を下して之を審判し給はんと思ひし一種の夢想家すら、亦之を誤解せり。即ち迷へるものを求めて之を救はんとし給ふイエスには、天より送られし審判者たるに矛盾せるふし多く、之をメシヤと思料すること容易ならざりしに由る。斯くの如くにして、イエスは、國民の疑問となりぬ。彼等はイエスの預言者たることだけを確信したりしも、『此はダビデの裔に非ざる乎』との疑問起るに會すれば、懷疑家は、何時も之に對して、否答を預期したるなり。

百三十 而してこは、亦イエスの自ら預期し給ひし點なり。道理に基かざる熱心

は、たゞ其の事業を妨ぐるに止まればなり。されば、イエスが最初の頃の**カペナウ**ンの療病に、民衆の熱心、火の如くに燃え上るや、イエスは身を以て他の都邑に退き、その熱度の冷却を待ちたまへり。後ちまた多くの人々諸方より來りて之を圍むに方りては、イエスは山上の説教もて、ゼロテ人や默示的の夢想家の思ひ及ばざる奇想高説を彼等に傳へ給ひぬ。

百三十一 イエスが斯くその人格もて顯はし給へる所と、普通民衆の懷抱せるメシヤ的見解との矛盾斯くの如し。是れイエスがこの世にあり給ふ間、能く不當の熱心を防壓し得たる所以なり。されど鬼憑病者がイエスの非凡を絶叫し、以て超自然的の證言をなすの觀を呈せし時の如き、或は又病ある者、群衆より離れて獨り彼を求め奉りし時の如き、イエスは、之に對して、屢次沈黙を命じ給へり。さて此の沈黙の命令たる、之を民衆の熱度を抑制せんとするイエスの一努力と見るにあらざるよりは、到底解釋すべからず。されどイエスの在さる處にありては、人隨意に、イエスの力を考へ、以て種々の妄斷を下せしならん。イエスは、斯る無思慮の熱心を制し給ひしと雖も、その海の東岸に民衆を養ひ給ふに方りては、彼等之をメシヤとして、是非とも其の所思を貫徹せんとせり。その時イエスは、之に應じ給はざ

りき。而して斯くの如きは、イエスの警戒毋つせば、是れより以前に起りたるべき筈のものなりしが、事ここに至りて、民衆の熱度沈降し、イエスが普通民衆を相手の傳道も、一段落を告げぬ。たゞイエスは暫らく此の危機の到るを支へ、たとひ幾人にも、斯る民論に雷同せず、堅く永生の言を傳へ給ふものに隨順する人の出づるを待ちたまへり。

百三十二 さてイエスの警戒は、其のガリラヤ傳道の目的の一方面を露呈せり。他なし、イエスは其の宣へ傳へ給ひたる真理の、信受を求め給へりといふこと是れなり。イエスの使命は、其觀福音書の報道によれば、神の國近づけりといふにあり。而して此類の説教は、必ず人の熱心なる傾聴を博し得たるや疑ひなし。さればイエスも、最初は、此の説教をなし、且つ之に伴ふ事業を行ひ、以て民衆を集め、その熱心を呼び起すをもて満足したまへり。されど之と同時にまた己れの思想を民衆に表白するの機を失はず。單純の言を用ひ、日常の生活に關係し、品行の振肅を要求し、徒らに將來を美示する俗習を避けたれば、國民また之を誤認せん様もなく、其所期を果たすべきものは、必ず此の教師ならんとせり。此際イエスが、天國に關する教を説くや、顯れて來るものにあらずといひ、却て人の知らざる間に其中に現在

すること猶ほ密かに地中に生長する種子の如く、静かにパンの塊を膨脹せしむる麩酵の如きものとなせり。是れ初期の説教に於て然り。而して後に至るに随ひ、益々明かに此の趣旨を説き給へり。然り、イエスは、斯くの如く平易に、斯くの如く通俗的なる神國觀を主張するに、或は言と行とを用ひ、或は説教により、或は譬喩を借り給へり。而して『最好のもの、未だ顯はれず』となすは、イエス即ちパリサイ人、ゼロテ人、及び夢現者等と同意見なり。されど彼等の理想とせる最好のものは、何れも皆活る神と交通したまふ靈魂上の新將軍の主張と相容れざりき。而もイエスの凡ての教には、權威あり、獨立あり。一として其の天職の自信を示さざるはなかりしと共に、事己れの人格問題に及べば、一時暗晦の策を取り給へり。即ちパリサイ人の冒瀆を責め給ふにも、彼等の危きは、其の人の子に反對するがためにはあらず。却て人の子の事業に顯然たる、聖靈に背くがためなりと宣へり。之を要するに、イエスが此時の第一の目的は、弟子を神の國に網し入れんとするに外ならざりしなり。

百三十三 されどイエスのガリラヤにあるや、己れの人格に關する人の意見を冷視し給ひしにあらず。かのカイザリヤ、ピリビに於ける一間の如きは、その傳道の

目的を一層明かにするものといふべし。此故にイエスは、専ら其の天國を説き給ふ間にも、自己主張の必要生じたるを見ては、未だ曾て躊躇し給ひしことあらず。是れそのパリサイの批評家に對する應接に徹して明かなり。イエスは多く彼等と議論を上下し給はず。却て反對論に超然たる權威を示して、人の子は罪を赦すの權能を具へ安息日の主にして、神殿よりも、ヨナよりも將た又ソロモンよりも大なることを主張し給へり。加之、イエスはまた積極的に新真理を教へ給ふに方りても、當るべからざるの權威を示し、人をして『我爾曹に告ぐ』てふ一句に存する異常の要求に一驚を喫せざるを得ざらしむ。さすれば、第二に、イエスはまた弟子を己れに得んとし給ひしを見るべし。

百三十四 ガリラヤ傳道の關鍵は、バプテスマのヨハネの使者に對するイエスの答即ち是れなりと謂ふべし。ヨハネは獄中にありて、イエスの傳道を傳へ聞きたるが、檢し來れば、イエスがメシヤ的希望に照應したるところ妙からず。されど亦之に照應せざるところも多く、その努めて示威的運動を避くるが如きは、世に行はるメシヤ的思想と相衝突す。こゝに於てか、ヨハネは、自ら前に抱きたる確信の正否如何を疑ふに至りぬ。抑もヨハネは、その心眼曾て遽かに開け、イエスを指し

て之を神の羔と呼びたることありしが、今また忽然其の反動に陥りぬ。是れ怪しむべきことにあらず。殊にその鬱勃の活力を懷きて、鐵窓に呻吟するに至りたる時に於て然りと、いふべし。而してイエスも亦之を怪しとし給はざりしは、そのヨハチの質問に對する處置を以て見るも、又使者の去りし後ちヨハチを評し給ひし言に、徴するも明了なり。而もイエスは、其の答に於て、ヨハチ若し見るところを誤まらずば、その問は已に答へられしものなるを、穩かに指示し給へり。此時イエスは單に、其の萬民の前になし給ひしことを擧げ、之を行ひし者の何人たるかは、ヨハチ自ら之を判断せよと言ふのみ。但しイエスは唯一つ之に助力を與へたまひ（即ち以賽亞三十五〇五以下、六十一〇一以下の言、之に付加して、我ために贖かざる者は福なり」と宣ひぬ。斯くしてイエス、こゝには其の事業に重きを置き、其の使命をして其れ自ら之を語らしめ給ひしが、奇蹟の信仰より、人格の信仰に移り行かんことは、其の確かに期待し給ひしところならずんばあらず。見よイエスは、カイザリヤ、ドロビに於て、己れの人格に關する意見が、その見て以て大切とし給ふ所なるを弟子等に示し給ひぬ。由て思ふに、ガリラヤに於ける傳道中には、以上二重の目的絶へず現はれたり。其の最初に己れに注意せしめずして、己れの使命に注意せ

しめんとしたるは、是れ其の見て以て神の國となす處へ、弟子を網し入れんとすればなり。已に其の神國觀に信隨するに至りたるを見ては、イエスは其の神國の王として認められ、神のその民に約束し給へるメシヤとして認められんことを希ひ給ひぬ。されば、イエスの自ら其の使命の背後に隠れ給へるは、畢竟是れ人をして己れの尊重する真理に体達せしめんが爲めに、こは亦やがて、喜んで人の己れに歸するに至るべき基なるを知り給へばなり。

百三十五 イエス已に斯くの如き二重の目的を抱きたまふ。是れ其の人望の沸騰せる際に退隱し、神の國の精神性につきて嚴重の教を垂れ、且つ人に命じて其の奇蹟を傳へざらしめ給へる所以なり。イエスは、神に膏沃がれしものとして知られ、思惟せられ、また承認せられんことを希ひ給ひしと雖も、眞に其の指導に服して然るにあらざるよりは、之を求め給はず。即ち弟子たるものは、たとひ如何ほど己が期待に背けるどころあればとて、尙ほイエスを主と崇め、而して之に従ふこと、是れ其の當然なり。次にイエスの斯くの如き目的はまた、祭司等の批評に對して、正直に自己を主張し、高く己れの人格を維持し給へる所以の理由を説明するに足れり。イエスは、自ら人に主たるの自覺を欺くを欲し給はず。又批評家の不在なる

時は、人をして大膽に己れを思考せしめ、又その現在する時は、人をして臆病に己れを思考せしむるを欲し給はず。此故に、イエスは、必要の場合には、人をして神殿よりも大なるものとして、又安息日の主として之を考へしめ給ひぬ。されど此の種の自己主張が、其の目的を助けたるは、猶ほ其の自己韜晦が、その目的を助けたると同じ。是れ人をして、祭司等の宗教觀に對するイエスの反對説を審慮せざるを得ざらしむればなり。

百三十六 イエスの用ひ給へる方式は、前に己に度々之を説けり。即ち一方に於ては、教訓と説教とにして、他方に於ては、人を助くるの事業是れなり。此期に於ける教訓の性質如何は、山上説教と、譬喩的講話と、十二人に對する教誨との三に由りて之を窺ふを得べし。就中山上説教は、馬太の傳ふる所と、路加の傳ふる所と、稍相異なり。即ち馬太の報道は、たとひ、此中より路加が後日のものとなせるものを除去したりとも、尙ほそれよりは完全なるところあり。さて此の説教は、諸方より集まり來りし群衆の中にありて、イエスが其の弟子に語り給へるものにて、先づ世に輕視せらるゝ人々に對する賀辭を以て始まり、其の實神の國を相續し得べきものは、斯くの如き人々なりといひ、次で斯る神國の相續者が乏しき者を助くるの責任

あることに及び、且つ從來のイエスの言を行ふには、國民固有の宗教に冷淡なるかとの疑を懐かしめし恐れもあるを以て、己れの來りたるは、舊きを棄つるが爲めにあらず、却て一層嚴正なる義の標準を立て、其の代表する靈的觀念を實現するにあるを丁寧の説明し給へり。斯くてイエスは、其の嚴正なる義を示すために舊き律法を再説し、また當時に行はれたる宗教的行爲を批評したまふもの、數番、遂に、他人の過失を批評するを喜ぶことを戒め、嚴かに「我この言」の大切なるを説きて之を結ぶ。抑も此の新律法の要求する義は、舊に舊律法に比して嚴正のものたる而已ならず、亦無限に是れよりも貴しと謂ふべし。是れその一層通俗的に日常の生活と關係し、且つ活ける神に對して、一層親密の交際を要求するを以てなり。

百三十七 路加傳には後日のものとせられて、第一福音書には此の説教に含ませたる諸教訓は、山上説教の補遺と見るべく、神の子たるもの天父の保護を知りて信仰の生涯を送るべきを命じたり。之を馬太傳の記事に徴すれば、必ず原説教に屬せりと見るべきものにて、路加傳に掲載せられざるもの尠からず。こは新福音と舊律法との關係に就ては、異教の讀者は、イエスの聴衆や、第一福音書の讀者ほどに、興味を有することなきがためなるべし。此故に、路加傳は、舊き律法を再説するこ

とも、現行の風習を批評することも兩つながら之を避けたるなり。また第一福音書が、此の山上説教中に記載したる教訓と同様のものにして、路加傳には之をその一種特別の場處に記載したるもの尠からず。思ふに是等の教訓も亦、ガリラヤ傳道中のものたりしに相違なく、その誠實を勧め、神の前に敬虔の生涯を送り、天父に信任し、其の愛と保護との確實を頼むべきを慫慂すると相同じく、カイザリヤ、ピロピの告白後、イエスの教訓中に加はれる審判の切迫を説く分子毫も是れあるを見ず。

百三十八 第一福音書と第三福音書の原本たる馬可傳には、先づ弟子たちの注意を惹かんとて、譬喩の使用せらるゝを見る。而してこは、パリサイ人のイエスに對する反抗稍激甚となり、反對の氣焔が尙早に絶端に達するを防ぐ必要ありし後のことなり。當時イエスは、弟子等に解すべからざる譬喩の形を撰び、イエスと其の使命に何等の同情なき聽衆をして混惑せしめたり。馬可傳の記する所によるに、(四〇十二)此の混惑は蓋しイエスの目的に副ふことたりしなり。されどイエスは、是等の譬喩を用ひて、其批評家を惑はしむると等しく、教へ得べきものを教へんとしたること明瞭なり。是れイエスが種蒔きの譬を説明したる時、弟子等は、説明

を用ひずして、之を悟るべき筈なりとの意を漏らし給ひしを以て知らるべし(可四〇十三)。されどイエスの譬喩の多くは、斯る謎的の性質を有せず。全くその聽衆をして意味を解し易からしめんとの主意に出でたるなり。イエスは初めより終りまで、此の種の教訓を用ふることを廢せず。而して種蒔きの譬喩と關係ある譬喩に於て、弟子等を駭かしめたるものは、譬喩を使用すといふことにあらず、却て不可解的の譬喩を使用し給ひしことにあり。是れ山上説教の結尾たる賢き建築者と、愚かなる建築者の譬喩を見て知らるべし。路加傳特有の場處に見ゆる譬喩の或ものは恐らくガリラヤ傳道期のものなるべく、或はそれよりも更に前のものかも知るべからず。此等の譬喩は、謎的の性質を有せず。又イエスが晩年の譬喩なども、その聽衆には、單純平明の者たりしに似たり。すべて東洋人は、抽象的のものよりも、具體的のものを好めば、その教師等も亦廣く譬喩を使用したり。さすれば、イエスが譬喩を用ひ給ひしは、異常無比のことにあらず、その用ひ給へる譬喩の單純にして且つ美なるに至りては、古今獨歩といふべし。是等の譬喩は、當時イエス之を啓發のために用ひしか、或は混惑のために用ひしか否かに論なく、今日尙ほ之を神と人の關係につき、又は神の王國と人の之に對する關係につき、何等

かの眞理を具体的に顯すに用ゐる得べからざることなし。斯くて譬喩を用ゐて人を教ふるの一法は、其の聴衆の歓迎せし所にして、又人を引き寄せるの一引力たりしなり。

百三十九 第一福音書は、尙ほ他の一大講話を此のガリラヤ傳道期のものとせしめり。他なし、十二人に對しての教誨是れなり。抑も十二人の簡派は、ガリラヤの危機目睫の間に迫れる時に當りての一新紀元なり。イエスは之れに由りて己れの事業を倍せんことを圖り、己れの病を療し、教を説くが如くに、弟子等も之をなさんことを任命したまへり。その傳道地を限りてイスラエルとなしたるは、(太十〇五、六)他意あるにあらず、イエスが自らガリラヤ傳道期中、己れに適用したまへる規則を弟子等にも適用し給へるのみ(太十五〇二十四)。今、馬可傳と、路加傳の記事を比較し、更にまた馬太傳に於ける教誨の性質を比較するに、第一福音記者は、こゝにも亦、イエス一代の各期より同性質の教訓を採集するの慣行を襲用せしと覺し。馬太傳の十章を以て見るに、イエスの傳道は、己に人望の期を過ぎたるもの、如く、その弟子等も亦、輕蔑と迫害とをもて遇せられざるを得ざりしに似たり。是れイエスが公生涯の終りに於ける有様にて、之と同様の言は、エルサレムの最終週中の記

事にも亦見えたり。

百四十 山上説教と譬喩との主旨を以て、之をイエスがパリサイ人の批評及び胃潰に對する自己主張に比較するに、その相違著しきものあり。普通にはイエス、人の注意を己れに集むるを避け、只己れの既往を見て知り得たるところにより、我が人物觀を定めんことを希ひ給へり。然るに其の教訓の表面下に入りて之を見れば、民衆を驚かせし權威の調子、かのパリサイ人の批評に答へて、從容、人の子、地にて罪を赦すの權あり」といひ給ひしと同様なるを見る。

百四十一 イエスが民衆を引寄せ給ひしは、獨り其の教訓によりて而已にはあらず、又その大なる事業によりてなり。イエスは、其の同時代の人に取りては、確かに奇蹟を行ふ者、また病を療す者なりき。而してイエスが如何ばかりの印象を與へたるかを解せんことすれば、福音書の奇蹟が如何なるイエスの性質を顯せるかを觀察せざるべからず。抑もガリラヤに於て人の注意を惹きし大なる事業としいへば、主として疾病の治療にして、時々また物質的に其力を顯し給ひしこと、猶ほ暴風を静め、五千人を養ひ給ひし等のことあり。此の諸の奇蹟に就て、著しきこととしいへば、何れも皆一様に其の目的の利他的にして、其の方式の單純なると共に、一も

観物的の分子あらざりしこと是れなり。げにイエスは、屢次、批評的のパリサイ人に對して天よりの休徴を拒みたまひぬ。されどこは、ヨハナに對する答に、奇蹟に訴へ給ひたるにても知らるゝ如く(太十一〇四―六)此の時代に休徴を大切ならざりし給ひし爲めにあらず。却て民衆に對する傳道上、已に有り餘るばかり休徴を示せりと感じ給ひしが爲め而已。こは其の爲すところ、悉く天の權能を證明し、悉く彼を送りし天父の性質を表顯すればなり。

百四十二 イエスの癒したまへる疾病の中、最も普通なるものゝ一は、福音書に記して鬼に憑かれし者とあるもの是れなり。當時一般に行はれたる觀念によれば、悪鬼なるものありて、能く人の中に寄寓し、その舌を用ゐて語り、その身体によりて働くと共に、又種々なる肉體上の疾病を之に蒙らしむといふ。斯る鬼憑病者を癒せし特別の例は、ガリラヤ傳道中に六回記載せられ、此の外に尙ほ多くの鬼憑病者を癒せしめてふ一般的の記述あり。尙ほ此の六回中ガダラの鬼憑病者は、躁呼狂の徴を呈し、カイザリヤ、ピリビの近傍にて癒されし童子は、癩癩の症候を顯し、其他の場合にありては病狀稍局部的にして、或は暗啞たり、或は替者たり、或は兩者を兼ね。而して治療の場合には、イエス、鬼憑病者に對して、悪鬼よ、離れ去れと命するを常と

し、また此の命令の前後に、イエスは大聲を以て迎へられ、神の聖者てふ認識を伴ひしとも亦往々あり。

百四十三 さて斯る狂氣と其の治療を記するもの、獨り新約書にのみ限らず。かのサウル王にのぞみし悪鬼といふも之と同類にて、ジョシファスの記するところによれば、猶太の道士は、ソロモン王以來傳はり來れる咒文を用ゐ、鬼に憑れし人を癒せりといふ。古代の基督教師父は、悪鬼、基督教道士の命によりて人を離れたりとの論法にて、基督教の眞理を宣明せしこと往々あり。又中古及び近代に於ても人の鬼憑病なるものを信するは珍らしきことにあらず。殊に歐洲の農民中、迷信多きものゝ間に於て然り。之に加ふるに、支那及び東洋諸國に於ける宣教師の報道によれば、新約書の鬼憑病と酷似せる疾病を見ること多く、是等は基督教牧師の手により、往々快愈を見ることありといふ。

百四十四 所謂る鬼憑病なるものゝ症候と、又發狂、癩癩、歇私的利などの如き、心的及び生理的錯亂の症候とが、互ひに相類似せるを以て見るに、鬼憑病なるものは、心的生活と生理的生活との關係不調和なるより起る諸病と同類のものといはざるべからず。若し此の斷案にして妥當なりとせば、鬼憑病てふ觀念は、古人が廣く世

に行はるゝ未開的の信仰に従ひ、不思議の症候を解釋せんとしたる舉なりと謂ふべし。而して此の解釋若しイエスの誠實、イエスの知識等に差支を來すことなしとせば、疑ひもなく一般に採用せらるべきものなり。されど福音書には、イエス此の鬼憑病を現實のものとして取扱ひ給ひしことを明記し、之を療するにも病者に對して語らずして、之を侵せる惡鬼に對して語り給へるは如何。イエス若し鬼憑病を迷信と知りつゝ、斯くし給ひしとせば、人類をして惡と罪との配下より脱せしめんとしたる其の天職に忠實なりと謂ふべきや。又若し其の時代の迷信に染まり居たるものとすれば、其の自稱するが如き救主たるに必要の完全なる知識ありしものといふべきや。凡そ是等の問題は、重大且つ困難のものなりとはいへ、是れイエスの知識の廣狹てふ問題の一部分なれば、此の問題全部を論ずるの際二百四十九節以下二百五十一節に論じなば、一層好都合ならんと思はる。たゞ此に斷言して差支なきことは、イエスの時代に於ける鬼憑病の性質に關しての斷定は、今日同様の症候ある疾病に適用しても、不當ならずといふことは是れなり。

百四十五 イエスの病を癒し給へるを見て、人の驚きたるは、單に其の病を癒し給ひしことにあるよりは、寧ろ其の人格的權威を顯して之を癒し給ひし點にあり。

されば、其の療病は即ち其の教訓と同様人をして己れに注意せしめ、又こは如何なる人物かと疑ひ思ふ念を起さしむる基となれり。されど是れよりも尙ほイエスの目的に取りて有効なりし一事あり。他なし、此の療病は、人の識らず知らざる間に、その心をイエスに結び付かしむるため、微妙自然なる人格的感化力となりしことと是れなり。之を要するに、イエスの教訓と其の療病とは、自啓上無比の好手段たりしと謂ふべし。イエスが此のガリラヤ期中に於ける不斷の任務は、其の常隨の友人を得んとする一事にあり。之を果たすためにイエスの専ら用ひ給ひし力は、ルナンが稍小説的に呼稱して『愛嬌』といへるもの是れなり。イエスに此の愛嬌あり。是れかのガラヤの漁夫や、カペナウンの稅吏等が、預定の宗教的觀念とメンヤ的希望とは、斷えず失望しながらも、尙ほイエスの傍を離れず、イエスと其の進退を共にしたる所以なり。又罪ある婦人の信用を得たまひしも、マグダラのマリヤ、アスザンナ及び其の他の『所有を以て供事』奉る程の多くの婦人たちの歸向する所となり給ひしも、全くこの『愛嬌』の力なり。げにイエスが、其の人格的感化力もて、ペテロたるもの、ヨハナたるもの、パウロたるもの、生活を一變せしめし而已ならず、又當時の宗教的觀念をも刷振したりしは、初代基督教の著しき奇蹟なり。基

基督教の新分子の秘密は直ちにイエスと相接して救はるゝといふこと全く此のナザレ人の人格的勢力に外ならず。民衆はイエスの奇蹟を見、亦イエスの妙語を聞きしをもて、之に従ひ行けり。殊に多数のものは、此の新預言者こそ、遂に羅馬の權下を脱せしむべき勇將ならめと信じて之に従へり。されど斯る徒は、此の新勇將を自己の目的に用ゐ得べからざるに失望して、何時の間にか離散し、ガリラヤ傳道も、こゝに失敗の觀を呈したり。只之をして、全失敗に終らざらしめしは、イエス爾曹も亦去んと意ふやと問ひ給ひしに答へて、主よ我儕は誰に往んや永生の言を有る者は爾なり〔約六〇六十七六十八〕と答へ得る少数者ありし一事なり。此の少数者は、何れも、イエスの人格的勢力を感じ、救主を愛するてよ新宗教の柱石とはなれり。

百四十六 此の少数者の信否如何を定むべき試金石は、アンテパスがバプテスマのヨハチを處刑したる後、幾許もなくして到來せり。此の悲報は、イエスと其の十二弟子とが、カペナウンの巡廻傳道を終りて歸りし頃、ヨハチの弟子等により、イエスに齎らされつ。而して此の弟子等は、イエスの忠告に基き、休養のため、海の東岸へと退居せり。思ふにイエスを中心とせる一小團體も、暫らくヨハチを死に處せ

しほどの暴君の領内を避けんと希望したるならん。是れイエスは、此時未だ、その生涯の危機に臨むべき準備をなし居らざりし故なり。而して此の隠退の希望は、カペナウンに於て、イエスを包圍する民衆の猛烈なる熱心の故に一層必要となりしならん。げに彼等のイエスに對する熱心は、頑強といふべく、イエスをして休養を取るの邊なからしめ、その舟に乗じて對岸に渡航したりといふを聞くや、多数のもの海を廻りて之に従ひ往きし程なり。而して人に事へられんためならで、人に事へんために來り給ひしイエスは、己れに迫り來るこの群衆を拒否すること能はず。直ちに之を接して神の國の事を語り、かつ醫を求る者を醫したまひぬ〔路九〇十一〕。斯くて此日もその傳道に暮れし時、弟子等の齎らしたる少しのパンと魚とを取り、疲れし民衆を養ふとて、之を増殖したまへり。而して民衆中の或るものは、此の奇蹟を見るや、此上もはやイエスが約束のメシヤたる證據を要せずとなし、來て彼を執り王に爲んとす〔約六〇十五〕。イエス之を知り、彼等を避けて、その夜を祈禱に費したまひぬ。

百四十七 斯く民衆が、俄かにイエスを王とせんと定めたるには理由なきにあらす。是れ恐らくは、後世のラビの著書にもあるが如く、モーセが野にマナを民に與

へしと同様、當時メシヤも亦その民を養ふべしとの觀念、行はれ居たる爲めならん。イエスが之に對して靜かに與へ給ひし抗拒は更にその効なく、翌日カペナウンの會堂にて、彼等がその奇蹟の意義を誤解したるを明言したまふに至り、僅かに其の熱度を冷却するを得たり。彼等はたゞパンと食物を思ふのみ。之に反して、イエスの望は、彼等が此の奇蹟を見て、イエスに精神的の要求を滿す力あるを知るに至らんことなり。而してイエスは、之を其の實際的天職なりとし、此の外には亦別に天職あることなしと主張し給へり。抑も民衆は、是れまで已に預期に反せること多かりしも、その熱心のため、悉く之を不問に付し置けり。されど、イエスの權威、イエスの人格の力は、一時彼等の希望を維ぎ、早晚その假面を撤して、公然メシヤの事業に着手し給ふべきを期待せしめたり。然るに今や、其の義務に相違なしと見ゆるをも拒否し給ふに遇ふ。いかで民情激變なかるべき。果して此後は、その弟子多く返往てイエスと偕に行かざりき』約六〇六十六。今や淘汰の時は到來せり。イエスは己れを王とせんとするが如き輕擧のガリラヤ民衆に有り得べきを預知し、若し斯くの如きこと到來せば、之に惑はされざらんことを兼て心に期し給へり。而して今日公然の傳道の行はれ居るに際し、民衆悉く散じて又彼と共に歩まず。

此に於てか、イエス、十二人を顧みて、『爾曹も亦去んと意ふや』と問ひ、而して彼等の答辯はイエスの方法の必ずしも無効ならざりしを示せり。即ち彼等は、其の幻想の消滅せるにも拘らず、尙ほイエスに従へるなり。是れ彼等は、イエスに於て、其の預想以上のものを發見せしによる。

百四十八 此の出來事の非常に大切なる意義を示して明了なるものは、第四福音書なり。他の福音書は、民衆の輕擧に關しても、イエスの拒否に遇ふて、民情激變せしことに就ても、一言なし。但し他の福音書の記事を以て見るも、イエス此後從前の傳道地を避け給ひしことを知るべく、又時々カペナウンの近傍に歸り給ひしと雖も、反抗の精神を以て迎へられ、それがため直ちに去つて靜かに語らひ得べき土地に赴き給ひしを見るべし。

百四十九 ガリラヤ傳道數月間の結果は、芥子種の粒か、少許の麴酵以上のものにはあらず。此間民心一時浮き立ちて、次第にその熱を加へ、遂にその絶巔に達せしかど、又暴かに降落せり。而して又一方には、有司の反對、夙くより萌すあり。目を經るが儘に、益々その勢を加へたり。果して然らば、イエスが權威を以てし給ひし驚くべき教も、病者に施し給へる休徵も、或は路傍に、或は荆棘の中に、或は磽确地に播